紅葉狩の刻

須藤勝見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅葉狩の刻

【Ｎコード】
Ｎ３８９４Ｚ

【作者名】
須藤勝見

【あらすじ】
２００９年、初秋――― 古代より鬼女紅葉の伝説が色濃く残る長野県の寒村、水瀬村。 そこは二年前に起こった連続殺人事件の舞台となった村でもあった。 家庭の事情で水瀬にある高校に進学した柏木行幸（かしわぎみゆき）は、無理やり入部させられたサークル「フラタニティ」で、主催にしてお嬢様の斎宮葵（いつきのみやあおい）にこき使われて慌ただしい毎日を送っていた。しかし、行幸のそれなりに平穏で充実した学園生活は、一人の転校生の登場により、徐々に壊れ始める。 不審な行動を繰り返す転校生、これまで仲間だと思っていたサークルメンバーたち

の秘密、学外の不良たちとの騒動――――　様々な出来事を乗り越え、鬼女紅葉を祀る例大祭を迎えたその日、行幸の友人の一人が死体となって発見される。　それが、これから始まる大量連続殺人事件の幕開けだった……　「ひぐらしのなく頃に」リスペクトのオリジナル伝奇推理小説　【連載中・未完結】

【序】（前書き）

この作品は「ひぐらしのなく頃に」リスペクトの伝奇物推理小説の内、出題編です。
まだ出題編自体完結してはおりませんが、行幸たち「フラタニティ」のメンバーの物語をお楽しみ頂きながら、「作者」の仕掛けた謎を推理して頂ければこれに優る幸いは御座いません。

とは言うものの、推理が主題の作品ではなく、あくまでハラハラドキドキの青春群像劇としてお楽しみ頂ければと思います。

後、この作品は架空の物語であり作中に登場する地名や人名に関しましては現実に存在するのものとは異なります。建前としてはそういう事になっています。
何卒、お汲み取り頂けますようお願い申し上げます。

【序】

【序】

＞ｉ３７０６６＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞４６２９＜

紅葉狩＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞もみぢがり＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞

「拾五将軍惟茂（よごしゃうぐんこれもち）、紅葉（もみぢ）がりの時山中にて鬼女（きぢょ）にあひし事、謡曲（ようきょく）にも見へて皆人のしる所なれば、ここに贅（ぜい）せず」

今昔百鬼拾遺、鳥山石燕

―――――――

―0―

僕にとって、斎宮葵（いつきのみやあおい）は、地獄からやって来た天使みたいな女の子だった。

容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能、毒舌三昧、家事最低、村一番のお嬢様で――紅葉の継承者。

葵の命じるがままに奔走する日々の中で、僕はこれまでの人生で獲得した色々なものをさらけ出し、点検し、整備し、捨て去る事を余儀なくされた。

葵は僕にとっては鏡みたいな存在だったのかも知れない。だからこそ、葵と過ごしたこの半年間は、僕にとっては苦労の連続であると同時に救いでもあったのだ。

だからこそ僕は彼女のそばを離れることができなかったのだろう。

僕がその気になれば、いくらでも逃げ出す機会はあったはずなのに、葵と彼女を取り巻く環境とそしてその周りで起こる全ての出来事に背を向ける事が、僕には出来なかったのだ。

もちろん、逃げたいのであれば、今からだってそうすることは出来る。全てを見なかった事にして、これから起こるであろう出来事を他人事であると決め込み、独りで物語から退場する事は出来る。

でも、僕はそうはしない。

僕がこうして物語を紡ぐのは、僕が今まで生きてきた人生って奴の積み重ねからの必然で、それ以上の理由はない。

誰だって、生きる目的はあるにせよ、生きていること自体に理由なんていうものは存在しないのだ。

僕たちは生きる為に生きているのであり、生き残っていくために思考する。そして、思考する為に物語を紡ぎ、物語を存続させるために出力していく。それ以上でも、それ以下でもなく、だからこそ僕たちの全ては物語の中に含まれている。

我物語る、故に我有り。

物語られる事、後世に伝えられる事、他人に伝達される事、それだけが真実として歴史に積み重なっていく。いくら物語の輪郭を撫でて、外側から全体の形を把握し、物語の中に潜む事実を語ろうとしても、それは結局真実ではない。郡盲像を撫でるが如く、本当の出来事、事実、真実と言うものは、物語の外側ではなく、内側にしか存在しない。

物語られる事、表現される事、出力される情報だけが、この世界の全てなのだから。

＊＊＊

これから始まるのは、一人の可哀想で小さな少女、斎宮葵の物語だ。

そして、葵の周りに集まった人々の物語だ。

葵は、そこに居るというだけで周囲に影響を与える、どうしようもない程悲しいカリスマ性を持っている。

葵自身が動かなくても、むしろどれだけ停滞したいと考えていても、周りが彼女の影響を受けて自動的に動き始める。

【いついかなる時でも、状況その物が自身の周りを周回するが為に、中心に居る事を余儀なくされる少女】

それが、斎宮葵の本質だ。

だから、僕だけが特別なんていうことはありえない。

僕だけが葵の影響から逃れられるなんていう事は、有り得なかったのだ。

なのに、僕はそれに抗おうとした。葵を縛る見えない力を振りほどき、あまつさえそこから葵を助け出そうとした。葵が本当は何を

考えていたのかなんて知ろうともせず、ただ盲目的に自分の可能性を信じ切って、自分だけは葵の事を分かったつもりになっていた。

――――他人の考えを理解するのはとても難しい事だ。僕たちは、自分の事だってまともに理解できない。他人を理解するなんて、おこがましいにも程がある。だけど、それでも人は他人と分かり合わないと（少なくとも、分かり合ったフリをしないと）生きていけない。

だから、僕たちはコミュニケートする。

文字で、口話で、手話で、視線で、肌を重ねて。情報を交換し、ソーシャルを構築し、ソフィスティケイトし、コミットしていく。それが誤解であろうと、錯覚であろうと、お互いに分かり合えているという確信がなければ、とても僕らの複雑に進化しすぎた社会（セカイ）を維持する事なんてできないのだ。

そして……多分、僕は葵を理解することに失敗した。

分かっているつもりで、葵の事なんてまるで理解してなかった。あいつがどんなつもりで僕を見つめていて、どんな気持ちで僕の手を握っていたのか。

分かったつもりで誤解していて、誤解であると気がつきもせず、そもそも人と人との理解なんて錯覚であるという心構えも無かった。傲慢だったのだ。

葵だけじゃない。この水無瀬村にやってきてから半年、僕が知り合った全ての人間の事を、僕はまったく理解出来てなどいなかった。

誰も彼もが、僕が追いつくよりも先に手の届かない場所へ消えていってしまう。いや、むしろ、僕の方が後ろに下がってみんなから

毬瀬初音（まりせはつね）、九仗宴（くじょううたげ）、東条真奈美（とうじょうまなみ）、鷲尾末摘花（わしおみつか）と明石蛍（あかしほたる）、九執曜（このふしあきら）、真名井修二（まないしゅうじ）、真崎透吾（まさきとうご）、松田総司（まつだそうじ）……

離れてしまったのかもしれない。

彼我の距離感は視点の立脚点によって異なる。僕らの社会には、絶対の不動点など存在しない。

……フーコーは一体どこに振り子をぶら下げたのか。その振動する弦の遥かな延長には一体何があったと言うのか。

それを理解する為に必要なことを、僕はまだ学び終えてはいない。だから僕は物語る。この物語は記録・記憶であると同時に追憶であり、僕の周りに起こった出来事をより良く理解する為のサブテキストでもある。

今何が起こっているのか、これから何が起こるのか、それを理解する為には、まずこれまでに何が起こったのかという事を理解しないといけない。

何処まで遡るかと言えば、僕がこの水無瀬高校に入学した所からが一番なのだろうが、ほぼ確実に、僕に残された時間はあと数日しか無い。ひょっとすると、数時間も無いのかもしれない。

全てを物語る時間は、もう残されてはいない。

だとすると、やはり語り始めは、あの黒衣の不気味な少年、九執曜（このふしあきら）がこの村にやってきた所からと言う事になるのだろう。

九執が何の目的でこの村にやって来たのかは未だに分かっていないし、その後僕たちに降り掛かった惨劇の数々に、どう関わっていたのかも分からない。

ひょっとしたら、本人が言う通り、まったく何の事件にも関わっていなかったのかもしれない。事件は起こるべくして起こり、まったく自動的に進展し、僕には何の手も打つことは出来なかったのかもしれない。もちろん、そうではなく、九執こそが全ての事件の犯人だと言う事だって考えられる。

未だ――九執曜についての真実は、全て薄暗い闇の中で、埃にまみれて眠っている。

＊＊＊

この「物語」を読む人たち（恐らくは警察関係者か、もしくは後世の物好きな連中か）に、一つだけお願いがある。

僕は基本的にこの物語で起こる出来事に嘘はつかない。僕が見たもの、聞いた事をありのまま記述する事を心掛ける。だから、もし全てが後手に回り、僕が何も出来ずに物語から降りるようなことがあるならば、僕の変わりに考えて欲しいのだ。

今から僕が物語ろうとしている、現在も進行中のこの事件、すなわち「水無瀬村連続殺人事件」とは何だったのかという事を。

一人ではたどり着けない真実も、多くの人間によって精査されることで明らかになるかもしれない。もしくは、こうして記載する事で事件の新しい糸口がみつかり、僕を救う事になるのかもしれない。だから、残された僅かな時間で出来る限りの事を書き残す。

東条真奈美の事、鷲尾末摘花の事、九執曜の事、紅葉伝説の事、鬼と呪いの事、殺された沢山の人たちの事、僕に取ってかけがえのないフラタニティの事、そして、何より斎宮葵の事。

彼ら、彼女らの事を書き記すことにより浮かび上がってくるはずの真実。そして、その真実が浮かび上がってきた時に僕が取るべき最適の行動。

こうして物語る事により、その真実と答えが僅かでも浮かび上がってくるかもしれないと言う事が――

今の僕に残された最後の希望だ。

【ＡＣＴ０１】に続く

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ～その１（前書き）

こちらのＡＣＴ０１の前に【序】が御座います。
出来ましたら、そちらからお読み頂けますようお願い申し上げます。

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ～その１

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ

－１－

「今日からしばらくは、図書館の棚卸しをしなさい」

いつも通り、何の感情も感慨もなく葵が口にしたのはそんな台詞で、僕はとりあえず口から飛び出しかけた怒声を必死に押しこらえた。

目の前には小さな子供ならベッド代わりに出来るのではないかと思われるぐらいの巨大なマボガニーのデスクが鎮座しており、顔が映りこみそうな程に磨き上げられた艶っぽい天板の上は、高価そうな万年筆や上質な便箋、古いタイプライターなどレトロな事務用品で飾り立てられている。

そして、その向うで両足をデスクの上に放り出し、両手を頭の上で組んで有るのか無いのか良く分からない胸を誇示するようにふんぞり返っている、ハイソなブレザーの制服をまとった一人の少女。

今日は午前中で授業が終了し、昼食を取ってから直ぐに集合したので、窓から差し込む日差しは壁に掛けられた絵皿ではなく、立派なチェアに沈む葵に降り注いでいた。ツインテールからほつれた細い毛が光に反射し、光のネックレスのように葵の首元に降り注いでいる。

僕は、葵の見下すような、肉食獣のような鋭いまなざしに、ともすれば目を逸らしたくなる欲求に耐えながらながら、深く、二、三度深呼吸する。そうして、何とか自分が平静を保っているという確信が生まれるまでたっぷりと時間をとった後で、最大限冷静を心がけ、ゆっくりと僕は口を開いた。

「……なぁ、葵」
「私の名前には様をつけろといつも言ってるでしょうが、このチビ野郎」
「話し聞く前に速攻で身体的特徴をあげつらっての暴言かよ!!?というかそもそも今まで一度も様を付けろとか言われた覚えはねぇぞ!!?」
「今不意に思いついたのよ、ハゲ野郎」
「ハゲてねぇ!!!僕にどんだけの問題点があったとして、断じてハゲだけはねぇよ!!!って言うかそういう問題じゃねぇ!!」
「なに?死に掛けのカバみたいに発奮して。もっと別の部分の欠陥を糾弾して欲しかったの?それとも……あ、アレね。私に卑猥な事を言わせるつもりね、このド変態が」
「別に僕は卑猥な所に欠陥を抱えてもいねぇよ!!!」

会話がまったく前に進まない。それどころか、後ろ向きに全速力で展開している。
葵がこの僕の一体どの部分に欠陥を抱えていると思ったのかについては、今度時間があるときに徹底して追及しなくてはいけない、男としての抜本的尊厳に関わる重要な問題だと思われるが、今現在解決しなくてはいけない問題はそこではない。
断固として、そこではないのだ。

「……お前義務教育受けてるよな?学校という小社会を生きていくうえで必要な人間関係の構築方法とか、コミュニケーションの取り方とかはきちんと学習してきてるよな?僕は、『最近ちょっと活動が過酷すぎるので少しばかりセーブしてくれませんか?』って言ったんだよ。『ぜひ今日の活動を発表してください』ってお願いしたワケじゃねーんだよ。そこんとこ分かってんのか??」

僕の必死の抗弁を、聞いているのか聞いていないのかも良く分からない葵が取って見せた態度といえば、ほんの少し――僅か2ミリほど左の眉毛を動かしただけだった。

「ねぇ、みー？私はご覧の通り多彩な人間だけれども、そんな私でもね、雄豚の言葉を解するにはまだ至ってないのよ……ゴメンね？」

「ひどく凡才な僕は徹頭徹尾日本語で話をしてたっつーの！！」

っていうか、さらっと謝っちゃてやがるが、僕が欲している謝罪も、やっぱり断固としてそこではない。

「……本当に、ほんとーにもう限界なんですよマジで！毎日毎日労役もかくやと思われるような重労働にさいなまれるのは辛いんですよ。お役に立ちたくないとは言いませんから、なんとかもう少しだけ手加減してもらう訳には行きませんかねぇ……？」

涙を流さんばかりの哀願である。泣き落としである。

大の男が（といっても高校生だが）、平身低頭してほんのわずかな猶予を請うその姿に、心打たれない者などが果たしてこの世の中に存在するだろうか？小動物がプルプルと震えるがごときその姿に、哀れみを覚え無い者などがこの世に存在するだろうか？

「集合時間は、３０分後よ」

いた。ここに。

罪悪感などかけらもなく、取り合うそぶりすらなく、歴然かつ毅然として黒檀のデスクに足を放り出して、つまらなさそうに自分の爪を眺めていた。

――分かってはいたのだ。この半年で、十分に学習してはいた

のだ。この女が僕の言う事に少しでも耳を貸すハズが無いと言うことぐらいは。

水無瀬高校非公認サークル「フラタニティ」現行主催。水無瀬村一番のお嬢様で、眉目秀麗・成績優秀・スポーツ万能の完璧超人。この斎宮葵（いつきのみやあおい）が、僕の願いなんかを聞き届ける訳など、まったくもってなかったのだ。

本日の（そしてこの半年間で考えると数百回目の）嘆願を無残に打ち砕かれて、僕はがっくりと椅子に崩れ落ちた。

僕の対面に座り、僕と葵のやり取りをのほほんとコーヒーを飲みながら眺めていた九仗宴（くじょううたげ）が、右隣でスケッチブックに向かってなにやらドローイングをしていた毬瀬初音（まりせはつね）に向かって振り返る。

「ねー、言ったでしょー？みー君が勝てる訳無いんだってば」

椅子の上に胡坐をかき、体重を後ろに掛けて後脚二本でバランスを取るなんていう器用な真似をしている宴に、なにやら難しそうな顔でスケッチブックとにらめっこしていた初音が、テーブルの上に鉛筆を戻して、にっこりを微笑を返した。

「うーん、今日はもうちょっと頑張れると思ってたんだけどなぁ」

勉強や絵を描く時やＰＣを使う時だけつけているという眼鏡を外して、ほつれた髪の毛を耳の後ろにかきあげ、初音は僕に向き直る。

「でもまぁ、いつもよりは頑張れたんじゃないかな？」

「頑張ったから良いとか言う話じゃねぇよ……」

大きく天を仰ぎ、逆さ向きに部屋の中を見渡しながら、僕はため息とともに呟いた。

イギリスの上流階級の居間を思わせるような豪奢な一室。
床一面にカラフルで細密なデザインの絨毯が敷き詰められ、歴史を感じさせる古びた暖炉に、シャンデリア。部屋の真ん中には大きな黒檀の長方形のテーブルが設えられており、その周囲に黒皮製の上等な椅子が並べられている。テーブルの真ん中には色鮮やかな花が飾られており、壁に掛けられた印象派の絵画や絵皿などと共に部屋に彩を与える。
僕と初音、そして常人離れしたバランス感覚で普通の椅子をロッキングチェア代わりにしている宴の前には、ウェストビレッジだがサイドエッジだかハリウッドだかいう名前の高そうな陶器のカップが置かれており、入れたてのコーヒーが芳香を燻らせていた。
そして、暖炉からテーブルを挟んだ壁際には、大きな黒檀製のデスクと黒皮のチェアが置かれており、今やそこは不釣合いに小柄なお嬢様の独占有地帯となっている。
この、おおよそ高校生が立ち入るにふさわしいとも思えないブルジョワチックかつアンティークな趣味のお部屋が、我らが「フラタニティ」の部室である。
高校の一サークルが占有するには全くもって不釣合いな部屋だが、その正体は僕の目の前でまかり間違うとパンツまで見えそうなほどふんぞり返って座っている葵の実家が所有している別宅の一室で、この部屋を部室にしておきたいがためだけに、葵は「フラタニティ」を非公認のままにしているとか何とか。
まったく、全てにおいて一般常識が欠落しているお嬢様だ。
この、斎宮葵、毬瀬初音、九仗宴と僕に、関屋真木というスポーツバカを合わせた5人が、「フラタニティ」の現在の全メンバーという事になる。
そもそも「フラタニティ」と言うのは海外の大学とかにある相互互助組織で、いわゆるボーイスカウトとかボランティア団体の類らしい。その出自には、フリーメイソンだとか神秘主義だとかキリスト教的友愛の精神がうんたらかんたらと言った理念が色々とあるみ

たいだけれども、とりあえず僕の所属する「フラタニティ」に絞って言えば、要するに何でも屋である。

何でも屋、と言うよりは問題を引き起こす事の方が多いお騒がせ団体として先代までは猛威を振るっていたらしいが、斎宮葵が現行主催になってからは、学内は元より水無瀬村に発生する様々な問題（や雑用を）解決する、ボランティア団体として善行を積み上げて行っている。まぁ、善行を積み上げていっているのは僕らで有って、断じて葵では無いのだが。

しかし、そんな内情など分かりはしない学生や村人の感謝の念は何故か葵のところに向けられるようになっていて、それを調子に乗った葵がまた僕らを酷使する、と言う搾取構造が完璧に出来上がってしまっていると言う訳である。

理不尽極まりない。

そもそも「フラタニティ」と言う名前は「フレンドリィ」とかの語源になったラテン語で、「友愛」と言う意味らしいのだが、少なくとも僕に対する葵の態度には友も愛も無い。それどころか、悪意と敵意と軽蔑と侮蔑と侮辱で出来上がっているような感すらある。

まかり間違っても、善意とかボランティアだとか言う単語とは縁遠い所で人生を送ってきていたこの僕が、なんで「フラタニティ」なんていうものに所属して、ガレー船につながれた奴隷もかくやと思われるような酷使労働を送っているかと言えば、入学当初にしでかした様々な浅慮で短気な行動が原因なのだが、まぁ、その話はこの際どうでもいい。

問題は、毎日毎日懲りもせず飽きもせず、校内清掃から河原のゴミ拾い、老人会のヘルパー、買出し、壊れたボイラーの修繕、ケンカの仲裁、農作業の手伝い、お祭りの運営と言った奉仕活動に従事させられる僕の我慢の限界が、とっくの昔に天元突破していると言う点である。

何度となく待遇改善を上訴しているのだがご覧のような有様で、このままでは間違いなく僕は葵に殺されてしまうだろう。日本の高

校生の死亡事由として世にも珍しい「過労死」が統計表に記載されるのも、そう遠い未来ではないはずのだ。
しかし、ここでどう抗弁しても葵の決断を覆す訳には行かない以上、僕の取れる手段はただ一つ！
古今東西を問わず、労働者が行使してきた最大の権利を僕も発動させるのみ！

……サボろう。こいつがどっかで目を離した隙に、とっととズラかってサボタージュを決め込もう。

そもそも、サボタージュの語源はサボ（木靴）で機械をぶっ壊した所から来ているらしいので、当初は実力行使を伴うものだったようだ。木靴で殴り殺されないだけ、葵は僕の寛大さに深く感謝してもいい。僕は、あくまで紳士なのだ。
と言うか、サボタージュの語源が本当に木靴による機械破壊だとすると、機械が敷衍した産業革命以降の労働者に当てられる単語って言うことになる。つまり、サボタージュは神から与えられた生予のものである「職業」が、労働貨幣として資本家に搾取されるようになってから初めて出てきた概念って事になるよな。
それまでは、サボりなどというモノはなかった。職業は生きていくと言う事自体の証だったから、そこから離れる事はできなかった。それを組織化し、搾取するようになって、初めて人は仕事をサボる事が出来るようになった訳だ。

……どーでも良いし、どっちかって言うと間違ってそうな考察だけど。

更に言うならば、労働者の権利はストライキで、サボタージュは別に権利でもなんでもなかったな。
いや、今大事なのは僕がこれから行う神聖な労働者の権利行使が

ストライキなのかサボタージュなのかという事ではない！暴虐不人を極め、人を人とも思わぬ暴君っぷりを発揮するこのチビのお姫様に、僕にも僕の事情があるということを深く理解させなければならないのだ、ああ、そうだとも。

そうと決まれば話は早い。とりあえず、ここは恭順の意を示して相手を安心させて、隙を見つけて逃げ出すだけの簡単なお仕事に取り掛かろうではないか同志諸君。

「……わーったよ、図書館の棚卸しだな。行きゃぁ良いんだろ行きゃぁ」

とりあえず毒づいたフリなんかをしながら僕は立ち上がってカップに残っていたコーヒーを飲み干した。相変わらず、初音の入れるコーヒーの美味さは天下一品だと思う。毎回コーヒーミルで挽いているお陰で時間が掛かるのが難点だが、それを補って余りある、専門店でも早々味わえない深みがある。そもそも、僕はコーヒーは苦くて嫌いだったのだが、初音が淹れてくれたそれを飲んでからはコーヒーに対する価値観が一変した。昔から色んな所で書かれていたり言われていたりしたが、コーヒーとは香りを楽しむものだと言うことが、実感をもって理解できたのだ。

まぁ、女の子が淹れてくれるコーヒーって大体美味しいんだけれど。

カップをソーサーに戻し、僕は初音と宴に目をやった。二人とも空気を読んですでに出かける準備を始めており、自分の前に置かれたコーヒーをちょっとずつ片付け始めている。

が、当の葵だけはまったく動く気配はない。それどころか、さっきより更に深くチェアに沈みこんで再び無表情で天井の辺りを眺めている。このままもう少し沈み込んだら、スカートがその内部の白布（推定）を外部の目線から遮断するという目的を完全に放棄してしまうだろう。

ヤバイ。いろんな意味でヤバイ。
このまま放って置くという選択肢の誘惑には抗いがたかったが、僕はあくまで健全な高校生男子としての領分を守るべく、放心している葵に注意を勧告した。

「何ボケーっとしてんだよ、お前もさっさと出かける準備しろよ」
「……は？」

僕が血を吐く思いで貞操を守ってやっているというのに、そんな僕に対しての葵の返事は、これ以上ないぐらいに小バカにした感じだった。

「なんで私が出かける準備をするのよ？」
「……あ、いや、そのですね。先ほど仰られたように、図書館の棚卸しを……」
「行かないわよ私は」
「……あぁ！！？」

ちょっと待て、今とんでも無い事を口にしたぞこの女。
図書館の棚卸しなんていう、単語を聞くだけで筋肉痛になりかねない重労働を他人様に押し付けておいて、自分は部室でダラけていやがるおつもりですか？？この世の全ての労働は自分とは関係なく、優雅にコーヒーを楽しむのが崇高なる義務だという訳ですか！？

「いやいやいや、待ってくださいよ斎宮さん、なんかおかしくありませんか？おかしいですよね？間違ってますよね？？僕たちを酷使しておいて、自分だけスイーツなアフタヌーンティーを楽しんじゃったりするようなおセレブな立場に安逸となさってご満足ではありませんわよね？」

怒りのあまり、お嬢様口調になってしまっていた。
流石に本気で少し怒り出していた僕に、聞いているのかいないのか、葵はほんの少しだけこちらに注意を向けた。具体的に言うと、数ミリだけ目線をこちらに向けてきた。

「私は私でやる事あるのよ」
「何をだよ」
「色々よ」
「はっはー、なるほどねー、色々有るのかー、それはしょうがないよなー、色々有るんだもんなー、って納得するかボケ!!!説明しろ!懇切丁寧に一から十まで誠心誠意説明しろ!!」

怒声を張り上げる僕に、葵は実にめんどくさそうな表情を浮かべて見せた。そうして、中空を眺めてなにやら思考した後で、小さく口を開きかけて……思い直して口を閉じた後、実にめんどくさそうにため息をついた。

「初音」

葵がポツリと初音の名前を呼び、コーヒーカップをトレイの上に載せて片付けていた初音が、ぴくん、と体を起こす。

「あ、えっと……そのね?ほら、葵ちゃんって村のお仕事とかもやっているじゃない?」

葵の代わりに口を開く初音。どうやら葵は初音に説明をブン投げたようで、仕方なく僕は初音のほうを振り返った。

「やってるな」

やってる。それは間違いない。
僕だって村の仕事の一つや二つは手伝った事がある。水無瀬村には、徹底的に人手が足らないのだ。

――――そもそも、僕らの高校があるこの水無瀬村は、長野県の北端部にある人口２０００人に満たない小さくて狭い寒村だ。日本の辺境にある農村の例に漏れず、若者の流出と村人の高齢化で、ゆっくりと廃村へと歩み続けている、ほぼ限界集落である。
細々とした農業と、ごく僅かな観光資源と、地方助成金が命綱なこの水無瀬村が、村としては決死の大博打を打ったのが、大体１０年程前の事。このままでは遠からず廃村になることが確定し、周囲の村々がその運命を受け入れていったのに比べて、当時の村の首脳陣は、村の活性化のために学校を誘致する事にしたのだ。
確かに、若者を呼び込むと言う点では分からないでもない発想だったが、長野市内からバスで2時間以上も掛かり、コンビニも無いような辺境の地に学校を設立しようなどと言う奇特な学校法人は一向に現れず、誘致活動は困難を極めたらしい。しかしまぁ、紆余曲折を経て関西に有る大きな私立の学校法人と契約がまとまり、分校と言う形で水無瀬高校はスタートした。
最初の一年こそ運営は苦しかったらしいが、いつの時代にも、下世話な誘惑の少ない自然に満ち溢れた場所で子供を育てたいという両親は後を絶たないようで、二年目からは生徒の数も増え始め、今や倍率が3倍を超える事も少なくないちょっとした有名校の一つにまで上り詰めた。まぁ、倍率が高いのは、募集生徒数に限りが有る、と言う点も大きかったのだけれども……
そんな感じで外からの学生も多い水無瀬高校だが、僕のように外からやって来た人間もいれば、ずっと村の中で生まれ育ってきた生徒も居る。葵、初音、宴の3人はそんな生粋の水無瀬っ子で、狭い村の事だから、なんだかんだで遠縁の親戚だったりするらしい。
しかし、3人の中でも、葵は別格である。

葵の実家、斎宮家は水無瀬村の紅葉神社の神職である。昔は村の領主筋だったらしく、民主制に移行して選挙で村長が選ばれるようになっても村の中の家柄、格式は一番高い。村長を差し置いて、役場や村会を含めた村の運営を取り纏めのような事もやっているらしい。そんなもん、たかだか一家が継承しなくても、村長やら役場の職員がやればすむ事なのだろうが、そこはそれ。田舎の寒村の人間関係というのは、中々余人には理解しにくい物がある。

そして、葵はその斎宮家の人間というだけではなく、当主でもあるのだ。

詳しい事情は聞いて無いし聞こうとも思わないが、2年前のあの事件……誰もが心の底に抱えながらも決して口に出そうとしないあの事件の際、葵の両親は共に亡くなってしまっている。一応祖母は御健在らしいが、斎宮家当主として村を取り仕切るだけの体力は既になく、孫娘の葵に当主としての座を譲り渡して、実質寝たきりで隠遁している。

つまり、葵は「フラタニティ」の現行主催であるというだけではなく、高校生の身でありながら、水無瀬村の相談役も兼ねて居るという訳である。

「今日も、ちょっと色々と村のお仕事があるから、私たちだけで図書館のお手伝いをする事になったの」

僕の補足説明を除けば、初音の説明はまったくもって端的だった。

そう言われると僕としてはなんとも抗弁しにくいが、それでも一度振り上げた拳のやり場に困って、僕は台詞を継ぐ。

「いや、まぁそりゃ村の仕事も分かるけどさ、後回しに出来ねーの？図書館の棚卸しってアレだろ？夏休みが開けてから図書委員がずっとやってる奴だろ？ちょっとでも人手があった方が助かるんじゃないか？」

僕の台詞に、葵は深々とため息をついて、いよいよチェアに沈み込んでいく。なんかもう、スカートの布地が実にきわどい所のギリギリまできている。太ももなんてフルオープンだ。このままではヤバイ。まずもって僕の理性がヤバイ。

かといって別に注意をするような無粋な真似も視線を外すようなもったいないこともせずに見つめる僕に、葵が天井を眺めたまま口を開いた。

「今はね、ちょっとデリケートな時期なのよ」

とてもデリケートな状況であるという事には深く同意せざるを得ない。

「選挙が終わって、政権変わったじゃない？」

「選挙……？あぁ、参院選？」

そう言えば、あのドタバタと混乱を極めた夏休みの終わり、僕らがとんでも無い大騒動に巻き込まれていた裏で、いつの間にか日本の舵取りが大きく傾いていたのだ。いや、どっちかって言うと参院選こそが世間一般的には表で、しがない長野の寒村の高校生の青春の一幕など、どうでも良い事ではあったのだが。

戦後から５０年続いた自〇党支配は終わりを告げ、〇主党が政権をとった。それが意味する事がはっきりとするのはまだ先の事だろうけれども、とにかく、何かが大きく動いたのは間違いない。

「が、それがどうしたっつーんだよ」

「本当に貴方はバカね」

葵の無表情が崩れ、侮蔑が生まれた。こいつはまったく、人をバ

カにする言説と惨めにさせる表情のバリエーションだけは、本当に多彩なのだ。

「この村の予算の半分近くは地方助成金で賄ってるのよ？その助成金を獲得して維持して吊り上げる為にこれまでどれだけ根回しやら接待やらをしてきたと思ってるの？それが一回白紙に戻って、予算削減だの何だのといった議論を押しのけて、関係値を作り直さないといけないのよ？大変なのよ」

具体的には何がどうなってるのかさっぱりだったが、とりあえず大変そうだという事は分かった。

「大体においてそんなのは村長やら役場の人間の仕事で、葵が心配したり駆けずり回ったりする問題じゃ無いだろ」と言う台詞は、流石に口には出来ない。この半年で、葵の村の中での立場と役割ぐらいは、理解できている。

だから、代わりに僕は溢れる気持ちを押し殺してため息をついた。

「分かったよ、棚卸しはコッチでやっとくから、お前はお前でメンドーなこと片付けとけ」

「言われなくてもそうするわよ」

相変わらず可愛げのない返事である。

しかし、葵のその小さな体の狭い両肩に乗っかっているものの重さと大きさを思えば、多少ヤサグレるぐらいは許容範囲として認めなくてはならないだろう。それだけの重責を、こいつは一人で抱えている。

だから、悪態やドSな態度を僕のほうが大人になって飲み込むとして、とりあえず葵には労いの言葉を掛ける事にした。今の僕には慈愛の心が満ち溢れている真の紳士と言っても良い！

「あんま無理すんなよ。僕らでは手伝え無い事も多いだろうけど、やれる事はやるからさ」

僕からの優しい言葉が意外だったのか、葵は今日始めて、無表情と侮蔑と見下し以外の表情を見せた。きょとん、と驚いた表情を浮かべてみせたのだ。

「……珍しいわね。貴方がそんなこと言うなんて」
「そりゃ、お前がいつも頑張ってるのは良く知ってるからな。色々大変だと思うけど、お前には僕たちが付いている」
「あ、ありがと……」

どう返事したものか、あっけに取られて口ごもる葵。
照れて――ない。あからさまに不審がってる。
そんな葵に、最大の笑顔を浮かべる僕。

「辛くなったらいつでも言えよ。一人で頑張りすぎるなよ」
「……ええ」
「助けて欲しくなったら、意地を張らずに素直にそう言うんだぞ」
「分かってるわよ」
「あと、さっきからずっとパンツ見えてる」
「死ね！！」

―2―

大勝利である！
最初こそ、他人様を戦地に送り込んでおきながら自分は司令部でのうのうとしている無能な司令官のごとき葵の態度に腹も立ったが、冷静になって考えてみれば、小うるさいお目付け役が居ないと言う事でもある。これでいつでもサボって抜け出す事ができると言うも

のだ。
その上、葵に対してのアドバンテージとも言うべき辱めを与えると言う作戦も成功した訳で、これは対葵戦における偉大なる快挙と言って良いだろう。
やっぱアレですよ。教育と条件付けが重要だと思う訳ですよ。こうやって、僕にパンチラを見せると優しくされると言う事をインプリティングしていく事により、葵が気弱になるたびに僕に対するサービスシーンが増えていくと言う、ラッキースケベなシチュエーションを演出しようと言う崇高なる作戦な訳ですよ。
人間誰しも人に優しくされたい瞬間と言うのは存在する訳で、そう言う時に優しくされた記憶を引っ張り出して、同じ行動をとってしまうというのは、これはもう致し方ない事だ。
今後こういった条件付けを繰り返していく事により、あの悪魔をいつしか屈服させる事も不可能ではない！
これはあくまでも、人間としての尊厳を取り戻し、死守する為の偉大なる聖戦なのである！
人間の尊厳を死守する為にパンチラを望むと言うシチュエーションがどうかと言うとまぁ色々とアレな事は間違いないが、方向性としては間違っていないはずだ。
僕があの白い布地（確定）を目撃したのは完全に不可抗力で、それもどっちかって言うとあんな体制で座っていた葵の不注意こそ責められるべきで、僕はむしろ見たくも無い物を見せられたかわいそうな被害者としての立場を主張しても何の問題も無い状況であったはずなのだ。
なのに……
「みー君、これそっちに運んでおいてね？」と、初音がどこか心持ち冷たい目線で僕に言う。
「いや待て、その大きさのダンボールを一人で運べるはずが無いだ

ろう」
「ん？んんー？そんな我侭言っちゃうと葵ちゃんにちゃんと仕事して無かったって言いつけちゃうよー？」と、宴が追い討ちを掛けてくる。
「いや、いやいや、僕にはそもそも物理的加重限界と言うものがあってですね……」
「男の子だもん、それぐらいの分量大丈夫だよねー。葵ちゃんのパンツ覗いたんだもんねー？」
なのに、なんで僕は親の敵のように、いつもにも増してコキ使われているのだろう……？？

＊＊＊

僕たちが図書館にたどり着いてみると、既にそこはちょっとした本のスラムみたいになっていた。
普通なら書架に収められているはずの数十万の書籍は、大地震でもあったかのように床や通路や閲覧机の上に溢れかえり波打っている。本の上に本が積み重なり、その更に上に板が渡されて本が積み重なり、ダンボールに詰めた本の上に詰まれた本の上に積み重なったダンボールの上に本が並んでいる。
本と言う単語がゲシュタルト崩壊を起こしそうな、完全な無秩序状態である。
本のジャングルの様になってしまった館内の僅かに空けられた獣道のような細いスペースを、何人もの図書委員や図書館職員、利用者がうろつきまわり、あちらからコチラへ、コチラからあちらへ、中から外へ、外から中へと書籍を運搬していた。それはある種、群体としてのアリのコミュニティがそうであるような、個別で見るとまったく無秩序であるが、全体としてみた場合に大きな流れを感じさせる光景だった。
そもそも、この水無瀬中央図書館が図書館の体裁を成さなくなっ

てしまったのは、夏休みがあけて新学期に入った頃、新しい図書館長さんが赴任してきてからである。

水無瀬中央図書館（と言っても村には図書館は一つしかないので、皆単に図書館と呼んでいる）は村の予算と高校の母体である学校法人の予算で建てられた、村と学校共同の図書館である。元々水無瀬高校にも辛うじて図書室と呼べるものはあったのだが、増加の一途を辿っていた生徒数に対応できるだけのものではなく、図書館として新設する際に、村の図書館を兼ねて共同で運営することになったのだとか。

主に土地的な問題もあって学校の敷地内ではなく市役所の側に建てられており、学校の図書委員と、地方公務員である司書さんが管理して居るのだが、これがもう、欠陥図書館の代名詞のような場所だったのだ。

設立された時に、元々の水無瀬小学校、中学校の蔵書のみならず、村にあったありとあらゆる古文書だの郷土史だの小説だの雑誌だの公文書だのがよってたかって放り込まれた結果、図書委員ですらどこに何が有るのか良く分からない迷宮図書館となってしまったのだ。

１０年近く掛けてチマチマと蔵書の整理と分類を続けてきたらしいのだが、こんな寂れた寒村にあるのがおかしいぐらいの規模を誇るこの図書館を整理するにはとても人手が足らず、むしろ年々寄贈やらなんやらで蔵書が増え続けた挙句に、ついには本当の書の迷宮と化した。

流石に図書館が設立されてから購入した本や、設立後に寄贈された本などはちゃんと管理されて検索システムで探し出すことが出来るのだが、創設時に持ち込まれた本は、もはやどこに何があるのか全く分からない始末。更には、初代の図書館長が計画性を放棄してとにかく奥から順番に詰め込んで言ったお陰で、奥に行けば行くほど混沌とした様相を呈する、不可侵領域が出来上がってしまった。

そんな状況にも拘らず、古文書を初めとして、創立時に持ち込まれた書籍の中には結構なお宝本も含まれていたようで、好事家やら

郷土史家やらが任意で発掘作業に取り組んでは、時々稀覯本を再発見したりしている。

まぁ、そんなこんながありまして、夏休み明け、二代目図書館長にして人が良いだけが取り柄なすだれハゲのオッサン（八鐘（やがね）図書館長）は、ついに解雇されてしまった訳である。

悪い人ではなかったが、悪い人ではないと言うだけで全くの無能だったオッサンの将来に幸あれ。

ともあれ、新しく赴任してきた三代目図書館長さんは到着早々混沌極まる図書館の状況にあきれ返り、一念発起して、蔵書の総点検と再配置計画を発案した。

最初は3人の司書と二人の図書館員と１５人の図書委員で始めた蔵書総点検作業（通称棚卸し）だったが、たった一週間で図書館長の目論みが全く持って甘かったと言うことが判明する。奥から蔵書を運び出すたびに新しい古文書だの稀覯本だのが発見されるお陰で作業は遅々として進まず、このままではそれこそ5年なり１０年立っても作業が終わらないことが明白に成ってしまったのだ。

業を煮やした三代目図書館長は、年度の予算組みから全部白紙に戻し、専門業者や古書の専門家まで招集して、まずは蔵書の目録作りから始めた訳であるが、毎日毎日本を運び出してはチェックして目録をつけてタグを付けてしかるべき場所に戻すと言う作業を続けても、さっぱり終わりは見えてこない。

そこで、猫の手も借りたい図書館長様からの依頼で、こうして僕たち「フラタニティ」が奉仕労働に借り出されたと言う訳である。

＊＊＊

「とは言うものの、こりゃ今年中になんて絶対おわんねーな」
「終わらないね……」
「それどころか、今世紀中に終わるかどうかも怪しい」

「今世紀はまだ９０年以上残ってるよ、みー君」

２時間ほど肉体労働に精を出し、すでにクタクタに疲れ果てて、僕と初音は自動販売機の前の休憩スペースにへたり込んでいた。

この二時間でやったことといえば、２０箱ほどのダンボールに本を詰めて外の倉庫に運び出し、倉庫からチェックが終わった本を運び入れただけなのだが、それだけでもう一日分の労働としては十分な気がするほどである。

男の僕でも重労働なのだから、そもそも腕力など無いに等しい初音は会話をするのも億劫なぐらい疲れて居るようだった。ジャージに着替え、ロングヘアーをポニーテールに束ねて首からタオルを掛けた初音は、アクエリアスの缶を持ったまま、がっくりと頭をたれて燃え尽きてしまっている。

宴は二時間フルで働いてもまだまだ元気一杯に飛び回っており、やっぱり武道をやっていると根本的な部分での体力が違うのか？とても、ついていけるものではない。

僕は遠望できるロビーの方を出たり入ったりする学生やら業者を眺めながら、ペットボトルの伊右衛門を傾けた。

「コレ後どんだけやれば終わるのかな？」

「一ヶ月ほど作業して、まだ一階のＣＡブロックも終わってないみたいだし……２年ぐらい掛かるんじゃないかな……」

この図書館は二階構造で、Ａ～Ｚまでのブロックに分かれている。吹き抜け構造で、二階部分は一階ほどの面積は無いとは言うものの、確かに、このペースでは２年以上掛かるだろう。

専門の回収業者や引越し業者まで動員してこれなのであるから、整理が全て終わるよりも、図書館の予算がなくなる方が先になりそうな勢いである。

「んで、今日の作業はドコまでやれば終わるのよ」
「ＣＡブロックのミからモまでを片付けるって話だから、まだ後２時間ぐらい掛かるんじゃない？」

洒落にならない。死ぬ、間違いなく死ぬ。体力が尽きるか、不注意で大量の本の滑落にあって生き埋めになって死ぬ。

とっととサボって逃げ出したいのは山々なのだが、どうにも初音もそんな僕の気配を薄々と感じて居るらしく、ちっとも目を離してくれようとしないのだ。まったく、勘の良い奴である。

そもそも、初音とは僕が高校に入学してからの仲だから、まだ半年ぐらいしかたっていない。その半年間で確かに結構色々遊びまわりはしたが、それでも、初音の相手の雰囲気や空気を読むスキルはかなりの物だった。

多分、相手の事をちゃんと理解して立ち回ろうとするタイプの人間なのだろう。僕は逆に表面上で仲良くさえできれば相手の深い所になんて踏み込みたくはないタイプの人間だが、初音は真逆で、相手の本心とかをちゃんと理解していこうとする節がある。

それでいて、別にズケズケと物を言ったりこっちの心の中に踏み込んでくるような感じでもなく、じっとこちらを観察して読み取ろうとするのである。

そう言う意味では、初音が何を考えているのか分からなくて怖い事も、たまにある。

しかしまぁ、全体的に言えば、初音は良い友達だった。

気さくに付き合えるし、葵みたいに暴言をぶつけてくることはないし、宴みたいに腕力でねじ伏せてくることもないし、何よりお嬢様で美人だ。そう言う女の子が友達に居ると言うのは気持ちの良い事だったし、「フラタニティ」の仲間として受け入れ、接してくれる距離感は今の僕にとってはとても有り難い。

まぁ、ある意味、僕は初音が居るからこそ「フラタニティ」の活動が続けられているのかもしれない。こいつが各所でフォローして

くれなければ、僕はとっくの昔に葵と血で血を洗う大抗争に突入していたことであろう……勝てる気はしないが。

が、しかし。

こいつがとても良い友達であると言うことと、僕がサボると言うことはまた別の問題である！

僕がサボるのは僕がサボりたいからサボるのではなく、僕がサボると言う事でこの過酷な労働を押し付けてきた葵に対して抵抗の意思表示をすると言うことにその意義が有るのである！

自分で言ってて果てしなくウソ臭いね！

いや、違うんですよ。もう、ここ最近の肉体労働の積み重ねで、僕の精神と肉体は極限まで疲労している訳ですよ。この辺りで少しなりとも休息をとらないと、シルバーウィークが明けたばかりだというのに、早々にギブアップしてしまう恐れがあるのだ。

と言うか、シルバーウィークも休む所じゃなく色んな事に借り出されていた訳だし。

そうとなれば、これ以上貴重な午後の昼下がりを過酷な肉体労働に費やす必要はない。

僕は、抜け出す隙を探りながら、大きくため息をつきながら脱力した。半ば疲労感のアピールであるが、実際の所疲れ果てて居ると言うことに嘘はない。

「流石にもう体力の限界だ……」

ワザとらしく床に目を這わせていると、ソファーが軽く音を立てて軋み、横に初音が移動して来る気配がした。そして、初音の両膝が視界に入るや否や、僕の頭に初音の手が置かれる。いきなりの出来事に動転して顔を上げると、初音が微笑みを浮かべて僕の目を見つめていた。

「みー君は頑張ってるよ。大丈夫、ちゃんと見てるよ」

ゆっくりと僕の頭を撫でながら初音の放つ柔らかい声が耳朶を打つ。

それは、僕が葵に向けたのと同じ台詞だったが、込められている感情は段違いだった。隣に座る初音のほのかな温もりが、距離を飛び越えて心の中に伝わってくる。

……マズい。

何この罪悪感。どうやってサボろうか考えて居るときに、女の子に慰められるとかものすごいダブルバインドなんですけど。この期に及んでただ単にサボりたかっただけとはとても言い出しにくい雰囲気が物凄く醸成されていっている。

ゆっくりと頭を撫でる初音は、多分弟でも慰めて居るような気持ちなのだろうが、それでも優しさが十分に伝わってくる。

どんなに自分が疲れていても、相手にはそうやって優しくできるのが初音なのだ。空元気を見せたり、必要以上に明るく振舞ったりはしないが、疲れているときは同じように疲れて隣に居てくれる、そう言う奴なのだ。

あぁ――――こいつは本当に良い奴だなぁ……

ずいぶんと心が温かくなり、あっさりと前言を撤回してもうちょっと頑張ってみようかと思い直しかけていた僕を救った（堕とした？）のは、ホールの入り口の方から投げかけられた、聞き覚えのある声だった。

「おやおや？いつもながらラブラブですねぇ。公衆の面前で見せ付

けますね？」

猛烈な勢いで立ち上がり、飛び跳ねるように初音から離れて声の方を見ると、案の定、そこには篠原美夜子（しのはらみやこ）が居た。

＊＊＊

篠原は僕と初音のクラスメイトで、我がクラスの図書委員でもある。三つ編眼鏡と言う、凄まじくレトロなスタイルでいつも図書館をうろついているが、どうやら篠原に言わせると「図書委員たるもの、三つ編と眼鏡は正装です！」と言う事らしく、実際の所図書館に居る時以外は三つ編も解いているし、そもそもダテ眼鏡である。

それは図書委員と言うよりも委員長の正装なんじゃないか、と突っ込みたくてしょうがない所であるが、まぁ、他人様の趣味に口出ししてもまったくもって不毛なので、友人連中は揃って篠原のそんなこだわりは見て見ぬフリをして居る。

他にも、「図書委員たるもの休み時間は文学を読まなくてはいけない」とか、「図書委員たるもの、古文の成績は良くなくてはいけない」とか、分かるような分からない様な自分ルールを数多く設定していて、ちゃんと休み時間は友達と話をしながらも文学小説を手放さなかったり、国語の成績は学年トップクラスを維持していたりする。

入学当時からそんな感じで「図書委員」をやっていて、そういう篠原の態度が演技なのか素のキャラクターは誰にも分からず、篠原自身も図書委員キャラを演じるのを楽しんでいるらしいので、まぁ、つまりは変わり者なのだ。

「図書館は逢引の場所じゃないですよ？」篠原がそう言って笑う。

「ジャージに埃まみれで愛を語るほど汗臭い青春は送ってねーよ」

「またまたー、柏木君の青春はいつも汗臭いじゃないですか」

篠原は、誰に対しても丁寧語で応対する。年下に対してだってそうで、これも一つのキャラ作りなのだろうか？

「そもそも僕って青春送れてるのかねー……？」

「そりゃもう、真っ盛りですよ」

「真っ盛りですか」

「盛りがついちゃってます」

「いや、そこまでの危険領域には達してねぇよ！」

「こうして、昼間から公衆の面前で彼女とイチャつきながら、それは説得力が無いですよ？」

「いや、彼女じゃねーから」

「誰が？」

「誰が？って、初音がだよ！他に誰が居るんだよ。別に付き合ってねーし！」

「またまたぁ。テレなくてもみんな知ってますよ？」

「風評被害だッ！」

……以前から薄々とは感づいていたが、クラスの連中の中では僕と初音が付き合っている事になってしまっているらしかった。

確かにここの所毎日のように初音と一緒に出歩いているような気がするが、それはあくまで「フラタニティ」の活動の為で、別に甘酸っぱい青春を謳歌する訳ではない。それどころか、むしろ葵の無理難題をクリアする為に全力投球を余儀なくされている現状においては、初音とどうこうなると言う余地等これっぽっちも残されては居ないのだ。

「フラタニティ」の内情を知らない連中からは、僕の現在の立ち位置はさぞハーレムに見えることであろうが、僕はあえて声を大にして言いたい。

今の僕の居る場所は、生き地獄だ！

とにかく、噂を噂のまま放って置いて、クラスの男子どもの嫉妬と怨嗟を煽ると言うのも、ちょっと優越感に浸れて面白いような気

もしたが、残念ながら僕と言う男はこの上なく正直さと真実を重要視する男なのだ。

この際、僕と初音が恋愛関係には無いということをはっきりさせておかなくてはならない。

「残念ながら、健全な高校生男子としては誠に遺憾極まる事態ではあるが、初音は僕の彼女では無いし、僕は初音の彼氏ではない。無いんだよ……！！」

「……じゃぁ、いっそ付き合っちゃえば良いんじゃないですか？」

言うに事欠いて、とんでも無い事を言い出しやがった。

「なんかいつもお似合いっぽいし。別に二人とも恋人居ないんでしょう？」

お似合いっぽい……か。

まぁ、確かに今の僕と初音の関係を離れた場所から見たら、お似合いで良い感じに見える・・・・・かもしれない。これまでの半年間で、初音と付き合う事になったら、と言う健全な高校生男子なら誰しもが考えるような妄想をした事は一度や二度ではない。

しかし、僕らが出会ってからの半年間で、伴に経験した様々な出来事が、僕と初音の関係を「仲の良い友達」という所でほぼ固定化してしまっている。僕らの距離感は、いつしか自然とそうなったものではなく、僕たちが自分の意思で保っているものなのだ。

あるいは、どちらかが意地を張るのを辞めれば、僕たちはもっと分かりあえるのかもしれない。お互いに素直になれば、些細な点など解決できるのかもしれない。

でも、そう言う風にお互いに歩み寄っていく為にはそれこそまだまだ時間が必要で、時間が必要だと言う事に関しては、僕も初音もお互いにちゃんと理解していた。

「んーーー、まぁ、そのなんつーか、僕と初音はそう言うんじゃないんだ……なぁ？」

最後の確認は初音に向けたものだった。

この時、僕はあるいは初音が否定してくれるのを期待していたのかもしれない。「そんな事無いよ」と、にっこり笑って僕の思い込みを打ち消してくれるのを、妄想していたのかもしれない。

だけど、現実には初音は少しはにかんで、小首を傾げただけだった。

「ふぅん、まぁ、良いですけど……」

不承不承、といった感じで篠原が頷く。良くは分からないけど何か事情があるのは把握したので、とりあえず今日はこれ以上踏み込むのはやめておく、といったニュアンスの表情だった。

――――実際の所、僕だって本当の意味で分かってはいないのだ。僕と初音の間にある大きな壁。そこに有ると言う事は分かるけれども、まったく見えも触れもしない障壁。それが、一体何なのかと言うことを。

だけど、僕が薄々感づいていて、初音が明確に否定しないその感覚をあえて言葉にすると、恐らく……初音には僕ではない好きな人が居る。そして、その人はどこかに居なくなってしまったが、初音は今でもその人のことを想い続けている。

初音は好きな男（もしくは前の彼氏）が居なくなったからといってさっさと別の男に鞍替えをするようなタイプでは無いし、もちろん二股をかけるようなタイプでもない。だから、その人のことが心のどこかにある限り、別の男が彼女の心の中に入り込む余地は無いのだろう。

だから、僕も必要以上に初音の心には立ち入らない。初音も、必要以上に僕に心を開かない。
それが、今の僕と初音の関係なのだ。

にわかに生まれた気まずい沈黙が僕らの周りを支配し、やがてその空気に耐えられなくなった篠原が、勤めて明るく口を開いた。

「ちょっと、毬瀬さんをお借りしてもいいですか？」
「いや、だから僕と初音は何でもねーし、僕に確認取る事でもねーよ」
「友達として、お手伝いしてもらっても良いかって事ですよ」

それだって初音の意思問題で僕には関係ないだろ、と言いかけて、僕はその台詞を飲み込んだ。そこまで言うと流石に自意識過剰すぎな気がしたのだ。女の子の間では、お互いの友達を連れて行くときにそういう言い方をする事ってあるしな。
だから、僕は答える代わりに軽く肩をすくめて見せた。そして、初音のほうに目をやると、軽く頷く。
一瞬だけ視線が絡まって、初音は直ぐに笑顔を浮かべた。そして、立ち上がって篠原に向き直る。

「運ぶのを手伝えばいいの？」
「んー、それもあるんですけど、ちょっとＳＱＬの入力を手伝って欲しい事も有って」
「いいよ、受付だよね？」
「そうです」

初音は篠原の抱えていた本を半分受け取ると、僕の方を振り返った。そうして、ずいぶんと不安そうに、僕を見つめる。

「……大丈夫だよね？」
「なにが」
唐突に投げかけられた初音の質問の意図を読み取れず、アホみたいに問い返す僕。そんな僕を上目遣いで見据えながら、何か言いたげに口元を噛み締める初音。
……ははん、こいつ、目を離した隙に僕がサボって逃げ出すんじゃないかと思ってやがるな？
「心配するな、もちろん大丈夫だ」
僕はにっこりと笑顔を返す。僕は、初志は貫徹するタイプの人間なのだ。多少の感情の揺れがあったとしても、やるべき事はきっちりこなす。
そんな僕の力強い返事を、まだ少し疑念が残る表情で見つめた後で、「じゃぁ、また後で」と言って初音は微笑んだ。そうして、篠原の方に目配せすると、二人してきびすを返してホールの方へと向かって歩き出す。
篠原と初音のふわふわと揺れるスカートを手を振って見送った後で……
当然、僕はサボって逃げ出した。

－３－

太陽は夕方に傾いて、山の稜線に向かってゆっくりと沈み込んでいる最中で、僕が水無瀬村の一日で一番好きな時間がやってこようとしていた。
信州の山々に閉ざされ、狭い土地にしがみつくようにして田畑と住宅が点在する水無瀬村だが、太陽が山間に沈みこむ前の一瞬、木

々や稲穂に反射するその光は本当に美しいものだと思う。早い所ではもう刈り入れが終わってしまっている田もあるが、殆どの稲穂は黄金色に輝いて頭をたれており、本格的な収穫を待っている。

村の中心を流れる水無瀬川の流れも緩やかで、日の光を反射して眩しい位にキラキラと輝いている。

それは、僕が昔から想像していたような、理想的かつ伝統的な日本の農村風景だった。

僕の生まれ育った東京の杉並区と言えば、２３区の中でも屈指の人口を誇るベットタウンだけど、西には武蔵野市や西東京市が控えると、いわゆる２３区のどん詰まりでもある。基本的には都心に働きに出る人たちのベッドタウンで、場所によっては本当に住宅地しか存在せず、まったくもって面白みが無い場所なのだ。

もちろん、西武線や中央線の駅の側はそれなりに発展しているものの、その三つの路線（西武線は新宿線と池袋線の二本あるのだ）にはさまれた中間地帯は、コンビニすらろくに無い、住宅の大海原といった感じである。

そう言う場所に生まれ育った僕にしてみれば、中学までは我慢して地元に通ったのだから、高校ぐらいはせめて都心の賑やかな所に出て、放課後には池袋や渋谷で遊びまわって青春を謳歌するつもりだったのだ。

しかし、中学３年の夏、いよいよ志望校の絞込みにはいろうと言う時期、両親から告げられたのはあまりにも過酷な事実だった。

「お前、長野の高校に行くから」

「……は？」

リビングに呼び出され、並び揃う両親に嫌な予感を覚えながらテーブルに着いた僕に向かって告げられたのは、「行く気はないか？」でも、「行ってみたらどうだ？」でもない、「行くから」という断定系の通達。

完全規定路線。議論の余地無し。
いつも通り、そう言う台詞を口にするのは母親で、小説家なんていうのを職業にしている割には自己主張の少ない父親は、なにやら困ったような難しそうな表情で腕組みして黙っている。母親に先導させて居るのではない。完全に母親に押し切られて、言いたい事を言えなくて我慢している時の顔だった。

「いや、だからお前は長野県の高校に行けっつってんの」
「なんで！！！？」

タバコをくゆらせながら冷徹に告げる母親に、僕は状況が理解できず混乱する。が、とりあえず、混乱しているなりに怒声は張り上げてみた。

「いちおー、前に言ってた志望校もランク的には安全パイだろ！？てめぇがランク上げろっつーから、それはもう血を吐く勢いで今もジュケンベンキョーに精を出してた訳ですよ！？」
「嘘付け、エロサイト見てただろうが。無線ＬＡＮのアクセスランプ着いてんのはバレてんだよ。後、母親をお前呼ばわりすんなエロガキ」
「し、調べものをしてたんだよ！！！いや、問題はそこじゃなくて、なんで今更志望校変更して長野の高校になんて行かなきゃなんねーんだっつー事だよ！！」
「ねーちゃんが通ってたトコだから」
「……はぁ！？」
「お前のねーちゃんが通ってた所だからだよ。学費安いし。アタシの知り合いも居るし」
「全部お前の都合じゃねぇかよぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

話し合いは三日見晩続いた。いつもながらまったくの交渉の余地

が無い母親を、脅しなだめすかし説得し泣き落とし、志望校の情報を開示し成績表を持ち出し担任まで引っ張り出しての抗戦を繰り広げたのだが、まったくもって効果なし。

最終的には舌戦がインファイトに代わり、母親に半殺し寸前までボコボコにされた僕は、結局秋に水無瀬高校に入学願書を提出する事になった。

そして春、全身に絶望感を湛えたまま、水無瀬高校の制服に袖を通す事になった訳である。

そんな訳で、まったく望まざる高校に、しかもコンビニどころか商店すらロクに無い田舎に放り込まれた僕の入学当時の精神状態たるや、それはもう荒んだ物だった。なんか、必要以上に人生に絶望して不貞腐れていたような気さえする。

入学早々あれやこれやの騒動を引き起こして、結果として「フラタニティ」に入会し、初音たちに出会うことによって何とか精神的平衡を取り戻したのはいいものの、代わりに待っていたのは葵から酷使される日々と言う訳だ。

なんなの？何でこんなに女運が悪いの？前世で凄いジゴロだったとか？

まったくもって僕の意思の介入しない所で自体が進展していくのが当たり前の人生で、それでも何とか我を張ろうと頑張ってきたものの、どうにも僕の回りに居る女性は全員強すぎるような気がする。奇跡的にバランスが取れて居る初音だって、「フラタニティ」内で僕と葵の意見が対立したら、結局の所葵の肩を持っちゃったりするのだ。女性の連帯感と共同体意識は、僕ら男子には計り知れない物がある。

しかし、結局の所、僕はこの高校に入学してよかったと思っている。少なくとも、今のところは。

中学の頃に憧れたような華やかな生活は無いが、ゆったりと時間が流れる、このド田舎極まりない水無瀬村で、「フラタニティ」の

メンバーとワイワイやる日常が、結構気に入ってはいるのだ。
逆に言えば、「フラタニティ」に入っていなかったら、それこそ僕は時間をもてあましてちょっとヤンチャな方向に振れちゃって、バカな事でもしでかしていたんじゃないかと思う。まぁ、わかんないけど。
とりあえず、図書館を後にした僕は再び学校の方に戻っていた。別に学校が大好きという訳だからではなく、サークル棟のコンピュータ研（通称コンピ研）に行かないと、この近辺でまともにネットに繋げないからだ。
ゲーセンも無い、本屋も無い、喫茶店も無い、カラオケも無い、当然ながらネカフェも無い水無瀬村に置いて、僕たち学生のアミューズメントはサークル・部活が全てを担っている。ゲームがしたけりゃゲーム研、マンガが読みたければ文芸部、お茶が飲みたきゃ茶道部、カラオケがしたけりゃ合唱部、ネットがしたけりゃコンピ研、と言う訳だ。
学校は僕たちの学び舎であると同時に、放課後にはアミューズメント施設に変貌する。こんなド田舎に専業店が新規出店する望みなんてまるでなかったから、先生たちもその辺は大目に見ていて、学生の自主運営による文科系サークル・部活動は、水無瀬高校のある種の特色ともなっている。
学生は殆ど１００％何らかの部活に所属して、予算を分捕る為に活動に精を出し、放課後の校内は授業中より盛り上がるのがいつもの光景だ。水無瀬高校はその設立の過程からして「開かれた学校」を標榜しているから、学生のみならず、村の人々やあるいは外から遊びに来る連中なんかも居たりして。僕は当然ながらまだ未体験だが、秋の文化祭は近隣から結構な人数が押し寄せる一大イベントにもなるらしい。
セキュリティの面とか色々と危ない部分も有るように思われるが、その辺りは生徒会の連中が上手く切り盛りしているらしく、幸いな事に今まで問題が起こった事は無い。

もちろん、部外者がそれらの施設機材を利用する為には、公然の秘密である使用料を支払わなければなら無いが、そうやって稼いだ資金は結局他のサークルを利用するのに使われたりするので、ぐるぐると学内で資本が流動し、蓄積された資本でより機材が充実するという。アミューズメント総合施設としては理想的な発展を遂げていると言う訳だ。

まったくもって、変わった高校である。

ド田舎の割りにやたらと立派な村役場の横を居りぬけ、水無瀬川に掛かる橋の上を渡りながら岸辺で釣りをしていた友人連中に声をかけ、高校へと続く坂道を登り始めたところで、不意に携帯が振動した。僕はどうにも着信音と言う奴が苦手で、常にマナーモードに設定してある。

制服の尻ポケットから、数ヶ月前に一念発起して購入したｉＰｈｏｎｅを取り出す。黒いヘルメットを被り白いワンピースを身に付けた金髪の女の子がドーナツを齧っている、と言う良く分からないイラストの待ち受け画像の上に表示されていたのは、友人、鷲尾末摘花の名前だった。

……ちなみに、この待ち受けを設定したのは初音である。なんか好きなアニメのキャラらしい。

とりあえず掛けて来たのが初音でも宴でも無い事に安堵して、画面上のロックバーを右にスライドして電話に出る。

「ういーっす」

『よー、元気かー』

「元気じゃねぇ。だりぃ」

『お前もかー。アタシももうダルくてダルくて死にそう』

電話口の向うの末摘花は、いつも通り気力の感じられないグダった調子だった。テンションが上がると必要以上に熱血しちゃうが、

基本的にはいつもゆるーい感じに日常生活を送る、末摘花はそう言うタイプの友人である。クラスは違うしそもそも学年すら一つ先輩で、学内では会うこともあまり無いのだが、たまにお互いに電話をしてはどうでも良い事をグダグダと喋っては、ウサ晴らしをする、そう言う関係だ。

先輩なのだから本来なら僕が下手に出る立場なのだろうけど、最初に出会った時からなんだかんだでタメ口で、別に末摘花も気にはしていないようなので、結局先輩後輩を超えた友人としてそれなりに上手くやっている、と言った感じである。

おそらく、日常生活であまり交流がなく、電話でのやり取りで繋がっている仲だからこそ成立している関係なのだろう。

『この前の小テストが壊滅的だった所為で居残りテストだぜ、やってらんねー』

「勉強しねーもんなー、末摘花」

『お前に言われたかねーよ。テストで真ん中以上の成績取ってるの見たことねーぞ』

「僕の成績が張り出されたのなんてまだ中間の一回きりじゃねーか。僕はやれば出来る子なんですよ」

『でもやらないだろ？』

「やらないねー……」

高校生の愚痴といえば、大体において勉強か恋愛だ。そして、末摘花は僕に恋愛関係の愚痴などはしないので、基本的に愚痴の内容は勉強関係か毎日がつまんねー、という二択に絞られる。

毎回毎回代わり映えしない内容をよくもまぁダラダラと続けられるものだと自分でも思うが、僕は末摘花とのこう言う会話が嫌いではなかった。

末摘花は口調で分かるように、女性としてと言うよりも男友達のように接する事ができるタイプで、僕は健全な男の子であるから、

下ネタを含むぶっちゃけトークが出来る女の子と言うのが嫌いではない。僕の周りに居る女の子、つまりは「フラタニティ」メンバーだったりクラスメイトだったりは、基本的に良いヤツ揃いなのだが、良い奴過ぎて愚痴を真面目に取りすぎて親身になりすぎてしまう傾向がある。

別に、何をどうして欲しい訳でも真剣に相談に乗ってほしい訳でもないが、とりあえず愚痴りたい瞬間なんて言うのがあった場合に、末摘花は良い感じにあしらってくれる。

必要以上に親身にならない。かといって、別に否定も拒絶もしない。それが、僕と末摘花の間にある暗黙の了解だった。

『つーか、今何やってんのさ』

「図書館の棚卸しをサボって学校に戻ってるとこ」

『あー、棚卸しか。アレなー。意味ねーっつーか、無駄だと思うな。おわんねぇだろ』

「終わんないねぇ」

『八鐘のオッサン、今でもなんかグダグダと復職に向けて抵抗してるみたいだし、この前の村の集会でもやっぱやめよーか、みたいな意見出てたみたいだし、そのうちポシャるんじゃねーの、あの大掃除』

「へー、そなんだ」

末摘花も、初音たちと同じ水無瀬村の人間である。父親は有名な企業の社長さんらしく、電話口からはまったく感じ取れないが、やっぱり末摘花も良い所のお嬢さんなのだ。だからかどうか分からないが村の中での出来事に関しては結構な情報通である。

「オッサン、まだ館長職を諦めてなかったのか。あんまりゴタゴタ起こしそうなタイプには見えなかったけど、やっぱリストラが堪えたのかな？」

『やー、どうだろ。皆も意外だなーつってるよ。まぁ、確かに５０絡みでいきなり仕事無くなったらビビるとは思うけどさ。娘さん確か大学生だったと思うし』

大学生の娘を抱えてリストラ。もし僕がその立場だったらビビるどころの騒ぎではない。ゴネて復職出来るなら、国とだって争うだろうさ、そりゃ。

『それよりもどっちかって言うと、新しい館長、何つったっけ、天野だっけ？あの人が結構色々と強引にやってるのがどーなのよ、みたいな話っぽい』

「ふーん……この村、割りと進取なトコに関しては大雑把っつーか、融通が利く部分も有ると思ってたんだけど、やっぱ外から来た人が思い通りにやるのには色々と抵抗があるのか」

『図書館に関してはなぁ。あそこは土地から蔵書から、権利関係が色々とフクザツだからなぁ。アタシも良くは知らないけど。独りでどうこうできるようなレベルじゃねーみてーよ？』

確かに、寄贈したらもはや口出しできないとは言え、感情論としては中々そうも言ってられないという所だろう。

「まぁ、取りやめにするならさっさと決めて欲しいなぁ。その方が楽になる」

『つっても、ずっと手伝いする訳じゃねーだろ』

「確かに三日間だけだけどさー」

『しかも、初日からサボってんじゃん』

「そうなんだけどさー……」

『まー、でもサボって正解かもなー。なにせあそこ、色々出るって言うし』

「何がだよ」

『お化けとか幽霊とか怨念とかそういうの』
「あー……たしかに出るかもなぁ……アレじゃ」
『だろー？私の知り合いも何人か夜に不気味な人影が懐中電灯持ってうろついてるの見たって言ってるし』
「人影じゃねーかよ。しかもそりゃ十中八九警備員だろ」
『ロマンがねーなー』
「ロマンの問題じゃねーよ、幽霊なんて見えるようになったら心の病いの問題だ」
『ンな事言ってっからモテねーんだよ、お前は。この村じゃ昔からそういう話は山ほどあんだぜ。いやまぁ、んなことはどうでも良いや。どうせサボってんなら、市内に飯でも食いに行こうぜ。足はアタシが出すし』
「おや、飯の誘いとは珍しいな。つーか、補修中じゃねぇのかよ」
『いや、サボるし』

こいつもこいつで中々に素行が改まらねぇ奴だ。人の事はまったく言えた義理ではないのだが。ちなみに、末摘花の足と言うのは中型のバイクで、何回か後ろに乗せて貰った事があるが、アレは中々にスリリングな経験だった。

そもそも、末摘花は結構なレベルの不良少女なのだ。幸いにして両親にはバレないように上手く立ち回っているようだが、長野でも結構有名なグループのリーダー（女番長？）みたいな事をしているらしく、今時貴重種に指定されても良いぐらいマジメに不良をやっている。いわゆる一つの大人への反抗、若者の無軌道な青春って奴だ。

具体的にはどのレベルでの不良なのかはあえて聞かないが、言動を見るに精神のバランスはそれなりに保っているようなので、本当の意味でヤバい処には手を出していない……と信じたい。

「んー、中々魅力的なお誘いだが、今日は辞めとくわ」

サボりはともかく、市内まで遊びに行ってたとバレたら、流石に葵に殺されかねない。しかも、その相手が末摘花だと知られたら、あるいは死んだ方がマシだと言う目に合わされることは必定である。昔からの因縁だかお嬢様同士の確執だかなんだか知らないが、葵と末摘花はものすごく仲が悪いのだ。

『んー、わかった』

別に末摘花の方も他意はなかったようで、あっさりと引いた。まぁ、末摘花が本気で行きたかったんだとしたら、僕を誘うまでもなくとっとと出掛けているか、もしくはバイクに乗って目の前に現れて強引に拉致するだろう。

『んじゃまぁ、今度またタイミングが合ったら行こうぜ。地酒の美味しいお店見つけたんだ』
「いや、それは問題発言だ！」

年齢的にも、ドライバー的にも。

『固い事言うなよー。お前はアタシの保護者かよ』
「いや、友人だからこそきっぱりと止めさせてもらうぞ！！」
『いーよいーよ、じゃぁ飲みの時はさそわねーもん』
「そもそも飲むなッッ！！」
『うっせー、酒も飲めずに何が人生だー！』
「おっさん臭い！！！」
『可憐な女子高生ですぅ！』
「お前の何処を探しゃそんな素養が隠れてんだよ！？」
『……スカートの中とか？』
「発言がおっさん臭い！！」

いつか間違いなくコイツは飲酒運転で捕まるか、ガードレールから飛び出し風になってしまうに違いない。もしその時が来たならば、僕はハラハラと落涙しながら、墓石に清酒でも掛けてやることにしよう。そうして、胡坐をかいてしゃがみこみ、タバコに火をつけてそっと線香の横に手向けるのだ。

……末摘花がタバコを吸うかなんて、全然知らなかったけれど。高校生の分際でバイクを乗り回して飲酒するような危ない女はタバコも吸うに違いない。そうでなければいけないのだ。多分。

まぁ、まず事故る事を想定する前に、バイクのガソリンに砂糖を混ぜるかマフラーにジャガイモでもを突っ込んでやった方がきっぱりと末摘花の為のような気もしないではなかったが、流石にそこまでする勇気を僕は持ち合わせてはいない。

そもそも、僕は僕自身よりも何割か増しで、末摘花の自制心を信じていた。

この時はまだ、信じていたのだ。

【ＡＣＴ０１】その２へ続く

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ～その２（前書き）

（承前）

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ～その２

－４－

しばらく末摘花と生産性の無い会話を繰り広げていると、学校に着いた。３階の教室の窓から手を振る末摘花にサムアップして挨拶のようなそうで無いようなやり取りをして電話を切り、僕は道場に向かう事にした。

学校まで戻っては来たものの、既にコンピ研でネットをすると言う気分ではなくなっている。末摘花と話す事で、何がしかの心境の変化が僕の中で起こったのだろう。ダラダラとネットで暇を潰すよりも、誰かと遊びたい気分になったのだ。

ウチの高校は基本的に運動部よりも文化部の方が活動が活発であり、部員も多い。帰宅部が基本的に存在せず、軒並み文化部に流れているのだから当然ともいえる。運動部は屋外が陸上と野球とサッカー、屋内はバスケットボールが唯一盛り上がっているぐらいで、他は一応存在はするものの３~５名ぐらいで細々とやっている感じである。

我が相棒にして悪友、関屋真木が所属する剣道部もそんな弱小運動部の一つで、部員は関屋を含めて３年まであわせてたったの４人である。三年生が一人に、２年生が一人、そして１年生が二人。まぁ、運動部を選ぶ事自体が少ない上に、剣道なんて言う汗臭いものを選ぶ奇特な生徒など、殆ど居ないと言うことだろう。しかしながら、一年生二人の内の片方は関屋だが、驚くべき事にもう一人は女の子である。しかも、結構可愛い。

蓼食う虫も好き好きとはよく言ったものだが、まぁ、剣道が好きな女の子が一人ぐらい居ても良いだろう。

弱小部だけあって、剣道部に専用道場は無い。学校の近所にある古武術だか合気道だか良く分からない一般の道場を柔道部と交代で

借りている。わざわざ学校までやってきて戻ると言うのもバカらしい話だが、ダラダラと電話をしながら歩いて居たら学校に到着してしまって、到着したらもはや学校で遊ぶ気に成れなかったのだから、しょうがない。

誰かと無駄話をしながら歩いていると、いつもなら絶対行かないような場所や時間まで散歩してしまうこの現象に、そろそろ誰か名前をつけた方が良いと思う。間違いなく、ヘンな脳内回路が働いてるぜ、これ。

やって来た坂道を戻り、県道に差し掛かった辺りを右に曲がると、直ぐに道場にたどり着く。集会場のような佇まいの道場の入り口には「九仗道場」というまったく流派の分からぬ縦書き変額が掛けられており、その名が示す通り、ここは宴の実家の道場だったりする。

九仗流がどういう流派なのかは宴の説明を聞いてもさっぱり分からないのだが、相手の力を利用してどうこうという感じなので、多分合気道とか柔術に近いのだろう。村の人たちだけではなくウチの学校の生徒にも門下生は多く、学校に格闘技系のクラブが殆ど無いのは、体を動かしたい奴は大体この道場に通うからだといわれている。

宴の実家でもあり、何回か体験入門と称してコッテリ絞られた事もあるので、僕としては割りと馴染みの場所である。玄関先で胴着を着て竹箒で落ち葉を掃く顔見知りの門下生に挨拶をして、土足を脱いで道場へと上がりこむ。

３０畳ほどの道場は、いつもと違い落ち着いた雰囲気だった。

放課後は基本的に部活に使わせてくれる時間だが、空いているスペースでも門下生が柔軟だの基礎トレーニングだのやっているので、気合やら何やらが絶える事無く、騒々しいのが通例だ。しかし、今日は半日授業で部活の時間が早まっているので、門下生がまだ集まってきておらず、数人の気合や竹刀を打ち合う音が散発的に聞こえてくるのみ。

道場の端に歩を進め、面を取りタオルで汗をぬぐっていた知り合

いの先輩と由宇ちゃん（隣のクラスの子で、女子部員だ）に会釈すると、道場の真ん中で丁度練習試合が始まった。

長身の男が二人、竹刀の先を軽く打ち合わせるようにして、互いの間合いを計っている。

前垂の名前を見るまでもなく、片方は関屋だ。構えと動きを見れば直ぐに分かる。そして、関屋と同体躯をしており、練習相手を務めているということは、もう片方は顧問の三橋だろう。いつもは国語の教師だが、一応インハイにも出た事があるというそこそこの剣士らしい。

しばし、軽く手を出しながらも深入りはしない小競り合いが続く。どちらかといえば牽制を仕掛けているのは三橋先生の方で、関屋は動きを少なくして相手を誘っているようだった。昔から、関屋はそういう打ち方をする。三橋先生もそんな関屋の癖はもう十分に理解しているだろうから、無駄に打ち込んだりはせず、隙を探して少しずつ掘削するように間合いを詰めて行っている。

そして、そんなごく小規模なやり取りがしばらく続いた後で、決着は一瞬にして訪れた。

三橋先生の牽制に合わせるようにして関屋の放った小手を払いのけ、面を打ちつけた三橋先生の竹刀は有効打範囲をギリギリ超えた部分で関屋の面に当たり、代わりに関屋の胴が入った。半歩の間合いの差で、関屋の勝ち。

よく見ていないと、三橋先生の面が有効かどうかで審判が分かれるぐらいの微妙な勝負だった。僕だって、関屋がそうするだろうと予測していなかったら見逃していたかもしれない。

それは、とても関屋らしい勝ち方だった。

残心を終え、所定位置に戻ると一礼して蹲踞する二人。そうして、更にもう一本。三橋先生が関屋を相手にする場合、実戦以外に教えれるものが無い、という理由で、二人の練習はほぼ実戦である。毎日毎日飽きもせずに打ち合っているようだが、まぁ、確かに関屋によりハイレベルな技術を教えられる講師は、この村には居ないのだ

から致し方ない。
それから更に5本ほど打ち合った後で、関屋と三橋先生の練習試合は終了した。
深呼吸しながら引き上げてきた関屋は、道場の隅で胡坐をかく僕に視線を向けてくるが、別に何を言うでもなく僕の横に正座すると、面を解いた。スポーツバックと一緒に置いてあった関屋のタオルを黙って横にブン投げると、受け取った関屋はゴシゴシと汗をぬぐう。
道場の中央では、今度は由宇ちゃんと先輩が、先ほどとは一転してどこかしかユーモラスに打ち合っていた。まだ全然様になっていない、むしろ可愛げがある太刀筋の由宇ちゃんと、ダメ出しをしながら練習相手を務める先輩。なんかこういうのも良いなぁ、とその光景を眺めながら、僕は口を開いた。

「どーよ」
「つえぇ」

関屋の返事はそれっきりだった。が、まぁ、いつもの事である。関屋と僕の会話は長台詞になることも有るが殆どは短いセンテンスの積み重ねで出来ていて、お互いにそれで大体の意図は伝わる。
今のは、「なんかお前今日はあんまり冴えてねーけどどうしたんだよ」と言う僕の質問に対して、「別に俺の調子が悪い訳じゃなくて先生の方の調子が良いんだよボケ」と関屋が返した感じである。
言われた訳では無いが、今のニュアンスには、確実に語尾に悪態が込められていた。
関屋とは、物心付く前からの仲だから、いわゆる一つの幼なじみという奴である。実家が近所で、ウチの両親と関屋のところの両親が仲が良く、気がついたらいつの間にか一緒につるんで遊びまわったり殴り合いの喧嘩をする仲になっていた。中学校までは地元の学校に進み、高校でようやく腐れ縁が断ち切れるかと思いきや、何の因果かコイツまで水無瀬高校に進学してきた。恐らく、ウチの母親

が関屋のおばさんを炊きつけたか何かしたのであろう。
今でこそ無愛想な剣道バカに成り下がった関屋だが、昔はコレでも喧嘩っ早いので有名で、温和な僕はこいつの暴走を止めるのに大変苦労したものである。竹刀やら木刀を振り回して不良どもに殴り込みをかけていたあの頃の関屋は、まさに狂犬と言っても過言ではない代物だった。なんだか気が付かないうちにずいぶんと丸くなって、スポーツで若さゆえのエネルギーを発散させちゃったりする典型的筋肉バカになっちまったが、無愛想な所だけはまったく昔と変わらない。
しばらく二人して黙って由宇ちゃんと先輩の当たり稽古を眺めていると、三橋先生が近づいてきた。面を取ると中々の男ぶりだが、生憎と彼女とかはまだ居ないらしい。居ても良さそうなもんであるが、やっぱり剣道なんかをやっていると中々モテ無いんだろう（暴言）。

「来てたか」

と、三橋先生が笑いかけてきて、「ういーっす」と僕はいつも通り返事する。

「こう頻繁に遊びに来るぐらいなら、お前も剣道部に入ればいいのに」

三橋先生の台詞に、僕は肩をすくめてみせた。

「色々と急がしいんすよ、こう見えても」
「暇そうに見えるけどな」
「まぁ、確かに今はそうなんすけど」
「中学の頃は剣道やってたんだろ？結構良いトコまで行ったらしいじゃないか」

他意なくそう問いかけてくる三橋先生に、僕が返答に詰まっていると、変わりに関屋が口を開いた。

「コイツは部活とかやんないですよ」
「そうなの？」
「バカだから」
「……おいコラちょっと待て。毎日毎日竹刀振り回して性欲発散させてるような猿に言われたかねーよボケ」
「バカだから」
「二回言った！！？コッチの台詞にリアクションを返そうともせずに二回言ったなオイ！！？」
「まぁ……バカっぽいよなこいつは」
「先生も納得してる！？」

こいつら二人はどうやら僕の敵のようだった。

「剣道なんてやってたら頭シバかれすぎてバカになるんだからな！！汗臭いしモテ無いし、良い事なんてなんもねぇんだぞ！！？」
「いや、でも関屋君の方が柏木君よりもカッコ良いと思う」
「うん、柏木より関屋のほうがモテるよな、実際の所」

いつの間にか練習を終えた由宇ちゃんと先輩までもが関屋に加勢してきた。

これは……まさか四面楚歌！？

ちくしょう、ちょっと剣道の悪口を言ったぐらいで取り囲んで糾弾するなんて、剣道部員のクセに心身の修行が足りてねぇ奴らだな！！これこそまさに剣道なんて言うものに精を出しても決して人間性が向上しないと言う良い証拠じゃないか！？

……どちらかと言えば僕がバカな証拠の方をさらけ出していると

言う気もしないではなかったが、人間、細かい事を気にし出したら負けである。他人に優しく、自分にはもっと優しくと言うのが僕のモットーなのだ。

昔の人は言いました、「心に棚を作れ」と。

しかしながら、所以なき誹謗中傷をこのままにしておいては僕のこの学校での立ち位置がバカキャラで固定化されてしまう。誤解は早めに修正し、後背の憂いを絶っておくに越したことは無い。

僕は、関屋の隣においてあった竹刀を手にし、雄雄しく立ち上がった。

「そこまで言うなら仕方が無い。剣道で勝負つけようじゃないか！！」

「うわー、バカだ」

「本当にバカだこいつ」

好きなだけ嘲笑うが良い！！貴様らがこれから体験する真の恐怖を味わった後でも、そんな小生意気な口が聞けるかどうか楽しみで仕方が無いわ！！！

「誰でも掛かってこいやぁぁぁぁぁぁ！！」

――こうして、昔とった杵柄を思う存分発揮し、僕は三橋先生を始め剣道部員の全員からボコボコにされてやったのでしたとさ。

―５―

「痛い」

「ボケ」

「体のあちこちが痛いんですよマジで」

「死ね」

マジで洒落になんねぇ。あいつら本気で掛かって来るんだもん。素人に対する思いやりとかそう言う手加減を知らないのだろうか？そんな事だからいつまで立っても部員が増えないのだと言うことを、声を大にして言いたい。友愛の精神が最近の流行なのだと小一時間説教したい。

しかしながら、剣道部員を並べて説教をかまそうにも、現実問題として久しぶりに労働筋肉以外を使った僕の体はもはや限界まで乳酸が貯まって、硬直死寸前の所まで来ていた。

大体、よくよく考えるまでもなく、図書館の棚卸しでなけなしの体力と筋力を消耗し尽くした後だったのだ。端から勝ち目などなかったのだ。

それを知った上であいつらは僕をカモとして痛ぶってくれたに違いない。まったくもって大人気ない連中だ。が、とりあえずはあちこちにシップを貼ってくれた由宇ちゃんの優しさに免じて今日のところは勘弁してやろうと思いながら、部活を終えた関屋と連れ立って道場の玄関まで戻ってくると、制服に着替え、カバンを両手で保持した初音が、下駄箱にもたれかかるようにして佇んでいた。

ヤバイ、すっかり忘れてた。超怒ってる。

いつもの笑顔ではなく、ふくれっつらでこちらを見つめてくる初音を見つけるやいなや、僕は全力で関屋を指差した。

「僕は嫌だって言ったのにこいつが無理やり僕を練習台に！……うッ！！」

右ふくらはぎにちょっと洒落にならないレベルの鈍痛が走ったが、どうやらローキックをぶちかましてきやがったらしい関屋はとりあえず放って置いて、初音の目を見つめる僕。

視線を外したら負けだ。獣を相手にする場合は、視線を外さずに気合で相手を押し込めるのだ。

苦痛に潤む僕の目を真っ直ぐに見据え、しばらく何を言おうか逡巡した末――初音は頭をゆっくりと横に振った。
そうして、大きくため息をついて、下駄箱から体を起こすと、上目遣いでちょっと拗ねたように唇を尖らせた。

「……大変だったんだから」
「ごめん！」

即効で謝った。
僕は必要と有れば詫びだって入れられる謙虚さを持ち合わせた男なのだ。と言うか、拗ねる初音も可愛い。

「黙って抜け出すなんて酷いよ？」
「ですよねー」
「みー君が抜けたぶん、宴ちゃんと篠原さんが頑張ってくれたんだからね？」
「ですよねー」
「今度、二人にはちゃんとお礼を言っておいてね？」
「もちろんですとも！僕は他人に対する感謝の念を失った事などこれまでの人生において一度も無い男ですよ！！」

僕の精一杯の誠意が通じたのだろう（？）、初音はもう一度だけ深々とため息をついて、ようやく真っ直ぐな視線を取り戻した。
僕の後ろに視線を向け、「お疲れ様、関屋君」と微笑みかける。
「おう」と無愛想な関屋の返事に笑顔で頷いた後で、初音は改めて僕の全身を眺め回した。

「扱かれたみたいだねー」
「久しぶりにいつも使わないような筋肉使ったぜ」
「棚卸ししてた方がまだマシだったんじゃないの？」

「今から考えると、そう思わざるを得ない部分は確かにある……」
「まぁ、良い運動にはなったんじゃない？」
「アレはもはや運動じゃなくてイジメだ」
「はいはい」

僕の悲嘆を軽く受け流しておいて、初音は踵を返した。

「まぁ、今日サボった事は葵ちゃんには秘密にしておいてあげるから、ちょっとそこまで付き合ってよ」
「えーー！？いや、流石に今日はもう帰って風呂入って寝たいんですけど」
「神社にちょっと寄るだけだって。美椛（みなぎ）ちゃんが居たから、挨拶しておこうと思って」
「お、それは是非とも逢いに行かなきゃな」

何はともあれ、美椛が居るなら顔ぐらいは見に行かなくてはなるまい。

―６―

村に昔から伝わる伝説に、鬼女紅葉伝説と言うものがある。

昔々にこの村に紅葉と言う名の一人の美しい鬼女が居て、村人に習い事を教えたりして暮らしていたのだが、旅人を襲ったりするので最終的には武士に討たれて死んでしまいました、ちゃんちゃん、みたいなお話だ。

その紅葉の墓があるのが紅葉神社で、僕は知らなかったが紅葉伝説自体は能にもなった有名なお話らしく、観光客とかがたまに訪れたりする水無瀬村の数少ない観光スポットである。水無瀬村には幾つかの神社があるが、みんなが固有名詞抜きで神社と呼ぶのは紅葉

神社だけで、それだけ村の信仰心の中心に据えられているのだろう。
しかし、僕にとって紅葉神社は村の鎮守でも伝説の鬼女の墓がある場所でもなく、単に葵の実家と言う程度の意味合いしか持っていない場所だった。別に大きな社でもなく、お堂が一つに倉が一つ、社が一つと後は小さな古びた墓が点在するだけの、まったく持って見ごたえの無い場所なのだ。件の紅葉の墓にしたところで、取り立ててクローズアップされている訳でもなく、階段を上がって直ぐの所にこじんまりと鎮座しているだけで、標識が立っていなければ見落とすレベルである。
まぁ、全体的に観光スポットでは有るけれども観光化されていない場所なのだ。
初音は「寄る」と言ったものの、九仗道場は元々神社に併設されているので、道場の玄関を出たらそこは既に神社である。具体的に言えば、神社の駐車場であるが。
駐車場を抜け、鐘付き堂の下を潜り抜けて葵の実家の横を通り、社までやってくると、その向うにこじんまりとした畑が見えてくる。家庭菜園に毛の生えたようなレベルの小さな畑で、その向うは崖になっており、市役所を中心とした水無瀬村の中心部が眺望できる。
既に時刻は夕方のピークを迎え、畑の端に植えられたコスモスが日の光を浴びて赤く染まっていた。

「あ、初音ちゃんだ！」

僕たちが畑までやってくるなり、小さな人影が中から飛び出してきた。
小さな体には不釣合いな、しかし一応はあつらえたらしい作務衣を来た少女は、ダッシュで初音の前までやってくると、勢いをつけたまま抱きつこうとして、不意に自分の手が泥だらけなのに気付く。何回か両手と初音を見比べた後で、結局抱きつくのは諦めて、「えへへ」と照れ笑いを浮かべた。

葵の妹の美椛である。
可愛らしい外見からはとても想像出来ないが、このちっこいのが大きくなったらあの暴君に化けるのだ。まったく持って信じがたい。あるいは、斎宮家の連中は個体進化でも遂げているのではないだろうか。そうとでも考えんと、同種の生物だとは思えん。

「うーす」

僕がその場にしゃがみこんで美椛に声をかけると、美椛も満面の笑顔を僕に向けてくる。

「みーくんだ、みーくん！元気！！？」
「おー、元気元気。お前は」
「私はいつも元気！」

なんだかずいぶんと久しぶりな感じの挨拶だが、実際の所は一週間前に会ったばかりである。しかし、とりあえず会った時にお互いの元気を確認しあうと言うのは、美椛と僕の恒例行事みたいなもんだった。
美椛は続いて僕の横に立つ関屋を見上げ、泥だらけの右手を跳ね上げた。

「おっす、でかいの！」
「よぉ、ちいさいの」

こちらもまた、様式美な挨拶。

「……畑仕事してたのか？」

とりあえず会話の取っ掛かりにそう問いかける僕に、美椛は両手

をひらひらとさせた。泥だらけでは何を触る訳にも行かず、自分の両手の取り扱いに困っている仕草である。

「大根を取ってた。結構大きいの取れたよ！」

「そう、良かったね」、と初音が美椛の頭を撫で、嬉しそうに笑う美椛。

なんつーか、美椛小学生４年生のはずなんだけど、こうしてみて居ると幼稚園児ぐらいに見えることもあるから不思議だ。普通小学４年生と言えば、結構色々と完成しだすお年頃なんじゃないのか？反抗期とかも始まってみたりして。やっぱ、田舎育ちは純朴に育つって事なのかね？

「今日はみんなどうしたの？」

「んー、関屋と一緒に剣道の練習やって、そんで美椛が居るって聞いたから寄ってみたんだ」

「あー、さっきなんか叫び声してた。そうか、あれみー君だったんだね」

美椛はテクテクと僕に近づくと、品定めするように僕の顔を覗き込む。

「大丈夫？痛くない？」

「へーき、へーき。慣れてるから」

「そっか！」

にっこりと笑みを浮かべる美椛の頭を、僕はガシガシと撫でた。こいつはホントに可愛いなぁ。

「もーーー、みーくんやめてよーーー！」

美椛は頭をくしゃくしゃにされて嫌がるが、自分の手が汚れているので振り解こうとはしない。まったくもって、あの姉と同じ生命体とは思えないぐらい良くできた娘さんだぜ。

僕らのはしゃいでいる声を聞きつけたのか、畑の奥の方から一人の初老の男の人が歩いてきた。青袴に白衣という神職衣装をまとい、笑顔を浮かべてこちらに会釈するのは、この神社の禰宜の平野さんだった。

「いらっしゃい」

『お邪魔してまーす』

声をそろえて挨拶を返す僕ら。

平野さんは実質的な現在の紅葉神社の神主である。一応形式上は葵が紅葉神社の神職と言う事になるが、女性でしかも高校生の身の上であるから、葵には巫女は出来ても神主は出来ない。行く行くは葵が婿を貰ってその人が神主になるのだろうけれど、その間神主不在と言うわけにも行かないので、先々代より禰宜を勤めている平野さんが代役として立っていると言う訳だ。

葵自身は、さっさと平野さんに名実共に神主になってもらって、後継はどこかから派遣してもらったら良いんじゃないかと考えているようだが、まぁ、中々そうは問屋が卸さないのが田舎の風習やらの難しい所で、自分の家の事とは言え、葵の一存では決められない事もあるのである。

「美椛ちゃん、とりあえず手を洗ってきたら?」

平野さんが目を細めて好々爺然と美椛に声をかけ、「そうする!」と元気に応える美椛。

「初音ちゃん、一緒にいこ!向うにね、おっきなお花が咲いたん

だ」と初音を引き連れ、美椛は庭の隅にある水道の方へと駆け出して行った。

僕はチラッと腕時計に目を落とす。長居をするつもりはなく、挨拶したらとっとと引き上げようと思っていたのだが、まぁ、致し方有るまい。

僕は美椛と初音から視線を外すと、平野さんが右手に下げているバケツの中に入った大根に視線を向けた。

「晩御飯ですか？」

「ええ、今日は大根の田楽にしようと思いまして」

「いいっすねー」

平野さんは、葵と美椛の家政夫のような事もしている。ほぼ寝たきりに近い葵のお婆ちゃんの面倒も見ているようで、まぁ、実質斎宮家の家族のようなものだ。両親が亡くなって女子供に老人だけしか残っていないとは言え、たかが雇われ禰宜だった平野さんがそこまで献身的に斎宮家の面倒を見るのは不思議な事ではある。

昔、葵のお婆ちゃんとなにかロマンスがあったんじゃ無いか、と言うのが初音の推理（と言うか願望？）だが、事実がどうなのかと言うことは別に誰も触れない。

僕だって、逆の立場なら同じことをするだろう……いや、冷静に考えると姉だけは要らんな。

「……美椛、調子良さそうっすね」

前フリなく僕が発した台詞に、平野さんは少しだけ笑顔を曇らせた。しかし、直ぐにもとの表情に戻ると、庭の向うから聞こえてくる美椛と初音の笑い声に目を細める。

「ここ最近は、かなり良いみたいですね。お医者様も、このまま調

子が持つようなら学校に戻っても良いと仰ってますし」
「そいつぁ何より」
「それに、昨日の集会で、秋祭りで紅葉役をやる事も決まったんですよ。あの子はそれが凄く嬉しかったみたいで、今日はずっとあの調子なんです」
「あぁ、そうなんですか！ずっとやりたいって言ってたもんな。そりゃぁ、ホントに良かった」

美椛にしても、葵にしても朗報だ。
水無瀬村の秋祭りはその名もズバリ紅葉祭りなんて呼ばれているが、メインイベントは神社の巫女が紅葉として舞を奉納すると言うものなのだとか。その役割は代々斎宮家の女性が担ってきたのだが、今年の紅葉役を誰にするのかでずっとモメていたのだ。
歳経験を考えれば紅葉役は葵でほぼ決定なのだが、葵自身はまったく持ってやる気が無くゴネまくっており、逆に美椛の方はずっと憧れていたらしい。かといって年功序列をすっ飛ばして美椛でいいのかと言うと、過去の風習がどうの、前例がどうのといった面倒くさいアレコレが噴出して、中々に村の中の意見もまとまらなかったとか。
それがようやく落ち着いて、念願叶って紅葉役を演れる事になったんだから、そりゃ、確かにはしゃぐ訳だ。

「……葵さんの方の調子はどうでしたか？」

今度は、僕が不意を突かれる番だった。一瞬、平野さんの質問の意図が分からずあっけに取られた後で、ゆっくりと理解がやってくる。

「……あいつ、またしばらく帰ってきて無いんですか？」
「ええ……」

葵は、よく家出をする事で有名だった。とは言うものの、それは世間一般で言うところの家出とは異なり、単に実家に帰らずフラタニティのロッジで寝泊りしていると言う事なのだが。

アイツが自分の家をどういう風に考えているのかはよくは知らないし、村からの期待を一身に受け止める立場と言うのに嫌気がさしているんだろう、ぐらいの事は分かる。

しかし、それとここに帰ってこないというのはまた別問題だ。確かに、ここに戻ってきたら両親の事を初めとして色々な事を思い出すのも事実だろうが、だからと言って、美椛や婆ちゃんを放って置いて良いと言う問題ではないのだ。

僕らもこの件に関しては結構口をすっぱくして説教しているのだが、もちろん、僕らの忠告や説教などをまともに取り合う葵ではなし。

それに、アイツが本当に自分の中の問題を解決しないとどうしようもないと言うことは、僕たち自身が良く分かっているのだ。

だから、僕は苦言も愚痴も吐かない……吐けない平野さんの代わりに、大きくため息をついた。

「まったくもー、あのバカは……。とりあえず、後で電話しときますよ。今日の晩飯は美味そうだって」

「……そうですね、宜しくお願いします」

僕の台詞に、平野さんはゆっくりと笑みを浮かべた。その笑みに釣られるようにして、僕も笑顔を返す。

――その時。

隣に立つ関屋が何かに打ち震えるように緊迫し、その気配に僕が背後を振り返ったその瞬間――

僕の周りの時間が完全に静止した。

木立を透かして斜めに差し込む金色の光に照らされた参道の向う、暗く落ち込みシルエット状に浮かび上がる山門の四角い額縁の中、後背の木々の煌きに浮かび上がる暗く沈みこむ陰の様に……そいつは居た。

光を拒絶し、影の部分こそが自分の居場所であると規定しているかのような、黒い塊。

他人の理解をまったく必要としない異物としての自分を受け入れ、愉悦しているかのような存在。

外部、変質としての意義を完全に理解しているモノ。

……最初、僕には何か黒い塊のようにしか認識されなかったその姿が、やがてゆっくりと脳の中で像を結び、人の姿へと篆刻されていった。

そして僕の現実認識野に現れる、全身黒ずくめ、まとまりの悪い黒い長髪をなびかせて、両手をダウンジャケットに突っ込んだ、黒眼の男。

……何故だろう。その後何度となく目にする事になるその姿だが、一番最初に目撃したあの瞬間、確かにそこに立っているのが僕よりもはるかに歳を取った年配の男に見えた。

それは、これまでの人生で積み立ててきた気配とか佇まいとか、あるいは存在の有り様そのものが僕とは根底から違う「異質なるモノ」としてそいつを認識したからなのかもしれない。

あるいは、あの時自分でも理解できていなかった、「恐怖」と言う原始的な感情に突き動かされていたからなのかもしれない。

今でもはっきりと覚えている。

周りの空気が完全に凍りつき、木漏れ日の光線に漂う埃の粒子すら視認できそうなほど研ぎ澄まされた僕の視覚に飛び込んできたそ

いつは、口元に大きな嘲笑を浮かべていた。世の中にある全ての誠実さとか、勇気とか、正義とか、愛とか、そう言った人が生きていく上で寄り所にする、前向きで上昇する感情の全てを、冒涜的に嘲笑っていた。

果たして、僕がそいつを認識してからどれぐらいの時間が経過したのかは分からない。ただ、僕の主観的には数秒、数十秒もの時間が過ぎた後――僕は自分が呼吸を止めていたと言う事実に気付き、むせ返るように大きく息を吐き出した。

そうして、それが契機だったかのように、僕の周囲の時間が再び動き出す。

我に返ってみれば、そこにはただ黒いダウンジャケットに黒いジーンズを穿いた少年が笑顔で佇んでいるだけだった。

完全に気圧された僕たちの様子などまるで気がつかぬ風に、ゆっくりとした足取りで近づいてくると、まだ身動きの取れない僕たちに対して、少年はにっこりと微笑んでみせた。

「すいません、ちょっと見学に来させてもらいました。紅葉の墓は何処にありますか？」

「紅葉様のお墓なら、そこにありますよ」

平野さんが平素と代わらぬ優しげな声で、少年の隣にある小さな墓標を指差してみせる。少年は平野さんが指した方を振り返ると、不意に感動の面持ちを浮かべ、墓の前にしゃがみこんだ。

「おお、これが紅葉の墓かぁ！いやぁ、素晴しいなぁ！」

素晴しい、これは凄い、やっぱり見といてよかった等とはしゃぎながら少年は、きょろきょろと上下左右を見渡す。そうして、自分の背中の方に沈む太陽と、自分の影が落ちる紅葉の墓をしばらくじ

っと眺めた後で、おもむろに両手を合わせて目を閉じ、なにやらぶつぶつと呟いきはじめた。

そうして、ひとしきり真言だか念仏だか祝詞だか良く分からぬ呪文めいた文言を呟いた後で、不意に立ち上がって笑顔を向けてみせた。

「有難うございました。これで長年の夢の一つが叶いましたよ」

「そうですか」と平野さんはニコニコと会釈を返す。

「それじゃ、この辺で失礼します」

少年はそう言ってにっこり笑うと、「お邪魔しました」と踵を返す。

そうして、二、三歩門の方へと歩いた所で、ふと立ち止まってこちらを振り返った。

「所で……一つお尋ねしたいんですが」

「なんでしょうか？」

笑顔を崩さぬ平野さんに、上体だけ振り返ったまま少年が笑みを浮かべた。

……それは、先ほどまでの笑みとは異なり、口元だけが歪んでまったく目が笑っていない、とても嫌らしく気味の悪い笑みだった。

「斎宮葵さんは、今ご在宅ですか？」

「……いえ？葵さんのお知り合いですか？」

「いや、そうですか、それなら良いんです。何でもありません、有難うございました」

そう言い残すと、今度こそこちらに背を向け、少年はゆっくりと

した足取りで立ち去っていった。
門の向う、参道の階段を下りて少年が見えなくなるまで見送った後で、僕は、ようやく全身の緊張を解いた。と言うより、その瞬間まで僕は自分が緊張していた事に気がついていなかったのだ。

「な、なんなんだアレ……」

どういったものか分からず、自分の感覚の急変にも説明が付かずそう呟くしかなかった僕に、小さく、しかし深く息を吐き出して、関屋が肩をすくめた。

「観光客だろ？」
「いや、ちょっと待て、どう見ても真っ当な人間には見えなかっただろ！！？」
「そうか？俺には真っ当な人間以外の何にも見えなかったけどな」
「あぁ？頭沸いてんのかお前？そりゃ、お前みたいな朴念仁の不感症野郎には感じられなかったかも知れねーけど、どこをどうひっくり返してもカタギの雰囲気じゃなかっただろうが！」
「お前みたいな年がら年中妄想しているようなバカにしか感じ取れねーよ、んなもん」

いつもならここから長々と口喧嘩を始める所だが、どうにも先ほどの少年に毒気を吸われたようで、僕は怒気はため息となって抜けて行った。

そしてそのまま、僕と関屋は何をするでもなく、美椛と初音が戻ってくるまで黙って少年が立ち去った方を眺め続けていた。

―７―

主不在の斎宮家に上がりこみ、平野さんが淹れてくれたお茶を飲みながら皆でよしなし事をそこはかとなく語りけると、いつの間にかすっかり日も沈んで夜になっていた。

「じゃぁ、また明日ね」

河原の分かれ道、初音が手を振って笑顔で薄暗く点々と灯る街灯の向うへと消えていくと、僕は大きくため息をついた。

ため息をつくたびに幸せが逃げていくと言うなら、今の僕にはもうこれっぽっちも幸せは残っていないに違いない。と言うか、僕の人生で本当に幸せだった時期なんて言うのが在ったのだろうかと言われると、甚だ疑問である。

「疲れた……今日はマジで疲れた」

この台詞もなんか最近毎日繰り返しているような気がするが、案の定、隣を歩く関屋は実に興味が無さそうに「いつもの事だろ」と呟いた。

「いつも疲れてるけど、今日の疲れはなんかこう、質が違うんだよ！高品質の疲れと言うか、体にジットリネットリとへばりついて関節から筋肉からを侵食してきて、何で生きてるのかの人生哲学を問答したくなっちゃうような類の疲れなんだよ！」

「大体において、疲れって言うのはそう言うもんだろ」

「いやまー、そういわれれば確かにそうなんですけどねー」

山間の向こう側にはまだほんの少しだけ夕日の残滓がこびりついていたが、広い間隔で街灯が点在するだけで他に光源らしきものの存在しない県道は、いつも通りに静まりかえっていた。

学生の帰宅時間は既に終了し、出かける場所もないから、日が落

ちてからの水無瀬村は虫の鳴き声だけが刹那に響く、水底のような場所になる。

所々からたまに聞こえてくる笑い声は、近所の家々に下宿する学生たちのものだろう。

長野市内までバスで1時間、日に3本も路線の無い水無瀬高校であるから、学生の内の大半は村の中に下宿している。本来なら学生寮などを作って住居に当てる所なのだろうが、設立時に学校と村の相談で、学生の下宿先を村の家々が受け持つと言うことになったのだ。

寮などを新設しなくても良い学校にとっては願ったりだし、村の人たちも若い人を受け入れる事には積極的で、尚且つ学生の保護者にとっても、下宿先が里親としてきちんと監督してくれると言う安心感も有って、この制度は水無瀬高校の特色の一つとして広く受け入れられている。

下宿生は入学するとまずはランダムに学生受け入れ先の家々に割り振られ、相性によって下宿先を転々としていく。そのうちに自分に合った下宿先を見つけると、在学中はそこの家族として過ごしていく事になるのだ。そうして3年間を過ごすうちに、下宿先は第二の家族となり、水無瀬高校、ひいては水無瀬村への郷土愛が育成されると言う訳である。

話によると、下宿先の先輩との繋がりなんかで進学やら就職が有利になったりといった、世代を超えたコミュニティも形成されたりするらしい。水無瀬高校日影地区在学生連合会、みたいな。

そして、僕と関屋が下宿している先がどこかと言うと、学校から徒歩で２０分ぐらいの和田地区にある「あやめ寮」と言う学生寮である。

「あやめ寮」（僕等は端的に寮と呼んでいるが）は廃業した旅館を利用して作られた、水無瀬村に3つある学生寮の内の一つである。相部屋が１０個、一人部屋が5個の築３０年になるオンボロ極まり

ない木造二階建てで、僕らを含めた1年生から3年生までの合計25名が共同生活を行っている。

入学当初、とりあえず別に他の知り合いも居ないので同宿を希望していた僕と関屋が最初に放り込まれたのがこの寮で、半年たって同僚の連中とも馴染んできた今となっては、恐らく3年後も僕の下宿先として機能している事だろう。

右手に水無瀬川と国道を見下ろしながら林道に近い下校路を抜けると、徐々に喧騒へと近づいていく。

最後の角を曲がり、寮の前まで戻ってきてみれば、相も変わらず同僚どもが宴会ともお祭りとも付かぬ騒動を繰り広げていた。

ボロボロの木造旅館の窓々からは煌々と光が溢れ、駐車場には持ち出された木造テーブルやらキャンピングセットが並び、プロパンガスボンベに直結された業務用のコンロの上で、中華ナベが振られる。運動会の時に使われるようなオープンテントの下では長いす・長テーブルに着いた先輩連中がカードゲームに興じ、レンガ造りのバーベキューコンロでは、何とも知れない怪しげなくし肉が油を滴らせ、玄関先では囲碁と将棋と麻雀卓が軒を並べている。一番道路に近い場所にある焚き火の周りには同級組みがたむろし、公には一切アルコールが入っていないとされている謎のジュースを傾けながら談笑していた。

それは、まったくもって代わり映えせぬ、寮の日常風景だった。

いつの頃から、どんな先輩が始めたのかは不明だが、夕食は皆で共同でやりくりする、と言うのがあやめ寮の鉄の掟の一つである。料理当番や片付け当番は交代制になっており、大体においてみんなで押し付けあったり貸し借りの精算道具にしたりしているが、寮長が取り仕切ることで、なんとか上手くやっている。

食材は月額で徴収される食費から捻出されるか、もしくは実家からの送られて来る援助物資を提供する事で賄っており、18時から21時まで、と言うアバウトな時間に戻ってくれれば、大体は何がし

かにありつけると言うシステムになっている。
あやめ寮の共同夕食（と言うか連日絶える事の無い宴会）は学生の間では結構有名で、寮生で無いにもかかわらず日参して一緒に騒いで居る奴がいたり、小遣いが苦しくなって小銭だけ握り締めて値段分の飯だけ食って帰ったりする奴がいたり、まぁ、ちょっとした夜のコミュニケーション空間として成立しているのだ。
ただ、あやめ寮が男子寮なので、参加者は基本的に男性である。たまに女子生徒が友達や彼氏に連れられてやってきたり、料理を手伝いに来てくれたりするが、その頻度はそんなに高くない。もちろん、女子が立ち入り可能なのは駐車場までで、寮自体は絶対女人禁制なのであるが。

「おー、遅かったじゃん。また部活か？」

駐車場にたどり着くなり、同僚同級連中が声をかけてきた。疲労に任せた前傾姿勢でふらふらと歩を進めながら、僕は右手をひらひらと振ってみせる。

「勤労奉仕だよ、キンローホーシ。あんなもん、部活じゃねぇよ」
「今日は何やって美少女様たちと遊んでたのよ？」
「図書館の棚卸しの手伝いだよバカヤロー」
「あー、アレかー。穴掘り穴埋めの刑罰の方がまだしも建設的なんじゃないかって言われてるアレか」
「ソレだよ、ソレ。そのうちアレ死人出るぞ。つーか、現実問題として何人か下に埋まってても既にわかんねーレベルだぞ。最終的には本じゃなくて白骨死体でも掘り出されるんじゃねーのって勢いですよ」
「まぁ、水無瀬高のヒロイン様三人も侍らせて毎日キャッキャウフフしてんだから、そんぐらい耐えときゃいーんじゃね？つーか、むしろご褒美なんじゃねーの？お前ドMっポイし」

「ふざけんな、僕は徹頭徹尾完璧なノーマル人間だ。いい加減あいつらは女神様なんかでは無いと言う現実を直視しろ、認識を改めろ、僕に泣いて詫びろ、そして死ね」

とりあえず同級連中を蹴り飛ばしながら、寮の入り口へと向かう。

「あれ、飯くわねーの？」

「食うよ！！腹ペコだよ！！しかしその前にまず風呂入りたい。汗だくで気持ち悪い。自分から腐敗臭がする」

「あー、じゃぁとりあえず清水先輩にナシ通しといて。今日の風呂当番あの人だから」

「あいよー」

テントの先輩連中に挨拶をし、卓上ゲーム連中を冷やかしながら、靴で溢れかえる玄関を、靴を脱ぎ捨てながら猫足で踏み越える。廊下にもダベったりモンハンをしたり早くも寝潰れている学生どもがひしめき有っており、相変わらず寮生よりもその他の学生の方が多い。顔なじみの連中に挨拶をしながら、人だったり物だったりする障害物を乗り越え、自室のある二階へと上がった。

一階ほどではないものの、二階も人やら私物やらで溢れかえっており、相変わらず通りにくい事この上なかったが、半年も住んでいれば大体の通行ルートは把握しているものだ。踏んで良い物とヤバい物の違いも。

最奥の自室までの道すがら、清水先輩の部屋の扉を押し開き先に風呂に入る許可を貰ってから、ようやく僕は自室へと転がり込んだ。

テーブル代わりのコタツを中心として、僕のものと関屋のものと同僚の連中のものと、その他誰のものかも分からない書籍や小物や家電やゲームソフトが散乱する床を両足で掃き開くようにして進み、カバンを放り投げながら二段ベットへと倒れこむ。

今月は僕が下の段で、関屋が上の段である。

僕に続いて関屋が戻ってきて、電気を付ける気配がした。不意に目を刺す蛍光灯の光に、僕は枕に顔を押し付けた。

「ねーーーーみーーーーー」

横になった途端に、一気に疲労が押し寄せてきた。なんかもう、何もかもが面倒臭くなってくる。

僕たちが戻ってきたのを察したか、寮のどこかで誰かと遊んでいたらしい子猫の活計（たつき）が、ダッシュで部屋に戻ってきた。てちてちと爪が気の床を叩く音がして、カリカリと扉を押し開けた音がするとほぼ同時に、僕の背中に暖かい獣が飛び乗ってくる。

「ニャーニャー」と背中でじたばた暴れる活計を後ろ手で掴み上げ、顔の横に持ってきてガシガシと撫でていると、ブレザーをハンガーに掛けた関屋が僕にノートを投げつけてきた。

瞬発的に活計がベッドから降りて難を逃れると同時に僕の頭にノートが覆いかぶさって来る。

「とりあえず風呂入ったら飯食う前に宿題やっとけ」

「おー……」

「僕は先飯食ってくるから」

「おー……」

数瞬、関屋は潰れかけの僕を見下ろしてなにやら考えていたようだが、やがて諦めたのか、電気を消して部屋から出て行った。その後に続くようにして、活計も再び廊下に飛び出していく。

活計の爪音が遠ざかるのと、窓の向うから聞こえてくるいつもの喧騒をぼんやりと認識しながら……僕はいつの間にか、眠りに落ちた。

とりあえず、こうして、まずは一日目が終わった。

【ＡＣＴ０１】終幕

＊＊＊

【幕間～ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ～】

『監視報告書　ＮＯ－０９０９２３－ａ』

監視対象目標、柏木行幸（以下、対象甲）と遭遇。言動に若干の不審点が見当たるものの、被疑対象行動として特筆すべき点無し。現在、監視対象目標、水無瀬村（以下、対象乙）の定波結界に侵食無し。監視任務は順調に進展中。ただし、対象甲の動きに特筆すべき点が見当たらないと言う事は、逆を返すと本部の情報解析に齟齬が見られる可能性もある為、至急ＡＲプログラムと対象乙の評価査定の再検査を要請する。現状において問題点が見受けられないと言うべき点こそをむしろ問題点とすべきであると思われる。

以下所感であるが、対象甲が現象の特異点であると言う想定そのものが推論の決定的なミスである可能性も否めず、家族構成、思想、経歴を含めて徹底した情報の洗い直しを行い、推論に瑕疵が無いかを検証すべきであると思われる。

明日も引き続き監視任務を続行するが、本作戦の規模・影響を鑑みるに、可及的速やかに監視員を補填し、作戦遂行を補助される事を望む。

―追記―

本当に、あの少女を抹消すべきなのか……？

――

【ＡＣＴ０２】に続く

【ACT02】セパレーション・ゴースト

―8―

黒尽くめの少年の正体が分かったのは、翌日の事だった。

＊＊＊

結局、そのまま僕はベットの上に倒れこんだきり寝潰れてしまい、起きたのはなんとびっくり、登校時間の1時間前だ。遅刻の常習犯のこの僕が、こんな時間に起きれたのは国民の祝日に設定しても良い位の奇跡だと思うけど、風呂と夕食が代償になったと考えると、どうにも良い交換条件であったとは言い難い。

しかしまぁ、それだけ寝れると言うことはすなわち体が休息を欲していたと言うことだ。体が欲する物がすなわち必要な物なのだ。僕は自分に嘘をつかないタイプの人間なのである。

時計を見て、一晩寝こけたことに対して絶望的な気分に陥った後で、1時間をいかに有効に活用するかと考えた結果、とりあえず風呂に入ることにした。

とは言っても、こんな時間に風呂を沸かすのが許されるはずもなく、シャワーを浴びて汗を流すぐらいしか出来ないのだけれども、このままベト付く体を引きずって今日と言う一日と戦うよりもかなりマシと言うもんだろう。

登校1時間前だと言うのに洗面所と風呂場はやたらと混み合っていて、何でこんな時間からと思ったが、よくよく考えてみれば、俺が特別朝が弱いだけで、普通の学生にとってみれば登校1時間前といえば目覚めのシャワーなんかを浴びちゃったりするジャストタイミングなのかもしれない。

まぁ、そんなこんなで身支度を済ませ、昨晩の残りの謎肉やら買い置き棚の菓子パンやらを漁ったりしていると、１時間はあっという間に過ぎた。
サッパリして腹心地も付いた事だし安心してもう一眠りするか、と部屋に戻ってベットに潜り込むなり、問答無用で関屋に蹴り飛ばされる。

「何してんだよボケ」
「寝ようとしてんだよボケ。テメェの目は節穴か」
「あ？ケツに木刀ブッ込まれてぇのか？？着替えろボケ」
「じょ、冗談っすよ、冗談！！関屋さん、時々殺し屋の目とかになっちゃいますよね……」

＊＊＊

半ば関屋に蹴りたてられるようにしてトボトボと登校路を進み、国道と合流する辺りまでやってくると、そこにはいつもと変わらぬ初音の笑顔が咲いていた。

「みー君が時間通りにちゃんと来るなんて凄いね！」
「まぁ、色々とありましてね……」

疲労困憊、満身創痍の僕とは異なり、初音は一晩で容色を取り戻していた。さらさらと風になびく黒髪も十分に栄養が行き渡っていて艶めいており、荒れ放題でバサバサな僕とは大違いである。
なんだか今日はいつもにも増して品立って見えるなぁ、と思ったが、よくよく考えれば初音だって一般の基準で言えば十分なお嬢様なのだ。いつも一緒につるんで居るから逆に見えなくなって居るが、水無瀬村ではＮＯ'２の富豪の娘なのである。
水無瀬村には大体５００戸の家があるが、その中でも毬瀬家・鷲

尾家の二つは、胸を張って大金持ちと自認できるレベルの家である。格の高さで言えば神職である斎宮家、つまりは葵のところの家が一番上だが、金持ちレベルで言うならば、末摘花の所の鷲尾家が一番で、初音のトコの毬瀬家が二番。

末摘花は鷲尾インダストリアルと言うかなり大きな重工業の社長令嬢だからそりゃもう大金持ちに違いないが、初音の所はこの辺りの大地主で、土地持ちと言う感じである。

そう言うお嬢様方と仲良くなれたと言うのは最初こそ結構優越心をくすぐられるものだったが、蓋を開けてみればなんてことは無い。初音も末摘花もやっぱりただの女子高生で、寮の連中やクラスの連中がやっかみ、冷やかすような特別な所はどこにも無い。

……まぁ、葵だけで言うならば、ある意味お嬢様の中のお嬢様、気位の高さは折り紙つきではあるが。

初音も末摘花も、家柄だの稼業だのとは関係なく良い友達で、それ以上でもそれ以下でもないから、僕はそういった事実は頭の隅に留めとく位で、気にした事はなかった。気にされたくも無いだろうし。

とりあえず、三人で連れ立って学校へと向かうが、坂道を登る足取りは重く、ため息と欠伸だけがやたらと毀れてくる。

「眠い」
「眠いねー」
「初音も睡眠不足？」
「んー、家でも色々とあるんだよー。お稽古とか、お手伝いとか」

出ました、お稽古。お嬢様と言えばやっぱりお稽古だよな。

「お稽古とかしてたんだ。なに？ピアノ？それとも舞踊とか？」
「んーー……」

口元に人差し指をあて、しばし中空を見つめた後で、初音は照れ笑いを浮かべた。

「……秘密！」

何こいつ、何でこんな朝っぱらから無駄に可愛いの。

「秘密ですか」
「秘密なんです」
「友達同士に秘密はいけないと思います！」
「みー君は男友達だから、ダメ」

ちょっと待て、ちょっと待て。男には秘密なお稽古って何なんですか。凄くときめくものを感じるのは僕の邪推ではないですよね？邪な心なんて持っていなくても、ここは色々と妄想しても良い所ですよね？？

「あ、でもでも」と僕のトキメキを感じ取ったのか、何かを取り繕うかのように初音が台詞を継いだ。

「お稽古はともかく、もう一個の秘密なら、教えて上げられるよ」
「ん？」
「昨日、葵ちゃんづてで聞いたんだけど、今日から転校生が来るらしいのです！」
「は！？この時期に？？」
「本当は二学期からの予定だったんだけど、なんか色々有ってずれ込んじゃってたんだって」
「ふーん……つーか、転校生って実在する制度だったのか……漫画や小説ではよく見るが、生まれてこの方一度も遭遇したことないぞ」
「私も無いなー。転校して行った友達なら居るけど、来たのは初め

てかな」
「そもそも、ウチって転校生受け入れとかアリなんだっけ？お父様の転勤でやってくる、みたいなのはまずありえねーし、そもそもそう言うのってカリキュラムがはっきりしてる公立に行くんじゃねーの？」
「前は本校の方に居たらしいよ。事情はわかんないけど、それだから水無瀬に入学する事にしたんだって」
「あー本校の奴かー、そりゃまぁ分かるかなー。と言うか、一番の問題は性別だよ、性別」
「ん……？あぁ、残念でしたー。男の子です」
「いらねーーー！！」
「どうしてー？友達になれるかもしれないじゃない」
「男友達ならもう十分に間に合ってる。僕に必要なのは可憐な乙女との甘酸っぱい高校生活だ！」
「もう居るじゃない、可憐な乙女」
「どこにだよ」

お前のことか。お前の事なんだな！？

「葵ちゃんと宴ちゃん」
「……いや、言論暴力と肉体暴力の二大巨頭じゃねーか……」
「それはみー君がいつも先に無茶ばっかりするからでしょ」
「ちょっと待て、僕はもうこの上なく平凡かつ詰まらない日常生活を送りたくて送りたくてしょうがない人間だぞ。あんな暴力こそがコミュニケーションだと思っているような奴らと比較されて無茶だと言われる覚えはない！よしんば僕が無茶をしでかす事があったとしても、その原因は大体において葵だろ！？」
「はいはい、そう言う事にしといてあげますよー」
「いや待って、なにそのお姉さん的態度！？ちょっと可愛いぞお前！！？」

「さ、さらっとそーゆー事を言わないで！ビックリするでしょ！？もー、そう言う風にいわれるのが一番イヤだって知ってて言うんだから、みー君はドSだよね」

「僕がドS……だと……？？ちょっと、お前の僕に対する認識について、今度ゆっくりと話し合わなくちゃならないようだな……」

「そーだね、みー君の私に対する認識についても、一度しっかりと問い質さなきゃと思いはじめてきたよ……」

いつも通りの、盛り上がりはするが大して意味の無い会話の中に、そもそもの主題はあっという間に埋没して行った。

変わらない毎日の、変わらない会話。

それは、完全に昨日までの日常の延長線上にあり、これからも続いていく日常を保障するものであるかのように思われた。

ＳＨＲ（ショートホームルーム）、担任の高郷がいつも通りの寝不足だか二日酔いだか分からないしまりのない顔で、一人の学生を引き連れて教室に入ってくるまでは。

―９―

「転校生の、九執曜（このふしあきら）です。宜しくお願いします！」

黒板に名前を板書して振り返り――昨日の少年、九執曜は僕たちを見渡して、人懐っこい笑顔を浮かべた。

―１０―

「……どー思うよ、関屋」

「いや、転校生だろ」

「んなもん見りゃ分かるよ」

「いや、見ただけじゃふつーわかんねぇだろ」

「お前は揚げ足取り芸人か。僕が言いたいのはそう言う事じゃなくてだな」
「お前の言いたいことはいつも婉曲的すぎんだよ」

休み時間。

机に突っ伏し、右手を枕代わりにボケーっと教室内を眺めながら、僕は前席の関屋の椅子を蹴り上げた。すかさず、振り向きもせずに関屋が放ったエルボーが僕の頭を直撃する。痛い。

僕の視線の先、グラウンド側の窓辺にある僕らの席とは反対側の、廊下側の窓辺にちょっとした人だかりが出来ていた。謎の転校生、九執君とやらの謎を解明すべくクラスの連中が取り巻いている人だかりで、終始楽しそうな笑い声や各種質問が飛び交っている。

気にはなるが、かといってその渦中に飛び込む元気もなく、とりあえずは状況を俯瞰できる位置でこぼれ聞こえてくるやり取りに耳を済ませていた。

人だかりの隙間から垣間見える九執は、昨日まとわりついていた不穏な空気などまるで無かったかのように、にこやかに笑って愛想を振りまいている。とりあえず、聞こえてきた会話から現状で分かった事といえば、どうも喘息持ちで空気の綺麗なコッチに転校してきたと言うことと、関西弁であると言うこと。

「……ふつーだな」と、僕はため息を付いた。
「だから普通だっつってんだろうが」
「うるせー、テメェは感受性が鈍いんだよ。林道に立つ女性の幽霊見ても迷子と勘違いするレベルじゃねぇか」
「幽霊見かけてもナンパしに行くお前ほどじゃねぇよ」
「そんなに褒めんな」
「褒めてねぇよ」

実際には、俺も関屋も林道で女性の幽霊に出会うなんて言う嬉し恥ずかしい体験は残念ながら無い。
どうにも、昨日とのギャップに言いやれぬ違和感を感じながら、無駄話や蹴りとエルボーの応酬をしていると、人だかりの中から初音が抜け出してきた。

「……話聞いてたー？」
「聞いてた」

僕の横の席に座る初音に、机に溶けたままで僕は呟くように返事した。

「喘息持ちは辛いよね」
「大変みたいだなー。しらねーけど」
「とりあえず、昼休みと放課後に小百合ちゃんが校内案内するって言ってるから、私も付き合おうかと思ってるんだけど」
「ふーん……」

国吉小百合、我がクラスの委員長である。委員長なのに委員長キャラを篠原に取られてしまって微妙に影が薄い可哀想な奴だが、別に本人にとってはどうでも良い事なんだろう。と言うか、自分のキャラ立ちを気にしているヤツの方が珍しい気もする。
まぁ、世話焼きの初音と、委員長の国吉が案内するなら他にも何人か付いていくだろうし、その時にもまた色々と分かる事があるだろう。
やがて、2間目の始業チャイムが鳴り、皆バタバタとそれぞれの席に戻っていく。初音も自分の席、僕の後ろの席に座り直し、のろのろと起き上がった僕が古文の教科書やノートをカバンから取り出し始めた頃、教師がダルそうに入ってきた。
日直の号令で起立・礼をして、席に着き、ふと転校生の方に目を

やると……

九執は、僕の方をじっと見つめて、口元に隠し切れない歪んだ嘲笑を浮かべていた。

―11―

昼休みになり、九執が女の子連中に連れられてにこやかに教室を後にすると、一瞬だけ残った連中に妙な沈黙が生まれた。賑やかな物が通り過ぎた後、ほんの一瞬生まれる示し合わせたかのような沈黙。

その後にやってくる雪崩のような倦怠感とざわめきを受けて、僕はゆっくりと立ち上がり、黒板の内容をまだメモしていた関屋の横っ腹に膝蹴りをぶち込んだ。

「飯行くぞ」
「んじゃ、宜しく」
「宜しく、じゃねぇよ学食行くっつってんだよ」
「あ？今日は金ねぇからランチパックで済ませるっつってたろうが」
「気が変わった。学食に行く」
「だから金ねぇよ」
「僕もねぇよ」

仕送り前の月末ですもの。

「どうすんだよ」
「カツサンド一つだけ買って分けようぜ」
「泣けてくるな……」
「僕がカツでお前サンドな」
「カツサンドはカツとサンドに分けるんじゃなくてカツとパンだろ

うがボケ」
「いや、突っ込むのはそこじゃねぇよ！」
初音たちは校内を案内する、と言ってたから、昼休みにどこに案内するかと言えば、そりゃまず学食だろう。
何故僕がそこまで九執に拘泥するのか自分でも良く分からなかったが、とにかく、目を離さずに学食に追跡しなくてはいけないような気がしたのだ。
そして、僕のその予感は、まったく別の意味で的中する事になる。

＊＊＊

水無瀬高校の学食は購買部を兼ねていて、そのクセに３０人も入れば一杯になるぐらいに狭かったから、購入組み以外もトレイを抱えて校庭や教室で食べたりする。食堂は満席な事が殆どで、校庭周辺ですら、良い場所は既に占拠されているのが日常風景だった。
今日も学食の前には長蛇の列が出来ており、券売機なんて言う立派なシステムはないから、処理スピードはとても遅い。料理研究会とかがお弁当を作って裏で販売していると言う噂も無いではなかったが、調理師免許も持ってないような学生がお弁当販売しているのがばれたら流石にタダではすまないので、かなりアングラで流通しているらしく、生憎と僕はまだお目にかかったことは無い。
たまに初音が弁当を作ってきてくれたりする事も無いではなかったが、流石にここ最近は忙しくてそれ所では無いようだった。
とりあえず、関屋と共に列の後ろに並んで食堂の中を覗き込むと、初音たちは無事に席を確保したようだった。
あるいは、転校生に気を使って席を譲ってくれた奴が居たのかもしれない。
代わり映えしない日常に飽き飽きしているのはどこの学生も同じで、転校生なんて言うビックイベントが有ったものだから、他所の

クラスだけではなく上級生までもが九執に興味津々で、またしても九執の周りには人だかりが出来ていた。

……あんなにモテるなら、僕もたまには転校とかしてみても良いかもしれない。

それにしても、列は一向に進まず、このままでは果たして昼休み中にカウンターにたどり着けるかどうかも怪しい按配だった。流石に制限時間の足切りラインには間に合うと思われるが、並んで飯食うだけで昼休みが終わってしまうと言うのも、ずいぶんともったいない話である。

一応、窓際をのろのろと漸進する感じなので九執の様子を垣間見るには丁度良いと言えなくも無いが、肝心の九執は人垣に隠れ、声も聞こえないから、僕は早くも飽きはじめていた。

何でこんなことしてるんだろう、と言う根本的な所からの疑問が芽生えてきて、僕はため息をついて反対側の窓に目をやった。暗い室内から明るい校庭側に目をやったので、一瞬視界がハイコン気味に飛んで、直ぐに網膜が光の量を調整する。

グラウンドの端、コンクリートの高台に腰掛けてご飯を食べる学生たち。早くもグラウンドに飛び出し、球技に興じる連中。

そして……体育館の裏に回りこんでいく、女の子一人と、男５人の集団。

「……関屋、カツサンド買っとけ！」

その集団を目にするなり、僕は関屋にポケットの中の１５０円を放り投げ、駆け出していた。

＊＊＊

校舎を駆け抜け、上履きのままグラウンドに飛び出し、僕は体育館の横へと走りこんだ。そうして、体育館の端でスピードを落とす

と、ゆっくりと呼吸を整えながら、裏へと回り込む。
体育館の裏、誰のものかも知れぬ石碑や墓が並ぶ一角で、一人の女の子が上級生に取り囲まれていた。
これといって特徴の無い、ショートカットの女の子は完全に無表情で、取り囲んでいる上級生の下卑びた視線を一身に受け止めている。

「どーもー、なんか楽しそうなことやってんじゃないっすか、センパイ」

僕が声をかけるのと、そいつらが僕に気がつくのはほぼ同時だった。ニヤけた笑みが消えうせ、敵意に満ち溢れた威嚇の表情が上級生たちに生まれる。

「またお前かよ……」

上級生の一人、名前も覚えていない三下が吐き捨てるように呟き、実際にご丁寧にツバまで吐いてみせた。実に分かりやすい、示威行為である。
僕が名前覚えていないモブキャラ連中の内のもう一人が、ズボンのポケットに両手を突っ込み上体を前に倒しながら、ゆっくりと僕に近づいてきた。そうして、上から僕をねめつけるようにして、顔を寄せてくる。

「手打ちは済んでんぞコラ。もう手出ししねぇっつったよな？」
「口が臭い」
「あ！！？」
「タバコ臭ぇっつったんですよ、センパイ」

次の瞬間、僕の胸倉が掴み上げられ、シャツのボタンが一つ弾け

飛んだ。

「調子にのんなよクソが。見逃してやっから、とっとと戻って斎宮のケツでも舐めてろや」

流石に、温厚な紳士として世に知れ渡るこの僕でもカチンと来た。

「やだなぁ。僕はただ、友達を迎えに来ただけですよ？センパイこそそんなにハッスルしちゃって、何か良い事でもあったんスか？」

「あぁ！！？」

僕の小ネタは、モブキャラAセンパイには通じなかったようだった。まぁ、確かにラノベを読んだりアニメを見るようなタイプには見えない。モブA先輩には通じなかったが、その代わりに東条が僕のセリフに反応した。ゆっくりと顔を上げ、僕の方に少し困ったような、うっすらとした笑みを浮かべてみせる。

「あれ……柏木君……なんで居るの……？」

「いーから、東条はちょっと黙ってろ」

僕は、ちょっとだけ真顔になって、張り付いたような悲しげな笑みを浮かべる東条の言葉を封じた。

儚げな、ちょっと触れただけで崩れてしまいそうな、壊れかけの少女……

東条真奈美は僕らと同じ一年生で、有体に言ってしまえば、イジメられっ子だった。

自己主張せず、地味で目立たず、卒業アルバムを見て始めて一緒のクラスに居た事に気が付くような、そんな女の子。僕と同じクラスでは無いが、別のクラスの連中に聞いても、取り立てて何のエピソードも出てこない、どこにでもいる普通の女の子だった。

僕も顔ぐらいは当然知っていたが、別に何の交流もなく入学から3ヶ月が過ぎて、東条が苛められている事に気が付いたのは夏休み前だった。

同級生に苛められていたなら、僕等はもっと早く気が付いただろう。そして、問題は大きくならないうちにとっとと片付いていたに違いない。しかし、実際には東条を苛めていたのは上級生と、上級生から連なる市内の不良グループ連中で、それはどちらかと言うといじめと言うよりも、性的暴行に近かった。

入学してから直ぐに不良グループに目を付けられ、3ヶ月もの間、身体を毀損させられ続けた東条の苦しみは想像を絶する。

それでもそんな事をおくびにも出さず、壊れる事もなく毎日登校し、日常に埋没していた東条の心情も、やっぱり僕の想像を凌駕している。

しかし、その事に気が付いた夏休み前から僕ら、すなわちフラタニティと不良グループの「抗争」は始まり、夏休み序盤までそれは続いた。

まぁ、色々と有って不良グループのリーダーと葵の間に交渉が持たれ、不良グループは東条から手を引き、俺たちは不良グループへの攻撃を止める、と言う事で手打ちとなったのだ。

「センパイたちも人が悪いなぁ。もうお子ちゃまじゃないんですから、約束はきちんと守らないとダメじゃないですかー」

「あ!?元々テメェらには関係ねーんだよ。今度こそ殺すぞコラ」

ヘラヘラと笑いながら軽口を叩く僕に、モブBセンパイの怒りゲージはますます高まっていくようだった。その内、マックスまで溜まって攻撃力UP＋超必殺技使用可能になっちゃったりするかもしれない勢いである。

……どうも、おかしな流れだった。

こいつら雑魚連中が学校で東条に手を出すと言うのも不思議だっ

たが、そもそも上の命令が無いとションベンも出来ないような連中が、手打ちが済んだ事をこうも易々と破るとも思えない。
こいつらは正真正銘のクズだが、だからこそ「手打ち」の意味は良く分かっているはずなのだ。

まさか――

「……アイツ、出てきやがったのか？」
「だからどうした！テメェには関係ねぇっつってんだよ！！」

唐突に放った僕の台詞に、胸倉を掴み上げていた名前も知らないモブBセンパイが、右手にますます力を込める。
その様子を見て、疑念が確信に変わる。なるほど、やっぱりそう言うことか……
真崎が、戻ってきたのだ。

真崎透悟（まさきとうご）、長野の不良グループの内、最大派閥のリーダー。水無瀬高校の学生では無いが、ウチの不良どもとも仲が良く、ウチを含めた幾つものグループを取りまとめている奴である。
東条の虐待を遡っていっている内にぶつかった相手で、葵の悪逆極まりない、今思い出しても身の毛もよだつような計略にしてやられ、真崎としては屈辱的な手打ちを強制され、更には家裁に放り込まれた。けっこう良いトコのお坊ちゃんだったので金と示談で何とかしたようだが、その代わり親に国内か海外の別荘だかどこかに飛ばされて謹慎させられたらしい。
僕たちは「お勤め」なんて言って笑い飛ばしていたのだが……どうやら、その真崎が長野に戻ってきたようだった。
まぁ、確かに手打ちしたとは言え、真崎じゃなくてもあそこまでひどい目に合わされたら、そりゃぁ、復讐も考えると言うものだろう。僕なら確実に恨む。味方ながら葵のやり方は全くもって言語を

絶するえげつなさだった……

しかし、流石にもう少し大人しくしているかと思ったが、意外と早い復帰だった。思いの外、立ち直りの早いヤツだったようで、そうと分かればこんな雑魚どもを相手にしている理由など無い。

「カッコいいっすねー。筋も通せねぇのに、真崎サンの言う事聞いてケツ舐めてりゃ餌もらえる生活なんてすごいなー、憧れちゃうなー」

「うっせぇんだよ！！」

僕の度重なる挑発に流石にブチギレたのか、不良用語の基礎知識（７０年代より改定なし）に載ってそうなスタンダードな台詞を吐いて、モブＢセンパイが左腕を振り上げる。

まぁとりあえず多勢に無勢だし、ここはボコられとくかと腹を括った……ちょうどその時。

モブＢセンパイは僕の後ろからやって来た足音に気付き腕を止め、実に嫌そうな表情で、僕の背後に立つ人物を睨みつける。

――――振り返るまでも無い。

僕は、後ろに立つ気配に、恐怖感と呼んでも良いぐらい嫌な予感を覚えながら、恐る恐る声をかけた。

「……カツサンドは？」

「売り切れてた」

「やっぱりかよぉぉぉぉぉぉぉ！！！！来んの早えぇと思ったんだよ！！！」

僕は左手を跳ね上げると、胸倉を掴むモブＢの右肘の内側に掌底を叩き込んだ。神経部への打撃で握力が弱った瞬間、右手首を右手で掴み、左手でそのままモブＢの肘を押し上げる。

綺麗に体を回転させ、僕に右腕を背後で極められるモブＢ。その

ままひざ裏を蹴りつけて（通称ヒザカックン）地面に押さえつけ、腕を解きざま横っ腹に蹴りをぶち込んで、僕は後ろのアホみたいに突っ立つ関屋の胸倉を掴み上げた。

「お前はウドの大木か！！？ただ並んでいてカツサンドが手に入ると思ってたのか！！？強い自己主張！！アピール！！カツサンドが食べたいと言う強靭な意志！！それこそが昼食戦線を勝ち残る最大の武器だと言う事をもう忘れたのか！！？」

「うるせぇ」

「ごふっっ！！」

問答無用で関屋の膝蹴りが鳩尾にめり込み、僕は悶絶してその場にうずくまる。

こいつ、マジで容赦ねぇ……

一瞬にして僕の戦闘力の殆どを奪いつくして、関屋はセンパイどもに感情の篭らぬ表情を向けた。そうして、何を考えているのかまるで分からぬ棒立ちのままで、東条の方を指差してみせる。

「そいつ、連れてっても良いっスか？」

「……」

返事が無いのを了承と取って、何に気が前もなく東条の所まで歩み寄ると、関屋は黙って右手を差し出す。少しの逡巡の後、東条が関屋の手をとり、二人はそのままセンパイどもから抜け出してくる。

「いつまで臥せってんだよボケ」

「いや関屋さん、アナタ手加減抜きで鳩尾に入れましたよね……？？」

「ちょっと怒ってるからな」

「その怒りを僕に向けなくても良いんじゃないでしょうか！！？」

「テメェに怒ってんだよ」

あぁ……見てたのかこいつ。

「まぁ、良いや」

僕は呟いて両手を使わず反動だけで体を起こすと、憮然とした表情の上級生どもに目をやった。

「真崎サンに伝えといて下さいよ。また今度挨拶に行きますよって」

――――どちらかと言えば雑魚っぽい捨て台詞だよな、僕の方が。

＊＊＊

関屋と東条に続いて体育館の裏から抜け出すと、初音を含めたクラスの連中が、心配そうな目で僕を出迎えた。

……いや、正確に言うと心配そうなのは初音だけで、他の連中はニヤニヤしたり呆れた様な表情を浮かべている。

「……見てた？」

僕の問いかけに、クラスメイトどもがニヤニヤ顔で一斉に頷く。

……つまり、こいつらはこの安全圏で、いたいけな僕が不良どもに正にボコられんとするところを、嘲り笑いながら見守ってやがったと言う訳だ。まったくもって、友達甲斐の無い連中である。

東条はいつの間にか初音の胸に抱きとめられており、相変わらず、何を考えているの河から無い微妙な半笑いを浮かべていた。

「みーくん？」

ついさっきまで心配そうな表情を浮かべていたはずの初音が、いつの間にか非常に険悪な表情に変貌していた。

「何か私たちに言うこと有るよね？」

「え、えーっと……？」

「有るよね？」

「ひ、昼ごはんはしっかり食べないとダメだよ……的な？？」

「……」

黙ってジト目で睨み付けられ、僕はあっさりと折れた。

「勝手な事してすいませんでした！！」

「心配したんだからね！！」

「いや……でもまぁ、食事の邪魔するのもアレだったし、カツサンド食べたかったし……」

「みーくん！！」

「ホントすいませんでした！！」

心配したのか怒っているのか（多分その両方だ）、いつもにも増してクドクドと説教を続ける初音を、怒っている顔も可愛いよなー等と言う口に出したら殺されかねない感想を浮かべながら眺めていて、ふと、気が付いた。

「そういや、転校生はどうした？」

「え……？」

説教をさえぎられ、毒気を抜かれて真顔に戻った初音が、きょろきょろと周りを見渡す。

「さっきまで一緒に居たんだけど……」

そう言って校舎を振り返る初音に釣られて視線を送ると、丁度、転校生が校舎に吸い込まれていくところだった。

その様子を見た途端、僕はもう走り出していた。

「ちょっと、みー君どこ行くの！」

「トイレ！！！」

とりあえず、関屋もいれば初音も居て、しかもクラスの連中まで居るならば、東条のことは任せても大丈夫だろう。それよりも、今はまず、あの転校生と話をしなくてはいけない。

僕が転校生に何を聞きたいのかは分からなかったし、なんと言って話しかければ良いのかも思いついてはいなかった。

しかし、僕はこのとき、確かに転校生から何かを聞き出さないといけないと感じていたのだ。

―12―

九執を探し校舎へと飛び込んだ僕を待ち構えていたのは、とんでも無いトラップだった。

そもそもスニーカーに履き替えていなかったので、土ぼこりにまみれた上履きのままで校舎へと走りこんだ僕の目にまず飛び込んできたのは、廊下を埋め尽くす生徒の群れ。

殆どが男子生徒で構成されたその人ごみは、なにやら妙なテンションで、全員廊下の奥の方を向いて、口笛を吹いたり囃し立てたり奇声を発したりしている。

ついに集団ヒステリーにでも掛かったか、もしくは誰かが喧嘩でもしてるのか、と脈略の無い不安だか願望だかよく分からない胸の高鳴りを押さえて人垣を掻き分け、群れの足元をくぐるようにして

最前列へと飛び出してみると、

そこでは、総勢５人のチアガールが、扇情的にミニスカートを翻し、記念撮影に応じていた。

お約束の、ビニールテープを束ねた黄色いボンボン。色々と問題があるんじゃないかと思われる、ギリギリを軽く突破しているマイクロミニのプリツスカート。そして、そこからすらりと伸びる、目を捕らえて離さない合計１０本の艶やかな生足。腰の所で必要以上に絞り込まれたデザインは、どう考えても胸を強調し過ぎているようにしか思えない。

あまりの出来事に反応が出来ない（まかり間違っても見蕩れて生唾を飲み込んだりしていた訳ではない）僕の頭上で、デジカメのフラッシュが間断なく焚かれ、オーダーに応じて次々とポーズを変えていくチアガールたち。

それは、正にハニートラップだった。

「……」

思考停止はほぼ１０秒に渡って続き、やがて記念撮影タイムの終了１０秒前が告げられ、全員でのカウントダウンが始まる。その更に１０秒の間僕の思考は限りなく薄く引き延ばされ、やがて、ゼロカウントと共に巻き起こる歓声と拍手。

途端、バラバラと崩れ去る人垣の只中に取り残され、廊下に両手を突いた僕の目の前に、細い生足がぬっとフレームインしてきた。

「おーローアングルとは流石だねー、エロいねー、危険人物だねー。その上カメラも無しに網膜に焼き付けるだけなんて、やっぱりプロの変態さんは一味違うねー！」

「あ……おま……え……！？」

ボンボンを持ったまま、両手を越に当てた宴が、ニヤニヤと笑みを浮かべながら僕を見下ろしていた。

「呆然としちゃって、そんなにも魅力的だったのかなー？他ならぬみーくんの為だしー、至近距離でじっくりとこの蠱惑的な脚線美を堪能するチャンスを与えよーじゃないか！うりうりー」

宴は挑発的にそう言うと、僕の目の前でスカートをひらひらと揺らせて見せる。その下にちらちらと垣間見えるアンスコは、当然ながら見られる事を前提とした攻勢防御結界に他ならなかったが、かといってその布地の面積比率の少なさが男性に与える影響は消して軽減する訳では無いのである。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

心中に去来する様々な思いを断ち切るように、僕は絶叫と共に跳ね起きた。

「何をしとるんだお前はぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「何って、チアガールさんだよー？」
「見りゃ分かる！！！！」
「えらいえらい」
「褒める所じゃねぇ！！！！俺は何でこんな所でそんなエロい格好で写真を撮られてるんだと言ってるんだ！！！ご両親に申し訳ないとは思わないのか！！！嫁入り前の娘が、なんてふしだらな！！！」

混乱のあまり、時代錯誤な人間になってしまっていた。

「って言ってもー、私は胸無いしー、皆もりょーちゃんとかゆーち

ゃんとかばっか見てたし、そんなにエロくないと思うよ、パパ？」
「誰がパパだ、誰が。いや、違うそう言う問題じゃない。世の中には貧乳が正義だステータスだとほざくようなロリコン連中も存在するんだから、そう言う趣味志向を持った人間にむやみにアピールする事はノーマルよりもむしろ危険と言うかそんな話でもねぇ！！！なんでお前がチアガールの格好をしてるんだと聞いてるんだ！！」
「今日、衣装合わせだったんだよー。私、実行委員だし。で、どーせならって反応をねー？」

……ようやく、事情が飲み込めた。

宴の台詞では若干言葉が足らないが、つまりは学祭実行委員である所の宴たちが、学際で披露するチアガールのコスチュームの衣装合わせをしていて、皆の反応をチェックしてみようと校内に繰り出した所、男子生徒どもが大挙して押し寄せ、撮影会に突入してしまったと言う訳だ。

「……とにかく、そんな格好で校舎をうろつくな。そうじゃなくても飢えて獣のようになっている男子高校生共に美味しそうな餌をぶら下げて回って、何が有っても知らんぞ」
「大丈夫だよー、私はりょーちゃんとかゆーちゃんみたいなナイスバデーちゃんじゃないしー！」

何故か自慢げに胸を張る宴。そして、その奥ではりょーちゃんとゆーちゃんらしき美人でナイスバディな先輩が、にっこりと僕に手を振ってみせた。思わず、営業スマイルで手を振り替えしてしまう僕。

まぁ、りょーちゃん先輩とゆーちゃん先輩はともかくとして、宴に襲い掛かるようなバカは学内には存在しないと言う事は間違いない。チビで貧乳だが、こいつはこう見えても肉弾戦能力で言えば学

内最強なのだ。武器持ち相手でも、竹刀装備の関屋に匹敵する戦闘能力の持ち主なのである。

実家が道場なんてやっていて、ガキの頃からスペシャルエリート教育を受けていると言うのも有るだろうが、宴の一番の特性は物怖じのなさと判断能力の高さで、無限に等しい体力がそれをバックアップしている。マンツーマンではほぼ無敵で、複数相手の場合でも持ち前の体力で掻き回して各個撃破する。噂では、３０人以上の不良を相手に一晩掛けて戦い続けた事もあるとか無いとか。・・・・・・鬼神かお前は。

ようやく人心地ついて、妙にリアルに感じられるようになった学祭実行委員女子有志一同のチアリーダー姿にドギマギしながら、僕はようやく本来の目的を思い出していた。

「そーだ宴、お前転校生を見なかったか？」

「転校生？今日から来るって言う？んーどんなヒト？」

「男」

「男だけじゃわかんないなー」

「目つきの悪い、黒髪での、裏で何かを企んでそうな身長の低い一年坊主だよ」

「ん」

「いや、僕を指差すな。確かに自分で言うのも何だがキャラが被っているような気もしていてとても残念なんだが、僕はもっとジェントルメンだ！」

「よーするに、みー君みたいなタイプで見慣れない人がいなかったかって事だよねー？」

「そう言うことだ」

「うーん、居たような居なかったような……男子は山ほど居たからなー……」

居たね、山盛り。溢れ返らんばかりに居たね。

「見たよーな、見なかったよーな……」

これはダメだ。と言うか、聞いた相手とシチュエーションが悪かった。アレだけの人ごみに取り囲まれて、フラッシュを焚かれながらにして見ず知らずの転校生を視認しろと言うのが無理な話だ。

「まぁ、見てねぇなら良いや。邪魔したな」

これ以上宴に関わっていても、僕の理性が危なくなるばかりだったので、とりあえず別の場所を探す事にした。そんなに広く無い校内だ、ぐるっと回れば見つかるだろう。

……因みに、僕の理性を危険に晒しているのはりょーちゃん先輩とゆーちゃん先輩であって、断じて宴ではない。僕にはロリ属性は無いのだ。わざわざ説明しなくてはいけない所なのかと問われると甚だ疑問だが、僕の名誉に掛けて、断言しておかなくてはいけない事と言うのも確かに存在するのだ。

僕はロリではない！

ロリからお姉さままで手広く美味しく頂ける全方位広範囲兵器だと言うだけである。

「んじゃ、また放課後な」

「あー、みーくん、ちょっと待って」

奥の先輩方に再度営業スマイルを浮かべて手を振りながら踵を返した僕を、宴が引き止めた。

「今日の放課後、ロッジに集合だってさ。葵ちゃんが招集掛けてたよ」

「あぁ！！？今週一杯は図書館の棚卸しだろ！？まだ他になんかあ

るのかよ」
「なんか、学祭で何やるか決めるらしいよー」
「え、ウチもなんかやるの？」
「そりゃ、一応サークルだからねー、フラタニティも。出し物の一つぐらい用意しなきゃねー」
「へーへー」

想定してなかったが、確かにそう言われてみればフラタニティとして学祭で何かをやると言うのは自然な流れのように思えた。だから、特に反論もせず、ひらひらと手を振って僕は宴に背を向けた。
とにかく、今は九執を見つけなくてはいけない。

―13―

結果から言うと、僕は昼休みに九執を見つける事はできなかった。
学校中を走り回り、行きそうな所は虱潰しに見て回ったのだが、どこにも九執の姿は見つからなかった。まぁ、狭いとは言え移動ルートが一つではない以上、どこかですれ違う可能性はないではない。僕だって、一度探した場所を何度も探したりはしなかったのだから。
探し疲れ、結局昼食も取りそこねて教室に戻ると、九執は自分の席でクラスの連中と楽しそうに会話をしていて、話しかけるタイミングを見つけられないまま、次の授業が始まった。
授業中に垣間見る九執は、真面目にノートを取ったり発言したりして、クラスに馴染もうと努力している転校生のように見えたが、たまに、窓の外を見つめたり、こっそり机の下で携帯を弄っている事もあった。それは、とても普通の学生のように見えた。
そして、次の休み時間も、その次の休み時間も、九執の周りには常にクラスの連中が居て、二人きりで話しをする隙を見つける事はできなかった。

＊＊＊

「ほほう、つまりはアレだね、謎の転校生だね！」

林道の先をゆく宴がくるりと僕らを振り返ると、人差し指を立てて、前かがみにポーズを取った。よく分からないが、なんか有名なキャラとかの真似なのかもしれない。

「学園物にはなくてはならない重要なキャラクターだよね！」

「大体が、なんかのイベントが発生するフラグなんだけどな……」

関屋、宴と連れ立ってフラタニティのロッジへと向かう道すがら、通い慣れた林道は、いつもの様に夕方の木漏れ日がシャワーのように降り注いでいた。

やらないといけないことは山のようにあるが、取り急ぎ東条の件は、九執を案内すると言って連れ立って出て行く初音たちにお願いしておいた。女子の集団に連れ回してもらえば、とりあえず今日の所は問題はないはずだ。九執の学校案内に突き合わせて、その後で寮まで送り届ければ、とりあえず不良どもが連れ出す心配はない。

真崎が戻ってきたと言う事は、それなりの対策を立てなければならないが、その事実をどうやって穏便に葵に伝えるかと言うことに関しては、まだ思い悩んでいる。

なにせ、葵は一匹の兎を仕留めるのにヒューイコブラなりアパッチなりを持ちだしかねない女である。そうじゃなくてもここ最近忙しそうにしているのだから、面倒な事になる前に徹底的にブッ潰すと言う選択をしてもおかしくは無い。まぁ、真崎を潰しておくと言う事自体は別に反対ではないのだが、その矢面に立つのが誰か、と言うことを想像するに、あまり過激な事はしたくない（させたくない）と言うのが正直な所だ。

林道を5分ほど歩き、更に枝分かれた小道を進み、周囲を木々で

閉ざされた森の中へと踏み込むと、不意にフラタニティのロッジが現れる。他に何の建物も無い、道すらもろくに無い森の中に白亜の西洋館が鎮座する光景はいつ見てもシュールである。

謎のギリシャ文字「α・φ・ι（アルファ・ファイ・イオタ）」が掲げられた玄関の前には赤いジャガーのマウンテンバイクがお座なりに壁にもたれかからせて有り、どうやら今葵はご在宅のようだった。

「そーいや、今日は学校で葵を見てねーな」
「サボってたねー」
「ふぅん……」

葵と同じクラスの宴の台詞に、僕は生返事を返した。この様子では昨日も家には帰ってないだろう。

平野さんとの約束も有ることだし、今日こそは葵にちゃんと家に戻るように伝えねばなるまい。

＊＊＊

ロッジのリビング（つまりは僕たちフラタニティの部室）に足を踏み入れると、葵はまたいつものだらしない格好で弛緩していた。両足をデスクの上に放り出し、リクライニングチェアに沈み込むようにして、天井を見上げてなにやら難しそうな表情を浮かべている。

いつもと違うのは制服ではなく私服と言う点で、今日の衣装は色気の無いジーンズに少しだけフリルの付いた白いシャツである。ジーンズでは、机の上に足を放り出していても嬉しさ半減だ。いや、半減どころではない。嬉しさ壊滅だ！

「きたよー！」と元気よく挨拶する宴に、葵は「あぁ」とも「えぇ」ともつかぬ上の空な返事を返す。僕も「よぉ」と声をかけて、

壁際のソファーに鞄を放り出し、指定席になっているテーブル脇の椅子に逆さ向きに腰掛ける。もちろん、葵は返事もしない。そうして、最後に関屋が同じように無愛想な挨拶をするに及んで、ようやく葵は体を起こした。

きょとん、と関屋を見つめ、珍獣でも発見したかのような顔で足を机から降ろす。

「珍しいわね、関屋君がこんな時間から来るなんて」

「今日は練習が中止になった。柔道部がなんか気合入ってて、道場の割り振り一日貸してくれってさ」

「ふぅん、そうなの。まぁ、丁度良かったわ。相談したいこともあったし」そう言って、にっこりと微笑む葵。

……なんですかね、この待遇の差は。こんなに献身的に働いている僕には苛烈な精神攻撃を仕掛けておきながら、滅多に手伝いもしない愛想の悪い関屋には笑顔なんか向けちゃったりして。まさかデキてんのかこの二人いや無いなそれはない。

自分の疑念を速攻で打ち消しておいて、僕は部屋の中央に陣取る長机の上に視線を落とす。

使い込まれて光沢を放つ黒檀のテーブルの上で、ティーカップがひとつ、まだ湯気の立つ紅茶を湛えたまま、小さく自己主張していた。紅茶の濁り具合、乱雑に置かれた砂糖壺とミルクのカップ、何故か置いてないスプーン、そしてそもそも存在しないソーサー……間違いなく、葵が準備したものだろう。

葵のデスクに目をやると、同じようなティーカップが一つ机の端に置かれており、これが示す事実はただひとつ。

「客が来てたのか？」

僕の問い掛けに、初めて僕の存在に気がついたかのような見下げ

た視線で、葵が僕を振り返った。

「……真名井が来てたのよ」

「あー生徒会長か。何しに？」

「茶飲み話に来た訳ないでしょ、あなた馬鹿なの？いや馬鹿なのは分かってるけど。もうちょっと想像力と推理力を発揮しなさいよ。それでも人類？少なくとも哺乳類だったら猿でももうちょっとまともな頭の使い方するわよ。カボチャ以下の頭しか持っていないなんて、オズの魔法使いもビックリね。貴方って無知無能無策の三重苦なの？一帯どこの世界に向けて自己憐憫を発信してるつもりなの？馬鹿がうつるから、半径１０メートル以内に近寄らないで欲しいわね。まぁ、この部屋からして１０メートルも幅が無い訳だけど。学園祭の件よ」

最後の一言だけで十分に事足りる長台詞だった。文章では実に伝わりにくいのだが、立て板に水と続けられる罵詈雑言は、実際には巧みなイントネーションとアクセントが駆使されており、人の羞恥心やら劣等感やらに巧みに火をつける天才的なテクニックに充ち溢れている。相手が僕でなければ、とっくに白い手袋を投げつけてサーベルを抜いていてもおかしくない状況だ。

しかしまぁ、慣れてしまえばこんなものは音楽と同じである。聞き流せば良いのである。「この女いつかブチのめす、この女いつかブチのめす……」と心のなかで唱え続ければ十分耐え切れるレベルだ。どうと言うことはない。どうと言うことはないのだ……

「村祭りと合同でやるって話ー？」

一人苦渋に耐える僕をさて置いて、宴が自分の所定位置、つまりは僕の右隣に着席してそう問いかけた。頷く葵。

「ええ。流石にそろそろ真剣に詰めて行かないといけない時期だからね」
「葵ちゃんも忙しそうだけど、しゅーくんも大変だよねー」
「まぁ、アイツにはアイツで別種の忙しさがあるけどね」

ウチの生徒会長、真名井修二は葵たちと同じく水無瀬村の出身で昔からの顔見知りらしく、宴はしゅーくんと呼んでいる。大体に置いて宴は他人の名前を簡略化して、君付けするかちゃん付けするので、文脈を読まないと誰のことを指しているのか分からなくなる瞬間が有る。

ちょうど忙しいと言う話題が出たところで、僕はまずは葵に軽い牽制のジャブを放つ事にした。

「つーかさー、葵さんよ。お前忙しいからッつって、全然家に帰ってないみたいじゃねーか。平野さん心配してたぞ。飯も毎日用意してくれてるみたいなんだし、ちゃんと家に帰らないとさ」
「みー、貴方今日体育館裏で一悶着起こしたそうね？」
「う……」

逆に牽制された。しかも、ジャブとか言うレベルじゃねぇ。まごう事無きストレート。

「あー……まぁ、その話もしないとなーとは思ってたんだけど……」
「放って置きなさい」
「……あ？」

毅然と言い放たれた葵の台詞に、僕は少しだけ眉をしかめた。

「真崎が戻ってきたんでしょう？それで、バカどもがまたぞろ東条に手を出した。それを見かねて火の粉を被りに行った。どうせそん

なところでしょ」

その通りではあるが。全くもって御慧眼なのだが……

なんと言ったものか、とっさに返事をしない僕に、葵は軽くため息を付いた。

「貴方のそのわざとらしく胡散臭い偽善っぷりにそれなりには慣れて来たけど、だからって見逃して行くってワケじゃないわよ。良い？一回しか言わないからね。いや、一回だけだと絶対に理解しないだろうから何度だって言うけど、真崎のところには手を出すな。分かった？聞いてる？真崎透吾とそのグループには一切手を出すな。理解出来た？きっと出来てないわね……まぁ良いわ。そもそも、東条があいつらの所に行かなきゃ良いだけの話よ。自己主張をはっきりと出来ないあの子にも原因は有るわ。良いから、黙って、何もせず、余計なことは考えず、放って置きなさい」

葵のその発言を、僕は黙って大人しく聞いていた。葵がそういうスタンスであると言うのは今に始まった話ではないし、この女の冷血漢や鉄面皮ぶりを今更詰ってもしょうがない。自分の火の粉が降りかからぬ限り、小指一本動かそうとはしない女なのだ、こいつは。

多分、葵には理解出来まい。そこに行けばどんな目に合わされるか分かっていても、命令を拒絶出来ない人間の気持ちなど。抵抗しようと思っても全く体が動かない、絶望と敗北感を理解することなどあるまい。

誰にも服従せず、何にも束縛されず、どこにも拘束されない女王様。唯一自分と自分の居場所と自分の友達を守るためだけに動く、徹底された利己主義の塊。それが、斎宮葵だ。そんな事は、今更言われなくても、十分分かっている。

分かっているのだ。

だから、僕は極力やる気がなさそうに、ひらひらと手を振った。

「わーってる。わーってるって。別にドンパチ仕出かしたいなんて思ってる訳じゃない。と言うか、まだなんにも言ってねぇじゃねぇか。厄介ごとには首を突っ込まない。喧嘩もしない。騒動も起こさない」
「……つまりは嘘ね」
速攻で見抜かれたッッ！！！？
「ちょ、ちょっと待って下さいよ斎宮さん！？僕のこの目が嘘をついているような目に見えますか！？」
「貴方、嘘しか付いたこと無いから比較検討のしようが無いじゃない。と言うか、貴方の目をみるなんて、そんな汚らわしいことをこの私にさせるって言うの？まったく、変態も此処に極まれりね。年がら年中、私をエロい目で見てるクセに」
「見てねぇよ！！！どんなに欲求不満なんだよ、パブリックエネミーズか僕は！！と言うかお前の体に男性のリピドーを掻き立てるような魅力が有るとでも思ってんのかってうわぁぁッ！！？」
僕の横を飛び抜けたティーカップが、そのまま暖炉の中に飛び込んで燃え残りのチーク材にブチ当たって四散する。
マジ信じられねぇ、お茶入ったカップをそのまんま投げつけやがったぞこの女！
「お前それお気に入りのカップだって言ってなかったか！！？」
「尊い犠牲だったわね。まぁ今度から貴方のを使うし」
リスクヘッジ済みだった。
「だからって、いきなりカップ投げつけるか！！？大体お前はいつ

もいつも」
「分かったわよ……」
「自分の都合ばっかりで物事を進めやが……え？」
「分かったって言ってるのよ」

攻め返そうと勢い込んで台詞を継ぐ僕に、葵はなんだか今日に投げやりな態度で耳に髪の毛をかき上げた。

「……どうせ私の忠告なんて聞く気はないんでしょ。もう、それで良いわ。好きにしなさい」
「あ、いや、僕はまだなんにも言ってないんデスけど……」
「聞くのがめんどくさい」
「いや、そうは言ってもですね……」
「そんな事よりも、今は決めなきゃいけない事が山ほど残ってるのよ。中央のクズどもとの折衝をどうするのかとか、学祭と村祭りの連携をどう取るのかとか、マスコミ対策はどうするのかとか、会場はどこにするのかとか、予算はどうするのかとか、そもそもウチの出し物はどうするのかとか！」

列記しているうち徐々にテンションが上がり、葵のボルテージが高まっていく。
……ヤバい。これは相当ストレスが溜まっている。

「あ、それなら私やってみたいのが有るー」

そんな空気を読んだのか読んでないのか、、宴がいつも通りの脳天気な声をあげた。宴のそういう態度は場を正常に戻すと言う意味で常に有用だけれど、本人がそれを自覚して計算でやっているかと言うと……まぁ、微妙なところだ。ただし効果はいつも通り折り紙つきで、葵は瞬く間に気だるそうな表情に戻り、宴に流し目を向け

た。

「……何？」
「メイド喫茶ー！」
「却下よ」
「えーなんでー！？」
「フラタニティとメイド喫茶にどういう繋がりがあるのよ！！」
「奉仕の心……みたいな……？」
「……いや、確かにコンセプトは間違ってないけれど、私は嫌よ。なんでメイド服なんて着なきゃいけないのよ。アレは下流階級の奉仕服よ」
「可愛いじゃん！可愛いじゃん！！」
「可愛いとかカッコ良いの問題じゃないの」

僕はどちらかと言うと宴の意見に大賛成だったが、ここでうかつに同調すると僕や関屋までメイド服を着させられかねないので、とりあえずは別意見を出してみることにした。

「どーせ何やってもめんどくせぇんだろ、お前は。だったらいっそボケーッと座ってるだけで済む展示物系にすりゃぁ良いじゃねぇか。これまでの活動報告とか」
「嫌よ、そんな地味なの」
「……」

めんどくせぇ女だな……！めんどくせぇ女だな！！

「関屋くんは？貴方は何かアイデアはないの？」

壁際のソファーに座り込んだまま、一言も口を聞いていない置物のような関屋を葵は顧みた。腕組みをして、半分寝てるんじゃない

かと思うぐらい沈黙を保っていた関屋は、ゆっくりと宴を見つめる。

「バンド」

「……バンド？」

「バンド」

「……それって、演奏するアレ？」

「うん」

「関屋くん楽器出来たの！！？」

「ギターとベースとドラムならできる」

「い、意外だわ……」

まぁ、そうだろう。棒振り回すしか脳がないと思われるこの唐変木に楽器の心得が有るとは誰も思うまい。しかしながら、関屋は楽器ができるのだ。しかも、コレで結構上手いのだ。木製の細長いものを振り回すのは基本的に得意なのかもしれない。

「へー、凄い凄い！真木くん楽器できるんだ、しかも3種類も！カッコイーー！！」目をキラキラさせてはしゃぐ宴。

「で、でも関屋くんだけが楽器出来てもしょうがないわよね……」

「えー？葵ちゃんピアノ弾けるじゃん」

「私のなんて、ヤマハの発表会レベルよ！！？」

十分じゃねぇか。

「それに、他の人とあわせて弾くのなんてやったことないし」

あー、確かに他人様に合わせるのだけは出来そうにないな、こいつ……

「良いじゃん良いじゃんーやろうよバンド！面白そうだし。3曲ぐ

らいだったら実働１０分ほどで済むしー！」
「さ、３曲もやるの！！？」

珍しくオタオタと慌てる葵。いつもの落ち着き……と言うか無関心ぶりに比べたらずいぶんな反応で、つまりは好反応と言う事だ。

「３曲ぐらい何とかなるってー」
「それよりも宴、貴方は何やるのよ！？楽器なんてできるの！？」
「出来るよーギター。ジャカジャーンって」
「へー、そうなんだ」と、こちらも珍しく宴の発言に食いつく関屋。
「初音ちゃんに付き合わされて、昔一緒に練習したんだ。簡単なのなら大丈夫だよー」
「初音って、楽器何出来るの？」

ようやく話に噛めそうな感じになってきたので、僕は宴にそう聞いた。

「んーと、初音ちゃんもピアノかなー。後、ヴァイオリンが上手い」
「バンドでヴァイオリンっつーのもなー。尖ってて面白いけどさ」
「んーダブルピアノ？」
「無いではないけど、逆に難しい気もするなー……」
「じゃぁ、初音ちゃんは歌ってもらえば良いじゃん。すっごく可愛いよ」

……有りだと思います。

「じゃぁ、そうしようぜ。バンド。ここに楽器持ち込みゃ練習出来るだろ。周り何もねぇから音出しても怒られないだろうし」
「ちょっと待ちなさい、みー。偉そうに取り仕切ってるけど、貴方は一体何をするのよ」

「え、僕？んーと……」

僕は関屋を振り返った。俺が疑問の表情を浮かべると、関屋が軽く肩をすくめる。無言のやりとりでコンセンサスが出来たところで、僕は葵を振り返った。

「関屋がドラムで、俺がベースやるわ」
「え……貴方ひょっとしてベース出来るの……？」
「今の流れで出来ないワケないだろ」
「貴方楽器が出来るの！！？」
「どんだけ疑問なんだよ！！！」

僕も関屋も、中学時代に一通りの楽器には触れてきた。中学校の学祭でバンドをやる事になり、当時中の良かった連中とアレコレ試しながら決めて行ったのだ。関屋はなんだかんだで三楽器習得したが、僕はドラムとベースしか習得出来なかった。

まぁ、肝心の学祭でのバンドはそれはもう散々な出来だったが、中学生のバンドなんて、勢いがあれば良いのだ。演奏の善し悪しではない。

いよいよ進退極まってきて、葵はキョロキョロと視線を中に泳がせた。誰かに助けを求めたいような素振りだが、残念ながら空中に天使は飛び交ってはいない。

「……ホントに？本当にバンドをやるの……？」
「嫌なのか？」
「別に嫌じゃないんだけど、そういう流れは想定していなかったものだから……」

まぁ、僕だって想定はしていなかった。

「嫌じゃないなら別に良いじゃん。盛り上げれれば成功だし、それに宴の言う通り、派手な割に拘束時間少ないから後好きなようにできるし」
「まぁ……じゃぁ……それならそれで良いわ」

……意外と葵はあっさりと折れた。ひょっとして、葵自信もバンドをやってみたかったのだろうか？想定外とは言え本気で自分が嫌なことなら、葵がこうも簡単に許可することなどあるまい。少なくとも、口に出して言っている程嫌な訳ではないはずなのだ。まったくもって、面倒な性格ではあるが。

なんにせよ、初音が居ないので最終決定はまだだが、学祭ではバンドをすると言う方向で良いだろう。

とりあえず話が一段落したところで、ようやく宴が「そう言えばお茶入れるの忘れてたねー」と笑って、厨房の方へと消えた。いつもはお茶をいれるのは初音の役割なので、すっかりと忘れてた。

宴がいなくなると、葵も関屋も口を閉じてしまい、けだるい沈黙がリビングを支配する。ただ黙ってこの時間をやり過ごすと言う選択もあったが、なんとなく沈黙に耐えかねて、僕は口を開いた。

「それにしても、学祭と村祭りの事になるとテンション変わるよな、お前」

僕の台詞に葵は不機嫌そうな視線を向けるが、今回は特に無視すると言うこともなく、「しょうが無いじゃない、仕事なんだし」とつぶやくように言った。

「今年は受験生も少なかったし、現状では来年度の募集もそんなに見込めないみたいなんだから、こういうアピールの場ではちゃんと計画的にやって置かないと。マスコミも大勢来るだろうし。少子化なんだし、放っておいても学生が集まってくるような時代は終わっ

たのよ」
「そんなに受験生少なかったか？結構倍率高かったような気がしたが」
「激減よ。今年盛り返さなきゃ、収入も減るしそうしたら設備投資もままならなくなるし、学校がボロくなったら更に受験生は減るし、右肩下がりよ。今年が、水無瀬が踏ん張れるかどうかの瀬戸際なのよ」
「ご苦労なこった」

努めて他人事のように僕はそう言った。実際のところ、僕には他人事なのだ。葵が村で担っている役割は余人の理解出来る所ではなく、変わってやれる所でも無い。葵は個人の才覚ではなく、家柄で今の立ち位置に据えられてしまっている。本人が望むにせよ望まざるにせよ、村の問題ごとは自動的に葵のところに届くようになっている。

それならそれで、象徴として判子を押して責任は町長やら生徒会にブン投げれば良さそうなものなのに、コイツはどうにも大上段に受け止めて、全部自分で処理をしてしまおうとするのである。これはもう、責任感とか義務感の問題ではない。生まれ育ちがそうさせる、無意識の条件反射行動なのであろう。

この自己中女が自覚なく村のために奔走していると言う事は、あるいは、葵は水無瀬を自分と同一視しているのかもしれない。水無瀬に生きる自分と言うものが、葵としてのアイデンティティとして確立されていて、それに対して疑問すら抱いてないのかもしれない。

それはそれで大変だと思うが、本人にとってそういう生き方が辛いかどうかは、僕にはなんとも計り知れなかった。

「あぁ、そうだ」

と、葵がふと思いついたかのように、別に全然どうでも良い事の

ように、まったく気負いなく、つぶやいた。

「今日来た転校生、貴方のクラスだったわよね？」

……僕は、ゆっくりと葵を見つめ直した。

相変わらずこちらを向いてはおらず、椅子に深々と腰掛けて自分の爪を見つめている葵の表情は読めない。

「……うん」

「どんな子？」

「どんな奴って言われても、まだ初日だしな……うぅん……」

九執の初対面での印象を葵に伝えたものか、僕は逡巡する。確かに、僕自身は九執に何か良いやれぬものを感じているが、それを上手く口に出して説明する事は出来ない。大体、自分自身でも何故あいつの事がそんなにも気になるのか良く分からないのだ。

「まぁ、普通？」

結果、僕の答えはなんとも中途半端なものに留まった。しかし、葵もさして深く突っ込んで来るようなことはなく「ふぅん……そう」と呟いたまま、再び爪の品定めを始める。煮え切らない態度である。言いたい事が有るならば（少なくとも僕には）遠慮なしにぶつけてくる葵とも思えぬ素振りだった。

……ひょっとして、葵はあいつの事を何か知っているのか？確かに、葵ならば転校生の事務手続きの書類を含め、僕の知らない情報を入手していてもおかしくは無い。

「なぁ葵」

「ねぇ、みー」

僕と葵の台詞が重なり、再び短い沈黙が生まれた。
少しだけ僕に視線を向ける葵に、僕は顎で先に話すように促す。
ふ、と肩の力を抜いて、葵が僕に向き直った。

「ねぇ、みー。あんまりあの転校生には近づかない方が良いと思うわよ」
「……なんで」
「私がそう思うからよ」
「だからなんでさ」

重ねて問い詰めるが、葵はもはや返事をせず、再び僕から視線を外した。僕は葵のその端正な横顔をじっと見つめるが、何が言いたかったのかを読み取れるようなサインは全く見受けられない。
結局、その後、宴がお茶を持って戻ってくるまで、葵は一言も口を聞かなかった。お茶飲み話は完全にバンドでどんな曲をやるのかにスライドして、九執の話題は忘れられた。
だから、この時葵が僕に何を居いたかったのかは分からない。
ただ一つ、断言出来ることは有る。

葵は、九執について、僕の知らない何かを知っているのだ。

――――

【ＡＣＴ２】終幕

＊＊＊

【幕間～ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ～】

『夕方のＴＶニュース番組』

女子アナウンサー「本日未明、京都府上京区に有る北野天満宮の宝物殿に何者かが侵入し、重要文化財を含む所蔵品数点を盗んで逃走すると言う事件が発生しました。犯人は単独で警備員や管理人に暴行を加えた上で鍵を奪い、警察が到着する前に逃走しました。捜査当局の調べでは、犯人は１０代から２０代の女性で、背は高く、黒いライダースーツを身につけていたとのことです」

番組司会者「北野天満宮と言えば、菅原道真を祀っている、いわゆる天神さんとして有名な神社で、毎年大勢の観光客が訪れている名所ですが、山崎さん如何でしょうか」

番組コメンテーター「そうですね、北野天満宮の宝物庫には国宝も含まれておりまして、これは今回は盗難に遭わなかったようなのですが、計画の杜撰さ、乱暴さと、国宝を狙わず重要文化財を、しかもわずか数点のみを盗み出すと言う手口は、若者による無計画で突発的な犯行だったのではないかと思わせます。言わば、ゲーム的な感覚で行われた犯行だと言えるのではないでしょうか。こうした乱暴な手口で犯行が行われると言うのも青少年犯罪の類型として危惧感を感じるのですが、それ以上に、北野天満宮の警備に問題はなかったのか、若者一人に暴行されて侵入を許してしまうような体制に緩みはなかったのか、そのあたりの危機管理意識の低さも疑問視されると思います」

番組司会者「有難うございます。では次のニュースです。本日開かれた事業仕分けで国産のスーパーコンピューターの開発に待ったが掛かりました……」

＊＊＊

『長野市内のラブホテル』

「久しぶりね」
「……そうか？」
「そうよ。あの子とはいつも逢ってるクセに、私とはなかなか逢ってくれないじゃない？」
「それはお前の方の都合だろ？」
「そうでもあるし、そうでもないわね。貴方が私を求めてくれれば、私はすぐに駆けつけるわよ」
「……どうしても必要だったと言う訳でもないけどな」
「でも、呼び出してくれた……嬉しかった」
「それが一番手っ取り早いと思っただけだ。他の連中じゃ、話をつけるのに少し手間取るしな」
「それはそうかもね……それとも、私とシたいのは話だけじゃないって事かしら……？」
「それは、話が済んだ後に決める」
「まずは、話しあうことが先決……よね」
「そうだな、コンセンサスは重要だ……だから、俺からの質問は一つだけだ」

男はバスローブ姿で娼婦のようにベットに横たわる、まだあどけない顔立ちの少女を冷たい目線で見下ろした。

「――――フィオナ・システムの主制御鍵（マスターキー）は今、どこに有る？」

――――

【ＡＣＴ３】に続く

【ＡＣＴ０３】インビジブル・カレッジ～その１（前書き）

（承前）

【ACT03】インビジブル・カレッジ～その1

―14―

東条を寮まで送り届けた後でロッジに合流した初音を交えて学祭の件を話し合い、その後図書館の棚卸を手伝いに行って、昨日一日は終わった。

貴重な高校一年生をこうして肉体労働で消費し尽くしても良いものかどうかについては、今度前世と来世の僕を交えてじっくりミーティングしないといけない所ではあるが、そんな悠長なことを言ってるまもなく、やっぱり今日はやってくる。

昔の偉い人に言わせると学生の本分は勉学らしいので、いろんな疑念を抱えながらも僕らは今日も教室に集合する。そうして、教師の面白かったり面白くなかったりする授業をくぐり抜けて、ぐったりと机に沈み込むのだ。

「今日は飯どうする」

昼休み、授業が終わっても動く気力がなく、ひんやりとした机に頬を当て、窓の外の空を放心状態で見つめていた僕に、関屋が背中で語りかけてきた。

――背中で語りかけてきた、と言うとなんだかとてもカッコイイが、単にこいつの場合振り返るのが面倒なだけなのだ。大体僕より一回り以上でかいこいつが前の席にいると黒板やら関屋の前の静香ちゃんのうなじやらが見えないので、席替えを上告しようといつも思うのだが、よくよく考えると大して黒板が見えなくても勉強をする気が無いので問題が無い。

今の僕の勉学に対する無気力さは、胸を張って世界に喧伝しても恥ずかしくないレベルだ。

「ダルい。眠い。動きたくない。なんか買ってきて」
「お前金払わねーから嫌だ」
「来月仕送り来たら払うからさー」
「先月の貸しを返してから言えよ」
「百円二百円でチマチマした事言うなよ」
「三千円だよバカヤロウ」

畜生、覚えてやがったか……

関屋の博愛精神の無さは今に始まったことではないので、僕は頭を半回転させて教室の中に目をやった。初音が残っていたら何か買出しを頼もうと思ったのだが、どうやら既に友達と出て行ってしまったようで、姿はない。ついでに言うと、九執の姿も無い。

一瞬、もう一回九執を探しに行って話をした方が良いのかとも考えたが、何を話して良いかも分からない上に、モチベーションが完全に下がりきっていて、とてもそんな気にはなれない。ぶっちゃけ、色んな事で一杯一杯で、九執の事などこの際どうでも良い。

いっそ、飯は諦めて昼休みは寝てようか、と腹をくくりかけた瞬間、廊下の向こうから宴がやってくるのが見えた。両手を後ろ手に組み、軽やかに僕らのクラスの前までやってくると、物怖じもせずガラガラと扉を開けて中へと踏み込んでくる。

「よーっす！」
「おーっす……」

いつもながらムダに高い宴のテンションについて行く気力はなく、僕はやる気なく挨拶を返す。関屋が「おう」だか「よう」だか挨拶を返している間にも、宴は教室に残ってる数少ない生徒にまんべんなく笑顔と挨拶を振りまきながら、僕らの側へとやってきた。そうして、初音の席の椅子をガラガラと引くと、僕らの方を向いて、背

もたれを抱え込むようにして逆さ向きに座る。
今時の女子高生の丈を詰めたスカートで椅子に逆さ向きに座って、机に突っ伏す男の子の前に座ると、男の子からはどういう光景が見えるのか。具体的な説明は省かせてもらうが、つまりはそういう事だ。

「元気ないねー。良い若いもんがそんなんじゃいかんよー」
「むしろお前がなんでそんなに体力有り余ってんのか逆に聴かせてもらいてぇよ……」
「んーそうかなー？みーくんが特別貧弱なだけだと思うけどなー。あ、毎朝生卵飲んでるからかな？？」
「多分そういう瑣末な問題じゃねぇと思う……」

女性のほうが男性よりも体力的には踏ん張りが効くとは良く聞くが、宴の体力の無尽蔵ぶりは、はっきり言って人類の常識レベルを遥かに凌駕していると思う。昨日だって、少なくとも俺の三倍は働いていた筈だ。その上更に、毎朝道場で稽古しているらしいし。

「その元気、少しは分けて欲しいぜ……」
「分けてあげてるじゃん、今」
「な、なんのことでせうか」

やべぇ、バレてる。確信犯かこいつは。

「あー、いい天気だなー」
「今更わざとらしく窓の外向かなくても良いよ。それよりも用意といてくれたー？」
「……は？何を？」
「何をって昨日約束したじゃん。バンドの申込用紙、用意してとくって」

「……そう言えばそんな話もあったな」
「忘れてたね？」
「うーん、忘れてたと言うか……」
「忘れてたんだね？」
「覚える努力をしていなかったと言いますか……」
「昨日はあんなに自信満々に任せとけって言ったじゃーん！！」
「ふはははは、昨日の僕に見事に騙されやがったな！！ちなみに全責任は昨日の僕にあるから、文句は今日の僕じゃなくて昨日の僕に言えよ！！！」
「みーくんのばかばかー！！」
「ちょっと、ちょっとまって、それは今日の僕だって！！」

ガシガシと蹴りつけてくる宴。台詞は可愛いが、ケリの威力はマジで手加減（足加減？）してねぇ。アームブロックしてなかったら、脇腹の一本や二本折れてるぞおい。

「もーいつもいつもそーなんだから！今日出すって委員長に言ってきちゃったんだから今すぐ用意するー！」
「はいはい、わかりましたよ、分かりましたとも」

どうやら、飯が食えないどころではなく、僕には休息すら用意されていないようだった。全くもって理不尽な話だが、残念ながら、僕もやっぱり昨日の僕に対して文句をいう手段は持ち合わせていない。

まったく、使えねぇ奴だな、昨日の僕。

＊＊＊

「性根が汚い」

必死こいて書類を埋め、二つ隣の宴と葵のクラスに移動し、片手で握りつぶせるんじゃないかと思えるぐらい小さな弁当をつついていた葵に決済を仰いだ結果が、問答無用のダメ出しだった。

「いや意味わかんねぇぞ!?」
「ごめんなさい、間違えたわ。字が汚い」
「間違えねぇよ!?普通そこは間違えねぇよ!!?」
「あぁそれも違ったわね。顔が汚い」
「間違ってないから!!わざわざ言い直さなくて言いから!!顔は毎朝ちゃんと洗ってるから!!!!」

一向に話が進まない。と言うか、進めるつもりが有るのかどうかも分からない。と言うか多分進める気が無い。

「良いな?良いんだな!?よーく読めよ、一字一句間違いが無いか確認して、全責任はお前がとれよ!!?」
「もー煩いわね。小型犬みたいにギャンギャン吠えないで頂戴。ちょっと嬉しくなっちゃうでしょ」
「どんな感性だよ」
「あら、弱い奴が吠えるのを見下ろすのって、ちょっとゾクゾクしない?」
「理解出来なくも無いが、少なくとも共感はしたくない」
「残念ね」
「僕にとっては僥倖だ!それよりも、とにかく責任者のところにサッサとハンコを押すんだ。そしてそのコンビニのおにぎりよりも腹の足しにならなさそうな弁当を攻略するだけの簡単なお仕事に戻れ」
「無いわよ、判子」
「……はい?」
「判子なんて持ってきてないって言ってるのよ」
「昨日持って来とけっつったろうがぁぁぁぁぁぁ!!!!」

「……みーくんも忘れてたクセに」

後ろからの宴のボヤキはとりあえず聞こえないことにする。

「お前は団体行動と役割分担をなんと心得てるんだ!!?お前が書類を書くのが面倒臭いというから、わざわざこの僕がこうして代筆してやったというのに!!代表としての心構えもなく、この貴重な昼休みを僕に浪費させた上で、己の役割を放棄すると言うのか!!?お役人様もビックリの所業だなおいぃぃぃ!!?」

問答無用で箸で目を突いてきた葵の、ハエすらつかみかねない神速の攻撃を、僕は紙一重で躱した。

関屋といい、宴といい、こいつといい、どうしてどいつもこいつも肉体的暴力を行使するのにこうも躊躇いが無いのだろうか。何か取り返しの付かないことをしでかす前に、義務教育からやり直した方が良いぞ。若しくは、ロシアかどっかの再教育機関で洗脳真っ盛りの学習を受けてもらうか。

「目はマズイだろ、目は!!?」

「大丈夫よ。東京の人って、目が潰れてもまた生えてくるんでしょ？」

「どんな誤解だよ!!それに目は生えてくるもんじゃねぇよ!!……っつーかなんつーか、なにをしてはるんでしょうか……？」

葵は、まだ半分以上残っている弁当に蓋をして、そそくさと片付けを始めていた。ランチマットで弁当箱を包み込み、箸を箸箱に仕舞い、まとめて乱暴に鞄に突っ込む。そうして、マグカップに入れたお茶を一口含んで、ハンカチで口元を拭い、葵はおもむろに立ち上がった。

そう言えば……よくよく考えたら、こいつが弁当を持ってきてい

ると言う事は、一応昨日は家に帰ったと言うことか。僕の説教が要因であるはずもなかったが、それでも、少しだけ安心する。
　一応家のことも考えてはいるんだな、と少し見直していると、葵は相変わらず虫ケラに向ける時でももう少し感情の篭るであろう冷たい目線を僕に向けてきた。

「それじゃ、行くわよ」
「……へ？どこに？」
「貴方はプラナリアですら行っている神経細胞のニューロン発火を行うと言う事が先天的に出来ない病気でも抱えてるの？灰色の脳細胞がピンクに染まっちゃってるの？普通に考えたら理解出来る事をどうしていちいち口で説明されないと分からないのかしら。女の子のパンツの事以外には想像することも出来ないのかしら、汚らわしい。職員室よ」
「……言いたい事は数あれど、質問は一つだけにとどめてやる。何をしに？」

　葵は僕をまじまじと見つめ、なにやら罵詈雑言をひねり出そうとしたようだったが、やがて諦めて大きくため息を付いた。

「判子を忘れたから署名で良いか、相談しに行くのよ」
「……え、マジで！！？」
「何がよ」
「お前がミスを認めて自分から動くとか有り得ねぇだろ！！？」

　そんな驚天動地な出来事、推理しろと言う事自体が間違っている。この世にありえないことまで選択肢に含めていたら、演算能力などいくら有っても足りないのだ。思考ルーチンは有限回数の有限回答のみに使用されるべきであり、可能性の地平をくまなく探索して行くなんて言う力業が許されるのは、本物の馬鹿かＣＰＵパワーが有

り余っているディープブルーぐらいなものである。
だからこそ、蓋然性の高い物事から順番に僕らは思考するのであり、万が一思考を超えたところで行われるものに関しては、推察そのものを放棄するか、若しくは条件による反射を行うのだ。
と言う訳で、葵が鞄から再び箸箱を取り出した段階で、僕は全力で逃げ出した。

―15―

「え、俺お前らの顧問だったっけ??」

心底驚いた、と言った表情で数学の堀内教諭が割り箸の動きを止め、居並ぶ僕らをまじまじと見つめた。数学教師にもかかわらず何故かジャージスタイルで、しかもどん兵衛なんかを啜るその姿は哀愁と言う名の一服の絵画を彷彿とさせたが、ぶっちゃけこの際堀内教諭の涙ぐましい経済状況に関してはどうでも良い。
どん兵衛と僕らの間を堀内教諭の視線が行き来して、やがて何かを諦めたかのように容器に割り箸を置くのを見て、僕は半歩身を前に乗り出してみせる。

「いや、僕もついさっき知った所なんすけど、なんかどうもそういう事になってるみたいっすよ」
「なってるみたい……ってどういう事だよ。俺コンピ研の顧問やってるぜ?つーか、お前らそもそも非公認サークルじゃん」
「そこんトコがどーもアレみたいでして、非公認サークルが学祭出展の申請やる場合、臨時顧問として学年主任が代行する、みたいな学則が有るとかないとか」滅多に開かれぬ学生手帳の学則欄を、僕は堀内教諭に指し示す。
「聞いたことねぇぞ!?」まじまじと該当の学則を凝視する1学年主任、堀内教諭。

「まぁ……非公認サークルってウチらだけっスからね……」
「やだよ俺!!お前ら絶対なんか騒動起こすだろ!!お前らの責任なんて取りたくない!!」
「学年主任でしょ!!!学生のやる気を削いでどうすんスか!!」
「お前らのやる気は確実に斜め上の方向にねじ曲がって空回りするだろうが!!もー、良いじゃん、非公認なら非公認らしくゲリラでも何でもやれよ。その方が俺らも遠慮なく取り締まれるし」
「それって非行教唆だろーが!!それでも教師か!!!?」
「うるせー!!俺だって自分の身が可愛いんだよ!!娘だって来年から小学生だし、こんなトコで問題起こす訳には行かねぇんだよ!!」
「問題起こしませんって!!」
「信用できるかボケ!!!……あ、ほら、ここ!ここ見てみ。良い事書いてある」
「……なんすか」堀内教諭の肩ごしに、学生手帳を覗き込む僕。
「臨時顧問は学長が代行しても良い、って書いてあるじゃん」
「読んだよ!!!でも学長に頼む前にまず先生に相談するのが筋だろ!!」
「俺はきっぱりと断る!!!愛娘の愛佳ちゃんに誓って断る!!可愛いんだからなウチの子!!なんだったら写真見るか!?」
「いらねーよ!!!バーカバーカ!!」
「うるせー、バーカ!!とっとと戻ってゲリラライブの準備でもしてろ!!!」
「あー、やってやる、やってやるぞこのヤローー!!そして絶対先生に教唆されたってチクッてやるからな!!」
「俺が取っ捕まえれば問題ないもんねー」
「うわ、このヤロー宣戦布告だな!!?ちくしょー、絶対逃げきってやるからなッッ!!!」
堀内教諭の手から生徒手帳をひったくり、職員室を乱暴に出て行

く僕。

＊＊＊

問答無用で葵に蹴りを入れられ、関屋に頭を叩かれ、最後に宴に鳩尾にエルボーを喰らい、僕は職員室前廊下に崩れ落ちた。

「ど、どうもずびまぜんでじだ……」

「許可をもらいに行ったはずなのに、喧嘩売ってどうするのよッ！どうして貴方はそう後先を考えて行動出来ないの？反射神経だけで悪態をついて飛び出すことしか出来ないの？赤旗に発奮する闘牛とか右翼でももうちょっと理性的に行動するわよ！？」

どう考えてもアウトな発言だったが、とりあえずはスルーする。

「そうだよー、どうするんだよー、昼休みはもう半分しか残ってないのにー！」

倒れ伏した人間にも容赦なく、宴のストンピングがゲシゲシと背中に降り注いでくる。

「痛い、痛いですって九仗さん、いやマジで痛いっス！」

「どうすんだよ、どうすんだよ、どうすんだよーー！！」

「どうするって言われても……選択肢は一つしか……」

すがるような上目遣いで僕は葵を見つめ、どうしても視線が顔よりも下の方に集中してしまう不具合を修正することは出来なかったが、精一杯の哀願の表情を浮かべた。

「学長に顧問代行をお願いしに行くと言うことで一つ、如何でござ

いましょうか……？」

葵は腕組みをしたまま僕を見下ろしながらたっぷり１０秒近く沈黙した後で、大きくため息をついた。

「最初っからそのつもりだったって事ね……まぁ、確かにその方が色々とスムーズに行くかもね。まったく、交渉は任せろって言った段階で警戒しておくべきだったわ……」

「いや、僕は別にそんな計算高い事は一切考えてないですよ！？」

「煩い、黙れ。全く貴方はそうやっていつもいつもいつもいつも……ッ！！」

「分かりました！！」

とりあえず葵の気が変わらないうちに、と、僕は猛烈な勢いで立ち上がり斎宮に向けて敬礼する。

「かくなる醜態をさらした上は、是非斎宮センパイに交渉の模範を示して頂き、ご指導ご鞭撻を賜らんことを切に希望する次第であります！！」

『うぜー……』

期せずして、葵と宴、関屋の台詞がハモる。

……好きなように言うが良い！！どうせ顧問になるなら学長のお墨付きの方が良いに決まっているのだ。そして、学長は葵に優しいからきっと許可してくれるに違いないのだ。ちゃんと学年主任の断りも得た以上、筋としてどこも間違ってはいない上に皆が幸せになれる優れた作戦であると言って全くもって差し支えないっ！

――まぁ、葵のプライドの問題と言うのが最大の難関だった訳だが、変に堀内教諭と揉める前に交渉を決裂させたお陰で、葵としても学長を説得するしか手段がなくなった訳で。

すまん、葵。ここはフラタニティメンバーの明るい学生生活の為に、礎となってくれ。

＊＊＊

『来客中』

無慈悲に面談を謝絶する、学長室の扉に掛けられたプレートを前に、僕らは暗鬱な沈黙に包み込まれていた。

「……こいつは想定外」

「想定しておきなさいよ!!!学長が接客中の可能性なんて、初歩の初歩として想定しておくべきでしょう!!馬鹿なの!?死ぬの!?あぁ、駄目だわ馬鹿に馬鹿と言ったところで馬鹿だから理解しないと言うこの過酷な現実を前にして、無力極まりない私は一体どうやって突破口を開けば良いのかしら。さしあたり、千枚通しで眉間に第三の目でも開眼してあげれば少しはましな思考をするようになるのかしら?それとも頭蓋骨の隙間をお好み焼きのコテでこじ開けたら少しは脳に血流が回るようになるのかしら?」

いや、トレパネーションはヤバい。マジでやばい。右手を戦慄かせて、何がしか想像を絶する拷問を想定しているに違いない葵の機先を僕は制することにした。

「あー……出直すか?ここはひとつ、戦略的撤退とゆーコトで。今日どうしても参加申請を出さなければいけないと言う訳でもないし」

「えーーー駄目だよー!」叫んだのは宴だった。「そーしたら土日挟んじゃうから、提出月曜になるじゃん!講堂のスケジュール他のサークルに抑えられたらアウトなんだよ!?」

「放課後にもう一度来るとか……?」

「学長いつも放課後は居ないじゃーん！来週だって居るかどうか分かんないんだし！！」
「つってもどーすんだよ、昼休みの間に接客が終わるとも限らねぇんだぞ」
「ほら、こうさ、みーくんが『たのもーー！』って言って入って、なんか寸劇とかして注意を引き付けてる間に、私が机から判子を拝借してちょん、って……」
「どうして非合法手段が前提になってるのよ！！？」ヒステリックに叫ぶ葵。
「あ、それなら関屋が全裸で飛び込んで行く方が陽動作戦には良いんじゃね？」
「え……マジで？なんで俺？？」関屋、真顔。
「それも良いけど！それでもすっごく良いけどなんかふつーに良いカラダっぽいから、出オチとしては弱いと思うんだよねー。やっぱさー、ヨゴレ的な出オチ笑いは、もっと貧相だったりする方が笑える訳でー」
「笑わせに来てる訳でもないわよ！！！もう、来客中にお邪魔することをお詫びして、ちゃんと事情を説明すれば学長だって……！」

「うるさいッッッ！！！！！」

猛烈な勢いで学長室の扉が開かれ、廊下の隅々まで響き渡るような大音量で、中から出てきた初老の男性、伊澄教頭が僕らを怒鳴りつけた。そうして、咄嗟の出来事に気圧されて沈黙する僕らを、二三度深呼吸して怒気を押さえ込んだ後で、じろりと睨みつける。

「学長室の前で騒ぐんじゃありません！来客中と言うプレートが読めないんですかッ！！」

至極ごもっともで反論の余地など微塵も存在しない教頭の台詞に、

僕らはお互いの顔をまじまじと見合わせた。
……これもやはり想定外。来客に教頭が同席しているという事になると、少し面倒だ。
僕と関屋、そして宴がお互いに視線で牽制しあっている間に、葵がしぶしぶと言った感じで、外向きの営業スマイルを作ってみせた。そうして、両手を前に組み、さもお嬢様然とした様子で教頭を上目遣いで見つめる。

「お騒がせして大変申し訳ございませんでした。学長が接客中であると言う事は存じあげておりましたが、急ぎの用件でしたのでどうしたものか相談していた所でした。ご迷惑ついでで大変恐縮なのですが、学長にお取次頂けませんでしょうか？」

教頭は、葵の営業スマイルを実にうさんくさそうな表情で見つめてくる。

「君は？」
「はい、申し遅れました。1年3組の斎宮葵と申します」
「……あぁ、君が」

葵が名乗った途端、教頭が何かを徳心したように、小馬鹿にした表情を浮かべた。マズい。ヒジョーにマズい。

「で、要件は？」
「実は……」

出来るだけ、葵に可能なだけ精一杯丁寧な口調と態度で事情を説明するにつれ、教頭の態度は急速に固くなっていった。表情は冷え渡り、視線は侮蔑に充ち溢れ、口元が怒りで歪んで行く。

「……君たちは、そんな事で来客中の学長のお手を煩わせるつもりだったのか!?もっと社会的常識を持ちなさいッッ!!」

はいはい、ごもっとも。ごもっともですよ、教頭。

……この伊澄教頭は、水無瀬高校の昔から居る教頭ではない。それどころか、今年になって教育委員会から送り込まれてきた、お目付け役みたいな雇われ教頭なのだ。当然、学校の事も葵のことも良く知らない。

態度から察するに斎宮の名前ぐらいは知っていたと言う感じなのだろうが、生憎、葵を相手にすると言う事がこの学校、ひいては水無瀬村ではどういう事を意味するのかと言う事が、全くもって理解出来ていないのだ。

これが、伊澄教頭以外の誰でも、葵のお願いとあれば多少の無理は聞いてくれるはずだ。少なくとも、葵はこの村の中ではそれぐらいの力はある。しかしながら、伊澄教頭はそれを知らない。それどころか、葵がワガママを通せると言うことに対して悪感情を持っている素振りすらある。

ひじょーにマズイ状況である。

こう大上段な態度を取られて、葵にしては良く耐えている方だと思うが、だからといってこうも言われた以上、引く気は全くあるまい。教頭にしても、どちらかと言えば正論なのは教頭の方なので、態度を軟化させはしないだろう。

このままで行けば、結果は火を見るよりも明らか。

「あーーえーーーっと、そのーーー……」

ここは一つ、なんとか上手く誤魔化して状況を好転させようと、僕が口を開いた瞬間。

「良いですよ、構いません。入ってもらって下さい」

と、中から品の良い良く響く声が聞こえてきた。優しげで、その声を聞くだけでどこか安心出来るような、人の気持ちを平和にさせる涼やかなトーン。聞き覚えるのある、笑顔を含んだそのニュアンス。

「いやしかし霧島さん……」

振り返って戸惑いの声をあげる教頭に、仕立の良いツーピースのスーツに身を包んだ青年が、学長室内のソファーから立ち上がるのが見えた。

「お気持ちはわかりますが、ここは僕の顔を立てて許可してあげて頂けませんか、伊澄先生。それに、僕も久しぶりに皆と会いたいですから」

青年はそう言うと、もはや教頭には興味なしとばかりに、僕らににっこりと笑みを向けた。

「久しぶりだね、みんな」

『霧島さん!?』

……そう。

ようやく、よーーーやく、満を持して僕らの希望の星、霧島さんが村に戻ってきたのだ。

＊＊＊

霧島陶冶（きりしまとうじ）２３歳、独身。東大法学部卒。衆議院議員秘書。そして斎宮家の後見代理人。

２年前の「例の事件」の後、両親と姉を亡くしボロボロになっていた葵を助け、水無瀬村の混乱を立て直し、警察関係の問題の処理を一手に引き受けたのが、この霧島さんだ。元々の水無瀬村との関係値で言えば、水無瀬村を含む長野県二区選出の代議士の私設秘書と言うぐらいのものだったのだが、色々と有って、水無瀬村の相談役のような事までこなしている。

斎宮家の先代当主が亡くなり、寝たきりの葵のお祖母ちゃんが名ばかりの当主に戻った時にも、代議士を説得して斎宮家の後見人になって貰った上で、自らが代理として斎宮家と水無瀬村のために奔走したらしい。今では代議士秘書と言うよりも水無瀬村担当秘書のような扱いになっていて、政治向きなところで言えばきっぱりと左遷気味なのかもしれないが、そんな事はおくびにも出さず、献身的に村のために立ち回っている。

以前一度、なんでそこまでして村と斎宮家の為に働くのか、と聞いたことが有るのだが、「僕も水無瀬高校の出身だし、斎宮さんには学生の時に結構お世話になったからね」と笑って答えたきり、詳しい話は教えてはもらえなかった。おそらく、亡くなった葵の姉と何か色々とあったようなのだが、流石にそこまで突っ込んだ質問は出来ず、僕らの中では「とにかく良い人」と言うことになっている。

東大法学部卒で議員秘書なんて言うとそりゃもう超エリートだが、本人は別に気負うこともなく、むしろ腰が低く人当たりが柔らかいぐらいで、村でも嫌っている人間はいないのではないかと言う聖人ぶり。更にその上に俳優もかくやと思われるほどのイケメンで、身長は高く、身につけているものの趣味も良い。普通に考えるとありえないぐらいの完璧超人ぶりだが、一番すごいのはそれだけ完璧超人にもかかわらず、万人に好かれていると言うキャラクターを維持出来ていると言う点だろう。

宴なんて事有るごとに彼氏になってくれないかと（冗談半分にだが）口説いているぐらいだが、そういう時の爽やかな躱し方がもう、イケメンとはかくあるべきだと言う見本みたいなスマートなもので、

同じ男性としては嫉妬を通り越して羨望の眼差しで見つめるしか術がない。

そして、ここが一番大事なところなのだが、霧島さんは葵に言うことを聞かせることが出来る、唯一の男性なのだ。

後見代理人であると言うこともさることながら、理論的ながら情を忘れず、葵の性格を見通した上で角が立たないように上手く誘導し、しぶしぶながらも霧島さんの「お願い」を聞かざるを得ないようなシチュエーションに運ぶその手腕は見事の一言に尽きる。話術とか理知とかがどうと言うよりも、身にまとった雰囲気を総体として活用し、柔らかく相手を包み込むスタイルなのである。真似をしようと思っても出来るものではない。

夏休みの手前までは僕らも葵の後始末と面倒を見るのにしょっちゅうお世話になっていたのだが、衆院選が始まると流石に水無瀬にばかり居る訳にも行かず中々顔を出してくれなくなって、選挙後は代議士自体は当選したものの、党としては惨敗を期したものだから新体制の確立に飛び回ってやはり葵の事どころではなく、落ち着いた頃を見計らうようにして代議士が海外視察に出掛け、戻ってきてからは国会対策で忙しく、ようやく、ようやく一息ついてこうして村に戻ってきてくれたと言う訳である。

果たして、僕たちがどれだけこの日を待ちわびたことか！

野に放たれた野獣の首に縄をつけ、あやしてくれる万能調教師のお戻りをどれだけ切望していたことか！！

こうして霧島さんが戻ったからには、様々な問題がかなりクリアになるはずだ。問題視されていなかったことが実は問題だったと言うこともクリアになっちゃったりするかもしれないが、それにしたって進展しないよりは良い。葵も全て自分ひとりで抱え込む必要もなくなるし、ストレスから多少なりとも開放された葵が大人しくなれば、精神攻撃に耐え忍ぶ日々にもオサラバ出来るって訳だ！！

バンザイ！霧島代議士秘書バンザイ！！

これはもう、本日を国民の休日に設定しても良いんじゃないかっ

て言うぐらいめでたい日だ！

「なるほど、バンドかー。良いね！僕も昔はギターとか弾けたんだけどね、もう5年以上弾いてないからなぁ。斎宮さんのピアノも最近全然聞けてないし、それは凄く楽しみだ」

僕らの話を聴き終えた霧島さんが、そう言ってにこやかに笑うと、問題はもう解決したも同然である。学長は元より水無瀬の人間で斎宮派だし、教頭の苦み走った表情を霧島さんの笑顔が中和してくれている限り、恐れるものは何も無い。

あからさまに弛緩してソファーに沈み込んでお茶を飲む僕らに、お茶を用意させられた教頭の視線は邪眼もかくやという感じだったが、この期に及んで教頭など敵ではない。黙って職員室にでも引き上げていれば良いのだ。

「それでは、臨時顧問をお引き受け頂けるんですか！？」

ワザとらしくキラキラした目で葵が学長を見つめ、いかにも好々爺と言った感じのハゲの学長は、ニコニコと頷いた。

「他ならぬ葵さんのお願いだからね、もちろん、引受けさせてもらうよ」

『有難うございまーす！』

ここばかりは、全員で口を揃えて学長に礼を言う。

「じゃぁ、書類を貸して」と言う学長に葵がサークル出展申請書を手渡すのを横目で見ながら、霧島さんは僕に微笑みかけた。

「最近はどんな感じだい？」

「まーボチボチっすねー。ウチで飼ってるメス猫がスゲー機嫌が悪

くて、手癖も悪いんでちょっと教育し直さなきゃいけないんじゃないかって言うのはあるんですけどー」

僕らに背を向ける葵の方がピクリ、と震える。皮肉に気がついて怒鳴りつけたいものの、学長の前では猫をかぶって大人しくしていようと言う素振りである。ちなみに、僕と関屋が実際に飼っている（と言うか同居している？）活計はオス猫だ。

僕の台詞に霧島さんはにこやかに笑った後で、少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「中々寄れなくて悪かったね」

「いやー、事情はわかりますから、大丈夫っすよ。大変だったみたいですねー、選挙」

「アレはもう、大変なんてもんじゃなかったよ……僕は国政選挙は初めてだったけど、二度とやりたくないね」

そう言って笑う霧島さんに、横に座った宴が腕に絡みつきに掛かった。

「寂しかったんだよー！初音ちゃんとも、まだ戻ってこないのかなー、まだ戻ってこないのかなー、ってずっと話してたし」

「ごめんね。もう少し早く戻ってくる予定だったんだけど、野党に落ちるって言うのは、思っていた以上に影響が大きくてね」

あからさまに甘える宴に、教頭の怒りゲージがＭＡＸ付近にまで高まっているのが手にとるように分かる。うんうん、分かるぞ教頭、お前の気持ちは。しかし諦めろ。こと霧島さんに関しては、宴のブラコン回路が完全にオンになってしまうのだ。

「まぁ、しょうがないよね！戻ってきてくれただけでも嬉しいし！

暫くはこっちにいられるんでしょ？」
「うぅん、どうだろうなぁ。いや、一応頻繁に顔を出すつもりではあるけどね。これからようやく県内のいろんな調停に取り掛かる感じだから、暫くは市内からこっちに通う事になるかな」
「ええーー！！良いじゃん、また葵ちゃんの所に泊まれば！部屋ちゃんと掃除して開けてあるよー？」
「そうだなぁ、うん、落ち着いたらまたそうしたいね」
「あんまり無理を言うものじゃないわよ、宴」

学長の判をもらってソファーへと戻ってきた葵が、そう言いながら僕の隣に腰掛けた。膝を揃えたお嬢様座りをしながら、さりげなくも確実に僕の右足を踵で踏み抜いてくる。
……見えないところで暴力を振るうことに関してはこいつはマジでプロフェッショナルだなッッ！！
苦痛に耐える僕の方など見もせず、ほつれた髪の毛を耳へとかき揚げながら、葵はアンニュイな視線を霧島さんに向けた。

「お久しぶりね、霧島さん」
「ご無沙汰して申し訳ありませんでした、斎宮さん」

不思議な……年齢差も、立場の差も超えた不思議な空気が二人の間に流れる。
以前から疑問に思ってはいたのだが、葵と霧島さんの間にある関係値では、実際の立ち位置とは異なり葵の方が目上のようなのだ。霧島さんは葵を良く御していると思うが、向かい合った時の雰囲気は、むしろ主従関係を思わせる。
霧島さんは、葵には優しい。いや、誰に対しても優しいのだが、葵に対してはほぼ愛情にも近い優しさを向けていると思う瞬間がある。そうして、葵はその優しさを決して受け取ろうとはせず、拒絶する。そういう二人の関係値がどうやって構築されたのかは僕には

知る由もないが、なんだか、見ていて妙なむずがゆさを覚えるのも事実である。

「お変わりはないですか？」
「まぁ、それなりにやってるわ。後でまた、いくつか相談したいことがあるから、家に寄ってもらっても良いかしら」
「ええ、もちろんです」
「……後、今月のお参りの日程は決まったのかしら？」
「ええ、それについても、後ほど……」

お嬢様と執事を思わせるやりとり。葵のお嬢様然とした態度は生粋のものだが、霧島さんの慈愛に満ちた表情も、一朝一夕で出来上がったものとは思えない。しかし、葵はやはり霧島のその笑顔を受け入れることはせず、無表情のままでテーブルに置かれた緑茶のカップを両手の中で転がしていた。

ちなみに、お参りと言うのは葵が月イチで東京に水無瀬村の様々な嘆願が請願をしに出掛ける行事の事である。議員やら財政界の偉いさんと会食したりパーティに出たりして愛想を振りまくお仕事で、「エロジジイ共の猿芝居の相手をお人形さんとして努めるのよ」と、葵は心底嫌がっている。しかし、それが水無瀬にとっての重要な折衝であると理解はしているので、嫌々ながら毎月出掛けては、物凄くヤサグレて戻ってくるのだ。

「今日戻ってくるとは聞いてなかったわよ」
「すいません、バタバタとしてまして。夜遅くにご連絡するのもどうかと思いましたし、授業中にお電話する訳にも行きませんでしたので」
「……まぁ、良いわ。それで？今日は何をしに来たの？ただの挨拶なのかしら」
「丁度、学園祭のことでね」

と、別に緊迫はしていないがどこか入り込み難いものがある二人の空気に、学長が笑顔で割って入った。

「村祭りが今年はちゃんと行えるかどうかと言うのもあるし、ほら、学園祭を一緒に行事としてまとめたらどうかと言う話もあっただろう？その辺りの事を相談してたんだよ」

「あぁ、そうでしたの。確かに、去年は出来ませんでしたからブランクも有りますし、ここまで大掛かりになってくると、霧島さんの方にもお話を通しておかないといけなくなりますわね」

学長に対しては完全に葵はお嬢様モード。今このご時世にその喋り方はどうかと思わないではないが、葵に言わせると年配には未だにこう言うお嬢様モードはウケが良い、のだそうだ。そんな葵に二三度頷いておいて、学長は霧島さんに向き直る。

「ですからね、霧島さん。役場の方々も確かに外からの受け入れをためらう気持ちも分かるんですが、いつまでも2年前を引きずっていてもしょうがない事ですし、村の為にも、学校の為にもより開かれた祭りにせねばならんと考えておる訳ですよ」

「が、学長！！生徒が居るところで！」

学長の台詞に伊澄教頭が顔色を変えて声を上げるが、学長は鷹揚に頷いただけで教頭を押さえた。

「構わんよ。葵さんも他の皆さんも事情は良く知っている。それにね、この歳の生徒と言うのは私たちが思っているよりもずっと大人だよ」

「なら……宜しいのですが……」と、しぶしぶ引っ込む教頭。

……いや学長、それは流石に買いかぶりすぎだ。少なくとも僕と関屋はその辺りのナイーブな「事情」とやらには詳しくないし、僕は例外としても他の連中はそんなには大人ではない。

しかし、そんな僕の思いは当然届かず、学長は霧島さんを見据えたままで台詞を継ぐ。

「確かに、不幸な出来事では有りました。だからと言って萎縮したままでは何も前に進まんのも確かです。ですから、霧島さんの方からも、役場の連中にいつまでも縮こまっているんじゃない、と説得して欲しいんですわ」

「そうですね……」

霧島さんは腕組みをして顎に手を当て、ほんの一瞬だけ考え込んだ後で、ゆっくりと葵に視線を向けた。

「斎宮さんは、どう思われますか？」

「そんなの、分かりきってるでしょ。学長先生の仰る通りだわ。いつまでも怯えていても何も始まらない。水無瀬が新しく発展して行く上で、皆の気持ちを人つにまとめると言う意味でも、村祭りと学園祭をより大きな開かれたものにするのは必須条件よ」

「分かりました。では、そうしましょう」

葵の台詞を受け、霧島さんはにこやかにそう言い放つ。

そうして、僕はようやく気がついた。僕らが霧島さんを利用して学長に臨時顧問を引き受けてもらえるような雰囲気を作ったのに対し、学長も葵を使って、自分の意見が霧島さんに通りやすいようにしたのだ。

霧島さんを支点として行われた意見のすり合わせ。霧島さんはそこに居て意見を仲介しただけだが、それでいてそれぞれのコンセンサスが上手く成立するように機能している。本人の意見や行動では

なく、そこに居るだけでその人を介して情報がスムーズに流れて行く。霧島さんは、そういう空気感を持っている人なのだ。

……やがて、話はよもやま話に変わり、和やかな雑談タイムは昼休み終了の予鈴が鳴るまで続いた。予鈴を聞いて立ち上がる僕たちに、「もう少し実務的な話をして行くから」と言うことで霧島さんは残り、「では、また放課後に」と言って葵に微笑みかけた。

葵はやっぱり霧島には無表情を、学長には営業スマイルを振りまいて一礼し、僕たちは学長室を後にする。

廊下を先導する葵の背中と、軽やかに揺れるプリツスカートを眺めながら、暫く躊躇した後で、お互いの教室が見え始めてきた頃に僕は口を開いた。

「なぁ、葵」

「なによ？」葵の背中が答える。

「……あのさ」

僕たちが、入学した頃からずっと気にかけていて、情報としては知っているものの未だに本人たちには聞き出せていない事。それを、今このタイミングなら聞き出せるかもしれない。

「あのさ……」

村の人々が誰しもその話題を避けたがっている事は知っている。そうして、その事件の渦中に葵立ちが居たと言う事も知っている。だけど、僕は別にこれまで全く気にしてはいなかったし、気にする必要も無いと思っていた。しかし、先程の会話で、葵たちをもっと理解するためには、そろそろそこにも踏み込まないといけないのではないかと感じたのだ。知っておかなくてはならないのではないかと、思ったのだ。

つまりは、2年前、日本全土を揺るがせたあの大事件、「水無瀬

村連続殺人事件」とは一体なんだったのかと言う事について。

「黙ってないでさっさと言いなさいよ」

「んー……そのー……」

……結局、僕は教室にたどり着くまでの短い時間で、葛藤に決着を付けることが出来なかった。

今の僕たちの関係値を更に進展させるのか、あるいは壊すのか、その決断を下すことが出来なかったのだ。

―16―

「んー……2年前の件かぁ……」

口元に人差し指を当て、中空に目線を泳がせながら初音が考えこむようにそう言った。

「まぁね。色々とあったからね。皆まだ話したくないんじゃないかな……」

己のポーズがどれだけ周りに可愛らしさを振りまいているのか、こいつは果たして理解しているのだろうか。いや、きっとしてない。天然だ。計算ではとてもここまでのさりげなさは出せない。つまり、こいつは天然可愛い娘なのだ。

――放課後、僕らは再び図書館で棚卸の手伝いをしていた。毎日毎日日本をダンボールに詰めて梱包して運び出して運び入れて梱包をといて収納する、まったくもって代わり映えのしない労務である。人間、一番辛い拷問は同じ事の反復作業だとは良く言ったもので、遅々として進まないこの棚卸作業に、三日目にして僕はもう完全に

やる気を失っていた。
　この三日間の進展といえば、ＣＡブロックにあった本の分類をし終えた程度で、格納するには至っていない。そもそも、後で奥からＡブロックに入るに然るべき書物が引っ張り出されないと言う保証はなく、そうであるからには完全に埋め尽くすわけにも行かないのである。完璧を期すならばまず図書館を空っぽにしてフルチェックした後で戻して行かなければならないが、この図書館に匹敵する収納スペースなど、村には全く存在しない。しかも、図書館の営業を休む訳にも行かないのだ。
　となると、手前から順番に引っ張り出して、目録をつけたらとりあえず戻し、然るべき書物が発掘されたら入れ替えると言う、結局は場当たりに近い作業しか出来ないと言うことになる。
　無駄だ。まるで無駄なのだ、この作業は。
　まぁ、図書館の全書目録をつくると言う意味では十文有益だし、そもそも今までそれがなされてこなかった事自体が問題な訳だが、整頓をするための情報を仕入れるのに役にはたっても、完備と言う点では全くもって意味がない。それならば、いっその事各棚ごとに分担で書籍をチェックして目録をつくっていけば良さそうなものなのだが、新図書館長は外に運び出してのチェックにこだわっている。まぁ、確かに古書類も多いし、本の補修も兼ねていると言う事ならば分からないでも無いのだが。
　いつもならとっとと愛想をつかせてサボリに行くところであるが、律儀に付き合ってこうして初音と作業をしている理由は、ただ二年前の話を聞いてみたいと思ったからだ。

「えっと次は、４１８コンマ６１のハ行」
「ほいよ」

　ハシゴの最上段に腰掛け、棚の分類番号を読み上げる初音に、下で控える僕はダンボールから該当する番号のシールが張られた本を

適当に引っ張り出して手渡す。本当ならもっとしっかり判別した方が良いのだろうが、どうせまた並べ替えることに成るに違いないのだ。

ほんの少し上体を倒し、僕から本を受け取りながらも、初音の視線は本棚の分類番号を追い続ける。

「どうして図書番号ってこう言う分け方なんだろうね」

「さーねー。先人の知恵とか何じゃねーの？結局の所、図書館って言う限られた空間の中に、どれだけ多くの知識を溜め込めるかって言う点で、どうやって本を分類して配置するのが良いかって言うのが趣旨な訳だろ？そうこうしている間にも新しい学術ジャンルって言うのは生まれて行くんだし、一度派られたシールを剥がして貼り直すのだって手間なんだから、そこら辺を考えて上手く出来てんじゃねーかな。知らねーけど」

「そうだよね。数字は連番なんだから、後で割り込みするにも限界はあるもんね。でも、そういう意味で考えるなら、図書館っていうのはある意味硬直している脳細胞だよね」

「……ん？」

「知識の牢獄なんて居うけどさ、結局こうやって棚に格納された知識は勝手に動いたりしないし、他の知識と結びつき直したりはしないし、一度固定化されたら隣の知識と永久に結びつけられて、新しい出会いとか発想なんて出てこない、頭の固い人みたいじゃない？」

「あーまぁそうかもなー。でも、その代わりにその本を読んで、新しい発想を持って別の棚に行って、知識と知識を結びつける奴って言うのも居るんじゃねーの？だとすれば、図書館の利用者こそが、ニューロンの発火みてーなもんで、知識と知識を横断して結びつけているって言えんじゃねーかな」

「それは確かにそうかも。でも、ニューロンは発火しただけじゃダメなんじゃない？それが連鎖しあって、トータルとしてアウトプットされないと『思考』とは言えないと思う。だから、図書館が一つ

の脳として存在するためには、その中の知識を横断して、ディスカッションして、アウトプットするための人間が必要なんだよ。この図書館がサールの部屋になる為には、利用者が全体で一斉に知識を交換しあわないといけないんじゃないかな。そうしたら、初めて図書館は知識の牢獄ではなくて、トータルブレインになれる」

「ふぅむ……」と僕は呟いた。「つまり、その喩えで言えば、この図書館は今脳死状態って訳だ」

「そうだね、私たちは今大きな脳の中で、脳外科手術を行っているって言う事になるのかな」

「時間がかかりすぎて、脳死から目覚める前に腐っちまうぜ」

「でも、ひょっとしたら……」

初音の表情が、ほんの少し曇る。

「ひょっとしたら私たちがやっているのは、大脳新皮質にメスを入れて心のありかを探そうとしているのに似ているのかもしれない。もっと、本質的な……根幹的なところに手をつけないとどうしようも無いのかもしれない。脳幹って言うか……基本設計を司るターミナルブレインを見つけ出さないとホントの所は理解出来ないのかも……」

沈黙が訪れ、僕は初音をまじまじと見上げた。やがて、初音も僕のその視線に気がついて、きょとん、と見下ろしてくる。そうして、お互いの目が会って数瞬が過ぎ、僕たちは一斉に爆笑した。

「なんでこんな話してるんだろうね！！」

「わかんねーよ、初音が始めたんだろ」

「うーん、どこからこんな話になったのか全然わかんないなー。おかしいなぁ」

コロコロと笑う初音だが、実際のところ、僕も初音もお互いに気がついている。結局、初音は二年前の事件から話題をそらしたのだ。僕も初音もただの高校生で、理系でもなく、情報工学にも脳生理学にも詳しい訳ではない。そんな僕らが小難しい顔で話しあっても出てくる結論なんてたかが知れているし、暇つぶしにもなりはしない。それでも初音がそんな話をしてみせたと言う事は、それなりの意味はあるのだろうが、やっぱり、別のところに意識を向けたかったのだろう。

だから僕は初音の意思を尊重することにして、抱えていた書籍を二、三個まとめて初音に押し付ける。

「ほれ、『電子技能検定試験問題集』に『アルゴリズム・サイエンス』と『和算の歴史』、あと『失われた時を求めて』」……相変わらず良く分からん分類だ。

「え、あ、ちょっと!?こんなにいっぱい持てないよ!!?」

両手いっぱいに本を抱えてオタオタと慌てる初音に、僕は背を向けてヒラヒラと手を振った。

「あー俺ちょっとトイレ行ってくるわ」

「えーー!ちょっとみーくん待ってよー!!逃げる気でしょ?サボる気なんだよね!?どーせサボるなら私も一緒に……」

「トイレ行くだけだって。すぐ戻るから」

必死で初音がバランスを取る気配を察しながらも、僕はロビーの方へと歩き出す。

――初音が二年前の事件について話したくないようだったら、無理に聞き出すことはない。僕がそれを知りたがっていると言うことさえ伝われば、とりあえずはそれで良い。

それに、そろそろ本気で腰がヤバイので休憩しないことにはやっ

てらんねーっつー事ですよ。

＊＊＊

とりあえず、学校に戻って何かしてサボるか、とロビーに向かった僕を出迎えたのは、篠原だった。

出迎えたと言うか遭遇したと言うかぶつかったと言うか、ロビーから両脇に伸びる階段の中程から、大量の書籍やファイルを抱えた篠原が降って来たのだ。

「あああああ！！柏木くん危ないーー！！！！」

「うおぁっっ！！？」

どうやら階段でバランスを崩してしまったらしく、周りに本をばら撒きながらゆっくりと倒れ込んでくる篠原。危ないー、じゃねぇよ！どう考えてもお前の方が危ないよ！

咄嗟に体が動いたのは自分でも上出来だった。ダッシュで階段の下まで駆け寄ると二、三段すっ飛ばして駆け上がり、落ちてくる篠原を受け止める。段に落ちた方がダメージがデカイと即時判断。階段を蹴りつけてフロアに身を投げ出し、篠原を抱え込んで極力自分の体で衝撃を受け止める。

まずは肩口、そして背中にやってくる鈍痛。ゴロゴロと二回ほど転がった後、僕らは静止する。

荒い息を吐きながら目を開け上に乗る篠原を見ると、同じように呼吸を乱しながら、篠原が僕を見下ろしていた。

「び、びっくりしたー！！」

「びっくりしたのはこっちだよ！！心臓止まるかと思ったぞ！！」

「ふつー階段で支えない！？まさか抱えて飛ぶとは思ってなかったよ！？」

「あのバランスで支えきれる自信がなかったんだよ！米俵より重いもんなんて持ったことねぇし！！」
「失敬だな君はー！私は小柄で体重だって軽いよ！？」
「だからって米俵より軽いって事はないだろうがっっ！！」

そこでもう一度お互いに顔を見合わせ合い、僕らは同時に爆笑した。

「あぶねーなーもう。気をつけろよ」
「ごめんごめんちょっと油断しちゃって！柏木くん、ケガはない？」
「分かんねーけど、とりあえず全身が打撲で痛い。つーか、それよりもとりあえず降りてくれ」
「あ、ごめん」

不意に、自分が男の子に馬乗りになっていることに気づいて、大慌てで飛び退く篠原。その動きを見るに、どうやら篠原の方にはほとんどダメージはなさそうである。一応受け止めるようにはしたとはいえ、アレでほぼノーダメとは、思ってたより頑丈な奴だ。

「ホントに大丈夫……？」と言いながら手を差し出す篠原に引っ張り上げられながら上体を起こし、初っ端にダメージが来た左肩や背中のチェックをしてみるが、どうやら折れてもいないし脱臼もしていないようだった。後で打ち身で熱ぐらいは持つかもしれないが、まぁ、これぐらいだと一晩寝たら腫れも引くだろう。

「あーー！貴重な書籍がーー！！」

どうやら僕が大丈夫らしいと確認するなり、篠原は階段付近に散乱した書籍やファイルをかき集めはじめた。薄情な奴である。もう少しこう、労りや慈しみの心が有っても良いんじゃないだろうか。

大体、これだけド派手にコケたり転がったりしていながら、パンチラの一つも見せないとはどういう鉄壁スカートだよ。まぁ、そもそも委員長キャラを貫いている以上スカートの丈がいまどきありえないぐらいに長いと言うのは許すとしても、その下に黒ストッキングまで履いているのだから全くもって色気が無い。そんなサービス精神のなさではこれから訪れるであろう過酷な恋愛戦争に勝ち残っていくことが出来ないどころか、ほのかな色気と言うものを売りにしている委員長キャラそのものを否定してしまうことにも繋がりかねないのではないだろうか。まぁ、体は柔らかかったけど。凄く柔らかかったけど。

……まったくもって、どうでも良い感想だった。

なんだかここ数日で凄まじく肉体的ダメージや疲労を蓄積し続けているような気がしたが、かと行ってこのままボケーッと座り込んで篠原のキャラ立ちについてダメ出しをしていてもしょうが無いので、僕はゆっくりと立ち上がり、本を拾うのを手伝うことにした。

散乱する書籍は文庫からハードカバーから雑誌から新聞の縮小版まで多岐に渡っているが、何冊か拾ったところで、僕は書籍のタイトルの共通点に気がついた。

曰く、「紅葉伝説考」「能舞台～紅葉伝説」「鬼の研究」「神隠し～異界からのいざない～」「呉羽の刻」「境界の発生」「水無瀬村郷土史」、そして・・・・・「朝日新聞縮刷版２００７年９月～１０月」。

これは――全て、この村と2年前の事件に関する書籍だ。

どうして篠原が二年前の事件についての書籍を大量に集めている……？

分厚い、タウンページのような朝日新聞縮刷版を手にして見つめる僕に、他の書籍を集めていた篠原が、おずおずと声を掛けてきた。

「どうしたの……？何かあったの？」

篠原のその台詞で、僕は自分がかなり厳しい表情を浮かべていたのを自覚する。なんとか自嘲気味とはいえ笑みを取り戻すと、僕は縮刷版を掲げてみせた。

「これどうすんの？運ぶの手伝うけど」

「あ、そう？ありがと。ロビーまでお願いして良いかな。閲覧希望なんだけどもう凄い数で、結構待たせちゃってると思うから」

閲覧希望……と言う事は、篠原が調べている訳ではないと言うことか……では果たして誰が？

内心の疑問を表に出さぬよう、僕は努めて平静を装う。

「良いよー。大体、こんだけの数を一気に持とうとすんのが間違ってんだよ」

「普通ならカートを使うんだけど、棚卸しで使っちゃってるから、数が足らないんだ。二階の倉庫に保管してた本もあったし、何度も行くの面倒だったし」

「急がば回れっつーだろうが。怪我したら元も子もねーんだぞ」

「そうだねー、ごめん。今度から気を付ける」

「しかしまースゴイ量だなー。誰だよ、一気にこんなに閲覧したいっつーのは」

軽い口調で、一番知りたい部分を尋ねる。しかし、ぼくはもうこの時点で大体想像はついていた。

「あー彼だよ彼。んーと、名前なんて言ったっけ、あの珍しい名前の、ほら、ウチのクラスの転校生」

「九執……？」
「あぁそうそう、九執くん！」
「……へー、そうなんだ」

視線を床に落としながら、僕はもう一冊、階段脇に転がった本を拾い上げた。タイトルは「日本の呪い～「闇の心性」が生み出す文化とは」と来たもんだ。
どうやら九執には聞いておかなくてはならない事が色々とあるようだった。

＊＊＊

「随分と郷土史に興味があるんだな」

ロビーの受付まで書籍を運び、なにやら興味深げに見つめてくる九執に僕が発したのはそんな台詞だった。
ブレザーの制服を身にまとった九執は、初対面の黒尽くめの印象からすると随分と違和感のある格好で、借り物の衣装を無理やり身につけているような、ちぐはぐさを感じさせる。僕の問い掛けに、九執は（やっぱりわざとらしい）笑顔を浮かべてみせた。

「そりゃね。これから3年間お世話になる村の郷土史ですから。興味は有りますよ」

わざわざ丁寧語で話す九執の口調に、僕は漠然とした不安感を覚える。借り物の衣装に、作り物の態度、作り物の台詞。なんつーか、一から十まで、こいつの態度は嘘臭い。
僕は、カウンターに置かれた書籍類をパラパラとめくりながら、一時貸出手続きをしている篠原の手元を覗き込む。

「それにしちゃぁ、ジャンルが随分と偏ってるような気がするけどな」

「……あぁ、それですか？すいません、確かにちょっと不謹慎だったのかもですね。でも2年前からずっと興味はあったんですよ、あの事件に関しては」

「興味……？」

「そりゃそうでしょう？アレだけの大事件ですよ。中学生の時の僕だって、毎日毎日ニュースや特番で目にしていたぐらいなんです。それなのに、犯人は捕まらず、真相は不明で、いつの間にかパッタリと報道すらされなくなった。気にならない訳が無いです」

「それを今更調べてどうするつもりなんだ？もう事件は終わったんだよ」

「……本当に、そう思ってるんですか？」

不意に、周囲の空気の温度が一気に下がった気がした。

九執と最初にあった時に感じたあの感覚。時間が伸張され、ゆっくりと流れだし、周りの空気が重苦しく粘度を持って体にまとわりつくような感覚。いわゆる一つの、嫌な予感。

熱心にモニターとキーボードに向かう篠原もピクリ、と反応を見せて、こちらの会話はチェックしているのだと言う事を僕に悟らせた。

「どう言う……事だ？」

「えーっと、そのまんまの意味です。犯人が捕まってない以上、事件は終わってません。そして僕は今こうして事件の舞台となった村に居る。だったら、色々と知っておくに越したことはないでしょう？」

「お前は……それを調べに来たのか？」

重苦しい口調でそう告げる僕に、九執は心底意外そうな表情を浮

かべた。

「は？いや、僕は喘息持ちで市内に通えないんでここに転校してきただけですよ。どうせ来たんなら、以前から興味があったし調べておこうと思って。どうしたんです？なんか変ですよ柏木くん」

さらっと僕の名前を口にする九執。僕が九執に自己紹介をした覚えはない。初音から聞きでもしたのだろうか。まぁ、クラスメイトなんだし知っていても一向に不思議はないのだが。

「いや、なんつーか、一応村の半年先輩として一つ忠告しておいてやろうと思ってさ。俺も入学した当時は色々と気にはしてたんだけど、この村の人達はあの事件のことにあんまり触れられたがらねーんだよ。まぁ、そりゃそうだとは思うんだけどさ。だから興味本位でアレコレ調べてても、あんまり良い反応返ってこねーんじゃねーかって事」

「まぁ、僕もそこまでデリカシーが無い訳じゃないですけどね。流石に村の人達に聞いて回ったりはしませんよ、もちろん。あぁでも外から来た人に聞いてみたかったりはするな。それなら問題ないんでしょ？」

「そーゆー意味じゃなくて、この村の中に居る限りあの事件については一切触れない方が良いってことだよ」

「ふむ……と言う事は、柏木くんはある程度は事件について知っている、と言う事ですか？」

「なんでそうなるんだよ！？」

「だって……斎宮さんたちフラタニティメンバーとしては、関屋くん共々外から来た人じゃないですか」

僕は確信する。九執の情報源は間違いなく初音だ。初音が九執から色々と聞き出した（であろう）のと同じように、九執も初音から

アレコレ聞き出したに違いない。まぁ、確かに隠し立てするような情報ではないしな。

そもそも、九執に対して忠告めいたことを口にしているが、僕自身がほとんど全くと言っても良いほど2年前の事件については知らないのだ。入学当時から、この村があの事件の舞台だって事ぐらいは理解していたが、それに興味をもつ前にいろんなことに巻き込まれて、気がついたらもはや葵たちの身内になっていた。そうなってしまうと逆に突っ込んだ話を聞く訳にも行かず、ぼんやりとイメージ的なものを抱えながらも、それをはっきりとはさせずに今に至ると言う訳だ。

僕があの事件、「水無瀬村連続殺人事件」について知っている数少ない事と言えば、村人の内15人が次々と殺され、犯人と目される人物はまだ捕まっていないと言う事。そして、事件の被害者に葵の両親、そして姉が含まれていると言う事……たったそれだけだ。

僕は2年前の事を思い出す。

15人もの人間が連続で殺害されたというのは、ここ半世紀では未曾有の大事件で、人数こそ津山三十人殺しの半分に及ばないものの社会に与えた影響はそりゃもう、凄まじいものだった。

マスコミは連日センセーショナルに取り上げ、警察は威信を賭けて大規模な捜査を行い、村は封鎖され、長野一体は戒厳態勢に近い状態に置かれた。一方で日本各地の無関係な人々はお祭り騒ぎとして出歯亀精神で事態を見守り、ネットでは犯人探しに熱狂し、中にはカメラ片手に村まで押しかけた奴らも居たとかなんとか。案の定、警察につまみ出されてこっぴどく怒られたみたいだが、そうすると今度は先走った連中のバッシングが始まり、お約束のように犯人を名乗る人物が現れ、狂言であったと判明する頃には自体はますます輻輳化し、混乱は拡大の一途を辿った。

そうして、事件発生から2週間後、事態はクライマックスである

町役場炎上を迎える。当時はボロい木造だった町役場が何者か（犯人に違いないが）によって放火され、鎮火にあたる消防署員や救急隊員の前に日本刀を持った一人の少年が現れ、村を呪う言葉を吐いて山の方に姿を消したのだ。

大掛かりな山狩りが行われたものの少年の姿は見つからず、死体も発見されず、痕跡さえ見つからなかった。日本中のニワカ探偵が推理合戦を繰り広げ、何がしかの呪いの儀式だっただの、政府の陰謀だの、受験戦争のストレスだの、イジメ問題だのと言った理屈が蛙鳴蝉噪、百花繚乱したが、どれもこれも決め手には欠き、やがて少年の名前だけが、平成の大犯罪者として都市伝説のように語り継がれることとなった。

すなわち「水無瀬村連続殺人事件」の犯人にして稀代のシリアル・キラー、賢木夏（さかきなつ）と。

――実を言えば、僕自身がそのニワカ探偵の一人であり、ネットを介して事件を面白おかしく消費していた内の一人だった。現代社会の若者（つまりは僕ら）にとって、身の回りで起きることだけがリアルであり、モニターの向こうで行われる全ての出来事はフィクションに過ぎない。そりゃもちろん、モニターの向こうにもう一つの現実を看過する奴だって居るに違いないが、僕たちが接することができる情報量と言うのは、昔と違ってそれはもう膨大で、いちいちまともに取り合っていたのではすぐにそのスピードに置いてきぼりにされてしまう。

情報は楽しんで消費し、受け流すもの。情報の確度ではなく、それがどれだけ楽しめるかと言う事が重要。お祭り騒ぎは大きければ大きいほど楽しく、そこに参加して無責任にはしゃいでも、責任の所在は何万、何十万、何百万と言う「匿名」にまぎれて希薄化される。だから安全。安全でなければ、手など出さない。

僕たちのそういう態度を批判することなど、誰にも出来ないはずだ。それは無責任な大人が社会に対して行っていることと全く同じ

であり、その大人たちが創り上げた「失敗したらもうリセットもコンティニューもリトライも出来ない」この社会においては、僕たちは万が一にも失敗することが許されないのだ。だから、一番安全なところで、皆と合わせて上手く行動する。それが僕らのたったひとつの冴えたやりかたって訳だ。

しかしそれでいて、僕らは自分たちの周りはリアルだから大切にする。ＴＶやＰＣや携帯のモニターの向こうにあるフィクションとは異なり、実感があるものだから、余計に大切にする。だから、僕は水無瀬高校に入学して、葵たちと知りあってからは2年前の事件には触れないことにした。

僕たちは、２ｃｈやブログやｍｉｘｉやＴｗｉｔｔｅｒで他人を誹謗中傷するようなことは平気で言えても、面と向かっては口にはしない。それは勇気がなかったり臆病だからじゃない。目の前の人間はリアルで、自分にとって大切な現実の一つだから、言わないのだ。自分にとっての物語が、物語では無くなり現実になった時、僕たちはようやく自分の身体性の延長でそこに触れ得る。そうして、それを大切にする。

そういう感覚と言うのは、やっぱり、大人には理解出来ないのかもしれない。現実の延長としてネットが有り、現実の拡張として物語があることが自然だった世代の連中には、物語やネットがごく当たり前のように「別のもの」として現実とは違うところに存在している僕たちの気持ちは理解出来ないのかもしれない。

大人たちはネットを作った。だけど、僕たちはネットと現実両方に跨って生きている。

そういう意味で、九執は多分、僕たちとは違う人種なのだ。現実にいながらにしてそれを物語化し、それを楽しめる人種。自分の周りにあるものも仮想化して鳥瞰する人物。

そうでなければ、僕に向かってこんなことは言わない。

だから、僕は大きくため息を付いて見せ、九執を睨みつけた。

「良いか、この村はちっせぇけど今はそれなりに平和にやってるし、これからもう一回発展することだってできるかもしんねぇ。村の人達は皆そうしようと思って頑張ってんだよ。そんなところに水差して覚ますようなことはすんじゃねぇっつってんだよ」

「へー……」

と言うフザケた台詞が、九執の返事だった。

「そうかー、そうなんだ。いや、すいません。そこまでデリケートだとは思ってなかったもので。いや思ってたけど割り切ってたのかな。でも柏木くんがそう言うならそうしますよ。色々と嗅ぎ回ったりもしないですし、柏木くんの邪魔もしません。でも本を借りて読むぐらいのことはしても問題ないでしょう？だって、本は既にここにあるんですから」

「……まぁ、それぐらいはな」

確かに、いくらなんでも図書館の蔵書を読むな、等と言う事は僕には出来ない。もしそうなら、閲覧など出来ない様にしておけば良いのだ。知られたくはない、でも集めて置かなくてはいけない資料なんて言うものがあるのなら、それは目につかない場所に隠すか、若しくはそれがそうと分からないようにしておけば良い。

でも、そうしていない資料と言うのは、すべからく誰かに読まれるためにこそ存在する。だから、九執がこの本たちを読むと言う事は、誰にも邪魔出来ない。

「まぁ、分かったんなら良いや。とにかく、注意しろってこった」

そう言い残して、僕はロビーを離れるべくカウンターから体を起こした。聞きたいことは聞けたし、伝えたい事は伝えた。もうこれ以上九執と一緒に居るのは、息苦しい気分になっていたのだ。

「じゃーまたな」と篠原に声を掛け、「あ、色々ありがと！」と返事をもらってから九執に背を向けて歩き出した僕を、九執の台詞が追いかけてきた。

「あ、柏木くん、一つだけ聞きたいことがあるんですけど」

「あ？」

首だけ反転させて、僕は九執を見る。篠原に背を向け、カウンターを背負いながら、九執は僕にこれまでと全く違う表情を見せつけていた。

左右のバランスが崩れた歪んだ口元に、全く笑っていない目。九執が時折見せる、世界全てを嘲笑しているようなその笑顔。

「今年の紅葉を舞うのは、斎宮家の三女って事で良いんですか？」

「……」

僕は返事が出来なかった。それがどうした？誰から聞いた？初音か。まぁ、それもまた隠すほどの情報ではない。しかし、なんでこのタイミングで九執がそのことを口にする？

「……さーな」

結局、僕はそんな曖昧な台詞を返せただけだった。

「そうですか……まぁ良いです。ただ……」九執の口元の左端が、より一生醜く歪む。

「柏木くんも、紅葉伝説についてはちゃんと知っておいた方が良いですよ」

……こんどこそ僕は返事をせず、九執に背を向けてその場を後に

した。
何が言いてぇんだ、こいつ？

【ＡＣＴ０３】その２へ続く

【ＡＣＴ０３】インビジブル・カレッジ～その２（前書き）

（承前）

【ACT03】インビジブル・カレッジ～その2

－17－

鬼娘　‥ほほー、コダマくんもようやく私の偉大さに気がついたか
コダマ　‥いや、なんでだよ
鬼娘　‥鬼娘について知りたいって事は、この私の魅力にようやく気が付いたんじゃないの？
コダマ　‥んな訳ねーだろ！
コダマ　‥つーか、そもそも鬼娘じゃねぇ、鬼女だ！
ひょうすべ　‥娘じゃなくて女が好きとは意外だな
河童　‥コダマ、お前ロリ属性だろ？ロリ属性だっつってたよな？？
コダマ　‥言ってねぇよ！！
鬼娘　‥いや～、お姉さん困っちゃうなー
サトリ　‥きぃにゃん、確か中学生だって言ってへんかったっけ？
鬼娘　‥あ、いや、気持ちは中学生にょろ＾＾
コダマ　‥そういう話をしてるんでもねぇ！！
ひょうすべ　‥娘と女のどっちが好きかという以上の重要案件など無い
河童　‥うむ、ロリは至上至高だ
サトリ　‥かっくんは真性のド変態やからな
鬼娘　‥キモいー！ロリキモいー！！
コダマ　‥……駄目だこいつら……早く何とかしないと……

＊＊＊

ため息を付き、キーボードから手を離して、僕は大きくため息を付いた。

そもそもこいつらに何かを相談しようと思ったのが何かの間違いだったのだ。どんなことでも冗談とネタにくるんで放逐してしまうのがこいつらの流儀で、それはもう重々承知していたのだが、いざ真面目に相談事を持ちかけようと思ったら、役に立たないことこの上ない。

僕は、ＰＣモニターの中でワイワイとロリは何歳からがロリなのかという事を熱く議論する、妖怪のアバターを眺めながら腕を伸ばして伸びをした。

僕がこの「妖怪チャット」に出入するようになったのは、中学２年生の頃からだから、かれこれ２年になる。チャット空間としては別になんてことはない、妖怪のアバターを使ってチャットするというそれだけの代物なのだが、利用者が大体中学生～高校生で、尚且つお互いのプライバシーには踏み込まない（自分から言うのはＯＫ）というのが不文律で、通底するユルーい雰囲気もあって、なんだかんだで常連として居座っている感じである。

基本的なトーク内容はアニメとか漫画とか小説（主にラノベ）で、そういう意味ではオタク系のチャットといえるが、オタクが揃っているだけ有って時たまやたらと深い会話に展開して付いていけない事なんかもあったりはする。まぁ、とは言っても中高生が交わす内容だからその真偽の程は全くもって定かではなく、難しい話をして居る俺たちカッコイーぐらいの感じである。

妖怪チャットというぐらいだから、妖怪や呪い・民間風習・民俗・風俗に詳しい奴も多いが、気が向かなければ雑学の披露なんてしてくれない。

鬼娘　：コダマくん、生きてるー？
コダマ　：おー
鬼娘　：ならいいんだー

コダマ　‥なんだそりゃ

しばらくＲＯＭってたからか、鬼娘が僕に声をかけてきた。多分、気を使ってくれたのだろう。鬼娘は自称中学生のお嬢様、らしいのだが、仲間内ではそう名乗ってるだけのネカマだと言う扱いになっている。まぁ、本当の性別なんて絶対に分からないし、本人が女の子だと言いはるのであれば、あえて問いただして幻想を壊すこともあるまい、と言った感じだ。

正直、図書館の棚卸をサボったは良いものの、別段することもなくコンピ研に来て始めたチャットである。本気でこいつらから何がしかの情報を得ようと思ってた訳ではないが、それでも、僕は九執が発したセリフが、ずいぶんと脳裏に引っかかっていた。

『紅葉伝説についてもっと知っておいた方が良い』

何故に？いや、九執が言いたいことぐらいは分かる。自分が通っている学校の、３年間お世話になる村の伝説ぐらいは知っておいた方が、村の人達とやっていく上で色々と都合が良いことぐらいは理解出来る。村で信奉される「紅葉さま」の事を良くも知らないのに、村の人達の気持ちについて知ったような口を叩くのが僭越だって事も、分かる。

しかし、僕は民話とか伝説とか昔話の類にそれほど興味がある人間ではなく、そもそもこの村にだって来たくて来た訳ではないのだ。むしろ、入学当時は意識して村のことを知ろうとしなかったふしもある。

ようやく村に馴染み始めた頃には、葵の命ずるがままに駆けずり回る日々で、村のことについてアレコレと調べる余裕も無かったのだ。そういう意味では、たしかに僕は普通の学生よりもこの村については知らないことも多い。

……つーか、なんで九執は僕が紅葉伝説についてよく知らないこ

とを知ってるんだ??いや、当然ながら初音が話したからだろうが。
なんだか、俺が九執の事を知る前に、逆に僕のことをよく知られているような気がする。別に話して不味い事ではないだろうが、あんまりにも自分のことについて知られすぎていると言うのは、気持ちの良いことではない。今度、初音には注意しとかなきゃいけないな。まぁ、なんと言って注意したものだかは全くもって分からないのだが。

あるいは、僕が九執に感じているこの妙な違和感は、僕がアイツのことをなんにも知らないのに、あいつが知ったような態度を取ってくることが原因なのかもしれない。なんだかんだで、初音も初日に仕入れた情報以上の事は聞き出せていないようだし。

喘息持ちで、長野に転勤になった父親について転校してきた。それが今のところ、僕が知る九執の全てである。今日、水無瀬村と2年前の事件に興味があるらしい、ということは分かったが、それだけでは僕が感じているアイツへの違和感を説明し切れない。

まったく、なんでこう気になるんだろう。恋か?これが噂に聞く恋って奴なのか??（ねぇよ）

チャットでの会話に適当に合わせながら、そんなどうでも良いことをつらつらと考えていると、チャットのシステムメッセージが点灯した。

ｓｙｓｔｅｍ　：猫娘さんが入室しました
鬼娘　：あ、くらにゃんだー♪
猫娘　：おーっす
ひょうすべ　：こんちゃー
さとり　：今日は遅かったじゃん
猫娘　：こんちゃー＞ひょんちゃん
猫娘　：小テストだったのですにゃにゃにゃ＞さとりん
河童　：うーっす
猫娘　：うーっすｗ＞Ｋくん

コダマ　：よぉ
猫娘　：相変わらずテンション低いにゃw＞こだまん
ヒャクメ　：まいどー
うわん　：こんにちはー
猫娘　：まいどー＾＾＞ヒャクメ姐さん
猫娘　：こんにちは！＞うわんさん
のっぺらぼう：どもー
猫娘　：おー、久しぶりにゃー＞のっぺくん

たちまち、雪崩のように挨拶でログが埋まる。僕が入室擦る前からずっとROMってたような連中まで、ことごとく挨拶を打ち込んでいる。なんだよ、俺の時には挨拶すらしやがらなかった癖に。しかしまぁ、来たのがくらにゃんなら致し方あるまい。

基本的にここは成り切りチャットなので、個人名はネームに表示されない。しかし、アバター自体はフェイスやカラーをアレンジできるので、同じ妖怪名でも、常連かそうでないかは、一目瞭然である。そうして、今入ってきたピンクカラーの猫娘は、ここのアイドル的存在である「くらにゃん」という奴だった。

くらにゃんは一応女子高生で、コッチの方は自称にとどまらず、たまに開かれる（もちろん僕は行った事が無い）オフ会なんかで会った奴に言わせると、とびっきりの美少女らしい。まぁ、それを口にしていたのが誰を見ても可愛いとしか言わない奴なので評価を差っ引くとしても、実際に女子高生であることは間違いないようだ。

ただ、くらにゃんがここのアイドルなのは、名実ともに立証されている女子高生だからという訳ではない。誰に対しても親切な態度を崩さず、新身になって相談にのり、けして誰も誹謗中傷しない人となりこそが、くらにゃんをアイドルたらしめていると言える。

そしてその上、くらにゃんのタイピングスピードは超人の域に達しており、常に4人以上の相手とチャットしてもラグを見せないという、聖徳太子に匹敵する同時会話能力を持っているのである。ど

んなに大勢を相手にしても通常スピードと変わらず会話をする、その多方面対応ぶりが、くらにゃんの真の才覚と言っても良いだろう。それはまぁ、雪崩のような挨拶にすべからく返事を返しているところからも見て取れると思うが。

どんな会話も如才なくこなし（下ネタさえもだ）、更には知らないことなど無いのではないかと思われる博識ぶりをも発揮する。これは、くらにゃんに言わせると「チャットしながら調べているだけ」という事らしいが、そうなるとこいつは複数人と通常スピードでチャットしながら同時にネット検索もこなしているという事になり、それはそれで常人の良くするところではない。

そして、俺はこいつが来るのを期待していたのだ。

俺のリアルの知り合いとネットの知り合い全てを含めても、くらにゃんの情報検索能力はズバ抜けている。今知らないことでも質問した１０秒後には把握しており、一晩時間を与えればエキスパートに近いレベルにまで変貌する。まさに、ネット時代の集合知の申し子のような奴なのである。

……正確に言うと情報検索能力と言う点では更に桁違いな人間が一人知り合いに居るは居るのだが、人間性に難が有るためにあまり頼りたくないのだ。

まぁ、紅葉伝説程度についてなら、くらにゃんに聞けばあっという間に把握出来るに違いない。

僕は入ってくるなり３つぐらいの話題に同時に巻き込まれて、それでも難なく会話についていってるくらにゃんのアバターを左クリックした。ニコニコと笑う猫娘からコマンドがポップアップし、僕は「ささやき」を選択する。まぁ、よくある１ｔｏ１の秘匿回線だ。

コダマ　：忙しいとこすまんが、ちょっと聞きたいことがあんだけど

猫娘　：ん？こだまんが内緒話とは珍しいにゃ

赤で表示されるささやき会話に、即座に猫娘からレス。猫娘だからってわざわざ語尾を「にゃ」にする必要はないと思うのだが、まぁ、それは個人のキャラ付けだからとやかくは言うまい。

コダマ　：いや、ちょっと紅葉伝説について調べててさ。色々教えて欲しいんだけど

猫娘　：おやおやおや、こだまんそーゆーのに興味が無いと思ってたにゃ

コダマ　：まぁ、色々あってなー

猫娘　：人生色々にゃー。で、何を知りたいにゃ？

コダマ　：んーまずは概略からかな

猫娘　：概略かー。うーんと紅葉伝説って言うのは能にもなった平安時代の有名な鬼のお話にゃ

猫娘　：昔々会津に住んでいた笹丸と菊代って言う夫婦がいて、中々子供ができなくて悩んでたにゃ

猫娘　：子宝を授かるために第六天魔王にお祈りして、可愛い赤ちゃんを授かるにゃ

猫娘　：その子の名前が呉葉（くれは）って言って後の紅葉にゃ。

猫娘　：そういう意味では「もみじ」じゃなくて「くれは」って読む方が正解かもしれないけどにゃ

猫娘　：ちなみに、第六天魔王って言うのは魔王って言うぐらいだからオドロオドロしいけど、他化自在天とも言って立派な天部の一員で、悪者だったりもするけど一応仏天の一人ではあるにゃ

猫娘　：時代は下がって、織田信長が仏教を弾圧するときに名乗ったりもしてるので、仏門の敵みたいな扱いになっちゃってるけど、実際には色々と複雑なんだにゃ。まぁ、それはさておいて

猫娘　：聞いてる??

コダマ　：聞いてる聞いてる。後で全部ログをコピペするから俺のことは気にせずどんどん続けてくれ

猫娘　：分かったにゃ

猫娘　：さて、紅葉は大きくなるに連れてずいぶんと美人さんになって、書道も上手ければ琴も嗜み、良いとこのお嬢さんとして有名な小町さんになるにゃ

猫娘　：それに目をつけた会津のお金持ちの息子に求婚を迫られて、自分の身代わりの人形をこしらえてそれを嫁に出すにゃ

猫娘　：コピーロボットみたいに鼻を押したらソックリさんがうにょにょにょ～って出てきた訳にゃ

猫娘　：その身代わりをドラ息子に押し付けてエロいことされ放題になっている隙に、呉葉一家は京に逃げ延びるにゃ

猫娘　：京にやってきてドラ息子の追跡を恐れた訳じゃないだろうけど呉葉は名を紅葉に変えるにゃ

猫娘　：そうして、最初は琴を教えたり近所の子供達に読み書きを教えたりしていたんだけれど、ある日通りかかった藤原の経基の耳に琴の音が届き、腰元として召抱えられるにゃ

猫娘　：まぁ、当然ながら腰元名義で召抱えられたけれども、経基のエロオヤジの目的は体だったのであっという間に食べられちゃってお局になるにゃ

猫娘　：そんでもって間が悪いと言うかなんというか、経基の子供まで妊娠しちゃったからさぁ大変

猫娘　：正室の藤原敏有とやらの娘に目をつけられて、正室が病気になった時に呪いを掛けたって言う嫌疑をかけられて９５６年に水無瀬に流されてしまうにゃ

猫娘　：まぁそこがご存知こだまんの今居る村な訳なんだにゃ。ちなみにこの時まだ紅葉は１９歳にゃ

猫娘　：１８歳の女の子に手を出して孕ませた挙句に流罪にするとか、経基のエロオヤジは万死に値するにゃ！！そう思わないかにゃ！？

コダマ　：思う思う。思うから続けて

猫娘　：まぁそんなこんなで水無瀬に流された紅葉は経基の子供を妊娠してたって言うこともあるし、そもそもの気立てもあるか

ら、村の人達に読み書きとか教えたり京の風習を教えたり、村のためにアレコレ尽くしてあっという間に人気ものになるにゃ

猫娘　：そうこうしているうちに村の人に慕われて人気急上昇の紅葉が流罪になった事を恨んで反逆する事を京都の連中が恐れて、旅人を襲う盗賊団の頭と名指しして鬼女として狩り立てるにゃ

猫娘　：それまでの流れを見ても、紅葉が逆恨みして盗賊団なんて組織して旅人を襲うことなんてありえないにゃ

猫娘　：でも、なんだかんだで紅葉の周りには落ち武者とかが集まって一団を形成してたことも間違いないにゃ

猫娘　：多分紅葉は良い人だから、困っている人を見ると助けないと気が済まなかったんだにゃ

猫娘　：その落ち武者の中には平将門の元家臣なんかも居たりして、それでなんだかんだで反乱分子と看做されるようになっちゃったんだにゃ

猫娘　：やがて京から平維茂と言う武将が派遣されて、八幡大菩薩から神剣を授かったりだの何だの嘘くさい説法逸話が挿入された挙句、紅葉狩りの宴に紛れ込んだ維茂に紅葉は討たれてしまうにゃ

猫娘　：わざわざ宴席にまで招いてあげたのにそれで討つなんて平維茂も全くもって酷い男にゃ！！

コダマ：うんうんそーだねー

猫娘　：紅葉が討たれたのが９６９年、わずか３３歳の儚い命だったにゃ

猫娘　：と言うのが大体の概略にゃ

長い。しかし早い。くらにゃんがこれだけの文章を打つのに要した時間が、おおよそ3分である。１文ごとがまるで最初から用意されていたかのようなスピードで迸り出てくる。しかも、その間も表のチャットは続けているのだ。ありえねぇ。

というか、これだけの文章をコピペしているようには見えないから、つまりはこれはくらにゃんの脳内から出てきた文章という事に

なる。まったくもってありえねぇ、どんだけ詳しいんだよこいつ。

コダマ　：よくもまぁそんだけ知ってるな

とりあえず真っ先に出てきた感想がそれだったので、礼より先に僕はそう打ち込んだ。

猫娘　　：基本知識にゃー。こんなの、ｗｉｋｉでも見れば一発で分かるにゃ。ってゆーか、こだまんもたまには自分でウィキったりググったりして調べる癖をつけた方が良いにゃ

コダマ　：いやー、自分で調べるよりくらにゃんに聞いた方がよく分かるから好きだ

猫娘　　：にゃはは、そう言われると嬉しいにゃ

ニッコリと微笑む猫娘のアバター。喜怒哀楽の４種類ぐらいは、アバターでも表現出来るのだ。ささやき会話での表情なので、僕にしか見えていないだろうが。

実際のところ、くらにゃんを待っている間に僕だって自分で調べたりはしてみたのだ。ｗｉｋｉｐｅｄｉａを眺めてみたぐらいだが。確かにくらにゃんの話はｗｉｋｉｐｅｄｉａに書いてあったのとそう差はないが、幾分かは詳しかったように思える。それに、正しいのだろうがあまり面白みのないｗｉｋｉｐｅｄｉａの記述に比べて、私情が入っている分、くらにゃんの説明の方が面白かった。

村の人達に「紅葉さま」が慕われるのを目の当たりにしている僕にとっては、「流された恨みで荒れて鬼と化し、盗賊団を率いて旅人を襲った」というｗｉｋｉｐｅｄｉａの記述より、くらにゃんの説明の方がしっくりと来た。

猫娘　　：それにしても、なんで今更紅葉伝説について調べてるにゃ？

コダマ　：んーまぁようやくそういうのに興味が出てきたっつーの？

僕が水無瀬高校に入学していると言うのは、みんな周知の事実である。そもそも、２年前の事件の時にこの妖怪チャットで大はしゃぎしていたのが入り浸り始めで、その事件の舞台となった村の高校に入学するという事は、隠しておける事ではなかったのだ。まぁ、入学が決まったときに愚痴まじりに自分から言い広めたんだけども。

猫娘　：それならお友達に聞いた方が早いんじゃないかにゃ？サークルの会長さん、紅葉神社の巫女さんにゃんでしょ？

コダマ　：そーなんだけど、なんかあんまり逆にそういうの教えてくれない感じでさー

猫娘　：そういうもんかにゃー？

コダマ　：ほら２年前の事件もあるしさ、あんまり村のことをアレコレ聞いてまわるのはお行儀が良いことじゃないっつー感じなんだよ

猫娘　：まぁ確かにそうかも知れないにゃー

くらにゃんと話しながら、僕は思い出していた。２年前の事件をみんなであだこうだ話していた時、くらにゃんもずいぶんと熱心に事件について調べていた。こいつならば、あるいは表沙汰になっていない情報なんかも知っているかもしれない。

コダマ　：ついでと言っちゃなんなんだけどさー、２年前の事件についてのまとめサイトとか、そういうの知らない？

猫娘　：にゃ？こだまん、アレに関してはあんまり触れないようにしてるんじゃなかった？

コダマ　：まぁ、色々とありましてねー

猫娘　：んー……まとめサイトとかもあるけど、結構酷い事い

っぱい書かれてるしなー……こだまん結構マジで知りたい感じ？
コダマ　：ん？って言うと？
猫娘　：いや興味本位じゃなくて、極力正確な情報をきちんと整理された状態でより多く手に入れたい感じなの？
コダマ　：そりゃ、正確な情報がきちんと整理されてるに越したことはねーけど
猫娘　：そっかぁ……

珍しくくらにゃんにしてはとても珍しく、次のレスまで3秒以上の間があいた。

猫娘　：うん分かった。良いよ。他ならぬこだまんのお願いだもんね。用意してみる
コダマ　：いや、別にそこまで気合入れなくても良いっつーかなんつーか
猫娘　：いやいや、こだまんのお願いを無碍にしたらバチが当たる気がするしw出来る限り頑張ってみるからちょこっと時間もらっても良い？
コダマ　：そりゃもちろん
猫娘　：じゃぁファイルのやりとりとか含めて、連絡用のメアドを教えとくにゃ。こだまんの連絡先もコッチに一回メール送っておいて欲しいにゃ

そのレスに引き続き、半角ローマ字と数字が混じった10桁のランダムとしか思えない文字列の後に@ｇｍａｉｌ．ｃｏｍで終わるメールアドレスが表示される。Ｇｍａｉｌという事は捨てメアドの一つだろうが、それにしても分かりにくいメールアドレスである。

コダマ　：ありがとー。後でコッチからメール送っとくわー
猫娘　：よろしくお願いしますにゃ！

猫娘とのささやき会話は、それにて終了した。くらにゃんとの会話に専念していた為、表ではほとんどＲＯＭっていたので、落ちる挨拶をして、僕はチャットルームを後にする。

まぁくらにゃんが調べ物を引き受けてくれた以上、僕がわざわざ自分で調べることはもはや何もない。後は、くらにゃんからの連絡を間てば良いだけだ。

約束通り、一番プライベートなメアドからくらにゃんに挨拶メールを送って、ネットの履歴を全削除した後で、僕はＰＣをシャットダウンした。

＊＊＊

コンピ研から出てみると、サークル棟の廊下は西日を受けてオレンジ色に輝いていた。

眼下のグラウンドではまだサッカー部が練習に励んでおり、時折白熱した声が聞こえてくる。廊下の窓辺には学生が鈴なり、各サークルの部室にはひっきりなしに生徒が出入し、相変わらず水無瀬高校の放課後は熱気に満ち溢れていた。

ふと、校門から国道へと続く坂道に目をやると、スーツを身に纏った霧島さんが、ゆっくりと下っていくのが見えた。なんだかんだでこんな時間まで学内で打ち合わせやら折衝やらをしていたらしい。もしくは、一度役場とかに顔を出した後でもう一度戻ってきたのかもしれないが。

放課後に葵と話をする約束をしていたので、おそらくこれから神社に向かうのだろう。追いかけて、久しぶりに雑談でもしようかと思ったが、学校から神社まではすぐ近くなので、僕が追いつくよりも先に霧島さんが葵の言えに着く方が早いだろう。

「ま、良いか」

僕は両手を上げて関節をボキボキ言わせながら大きく伸びをすると、図書館の棚卸に戻るべく、ゆっくりと廊下を歩き出した。

－１８－

「転校生が、自分の入学した村のことをアレコレと調べる……」

パチパチと音を立てて爆ぜる焚き火を見やり、関屋は手に持った謎の串肉にかぶりついた。

「別に、何らおかしな行動とは思えんが」

「まぁ、そうなんだけどさぁ……」

棚卸を終え、寮に戻ってきてみると、いつも通りの宴会風景が僕を待ち構えていた。部活が終わって一足先に戻ってきていた関屋の横に陣取り、相変わらず原料の分からぬ謎の串焼を頬張りながら、あれやこれやと雑談していたところである。

とりあえず図書館での出来事を語る僕に関屋が返した返事が上記の通りの気の無い代物で、僕も明確に反論することもできなかったから、溜息をつくのが関の山である。

「なんでそんなにこだわるんだよお前」

「なんだろーねー……自分でもよくわかんねーんだけど、俺の中で何かアイツのことが引っかかるんだよなぁ……」

「恋か」

「殺すぞ」

「愛か」

「どう違うんだよ」

「いや、本気なのかと」

「良いから焚き火に顔突っ込んで焼けて死ね」

相変わらずの生産性が皆無な会話である。

「しかしまぁアレだよ。確かにアイツの言うとおり、俺がこの村について殆どなんも知らねーっつーのも確かなんで、ちょいとこの際調べてみても良いかもしんねーなーとは思ってる訳ですよ」

「斎宮たちはあんまり喜ばねぇと思うがな」

「そりゃ喜びはしねーだろーけどさ。知らない事だらけっつーのもやりにくいじゃん」

「知らない方が良いこともあるけどな」

「お、関屋さん大人っすねー。余裕のある態度ってワケですか？かっこいいなー、憧れちゃうなー」

「お前が余計なことに首突っ込みすぎんだよ。どんだけ痛い目見りゃ気が済むんだよ」

「痛い目見たことなんてねぇよ」

「お前、本気でそう思ってそうだから始末が悪いよな……」

「ちょっと待て、マジで心当たりとかないんですけど!?」

「あー、そうだろうよ、そうだと思ったよ。死ね」

「あ!?てめぇ喧嘩売ってんのかコラ!!?」

「お前喧嘩売っても代金支払わねぇじゃん。返せよ借金。早く」

「肉うめー」

「うめぇな」

まぁ、確かに、関屋の言う通り、九執に示唆されてアレコレ調べまわると言うのも、操縦されているようでどこかしか釈然としない。しかし、近代戦というものはことごとく情報戦なのだ。情報を握ったものが天下を制す。これまで葵の奴に良いようにしてやられていたのも、僕がアイツの弱み的なものを一切握っていなかったからだと言える。

まぁ、切っ掛けは九執だったとしても、この機会を上手く利用して、葵に対して上位に立てる情報を入手できれば、この僕の逆転大勝利という事になる。

「そう言えば……」

と、プラスチックの器に入った謎汁を飲んでいた関屋が、焚き火の方を見据えたままで口を開いた。

「今日、東条を見たか？」
「教室に居たじゃねぇか。いくら影が薄いとは言え見落とすとかお前相当ひどい奴だな」
「違う。放課後」
「は？知らねぇよ。アイツのサークル何かしらねぇし」
「ふぅん……」
「なんだよ、気持ち悪いな」
「いや、俺も見てないからさ」
「はぁ……？」

思わせぶりな関屋の態度。いや、関屋の場合思わせぶりなだけで実際には何も無いことも多々あるので、一概には言えないが。
しかし、一抹の不安が脳裏に浮かび、僕は関屋を向き直る。

「ひょっとして、アホどもがまた引掛けにでも来たっていうのか？」
「いや、多分それはない」
「なんで断言できんだよ。見てねぇんだろうが」
「国吉が寮まで送ったって言ってたからな」
「委員長が面倒見てるんなら問題ねぇじゃねぇか。つーか、割れてんじゃん、行動」
「うん、だからお前が見たのかなーと思って」

「だから見てねぇよ」

分かってみればなんて事はない。委員長が寮まで送り届けたみたいだけどどっかで遭遇した？という以上の意味はないセリフだったようだ。全くもって、深読みするだけ無駄である。

「じゃぁ、別に今日は何も無かった訳だ」
「いや、色々有ったって今話してんじゃねぇかよ。階段大転落とか転校生との遭遇とか」
「あーそういやそうだったな」
「聞いてなかったのかよ！！？」

僕は時々、こいつが本当に友達なのか疑問に思うことがある。僕の周りの連中は、どうしてこうも薄情な奴ばかりなのだろうか？（初音を除く）

僕は食い終わった串を焚き火に投下すると、立ち上がって関屋を見下ろした。

「ジュース買いに行くけど、なんか要る？」
「いらねー」
「ほいよ」

相変わらず焚き火の方を見据えてこちらを見もしない関屋に背を向けて、僕は寮の入口付近の道路脇にある自販機へと向かった。

＊＊＊

舗装されているというだけで、私道とほとんど差が無い農道、護崖壁と田んぼに挟まれたガードレールの合間に、僕らが常用している自動販売機がある。いったいどこのベンダーがこんな山奥まで補

充しに来ているのかはさっぱり分からないが、東京ではついぞ見かけぬチェリオだのガラナコーラだのが充実するラインナップを見るに、ひょっとしたらただの在庫整理のためのベンダーなのかもしれない。

まぁ、ラインナップがどうあれ近隣1キロ圏内にある自動販売機はこれっきりなので、僕たちに選択の余地など無いのだが。

秋の帳だというのに田んぼや山から湧き出てきた蛾や蟻やムカデなどがワンサカ集るこの自動販売機は、虫嫌いの人間にとっては触るのもおぞましいシロモノだろうが、要は馴れである。取り出し口に潜む名状し難いGとかの類にさえ気をつければ、缶の中身が変わる訳ではなし。いや、時々押したボタンとは違うブツが出てくることはあるが。

肉種は分からぬものの、いつも通り塩っ辛い味付けのされた謎串にしてやられ喉が乾いていた僕は、親指と人差指でそっと取り出し口からガラナコーラを取り出すと、その場でプルトップを引き上げた。炭酸が漏れる音がして、ガラナ特有の薬品臭い匂いが鼻腔に飛び込んでくる。

買った早々、自分でもなんでこんな物を選んだのかよく分からないが、もはや取り返しはつかず、少し離れた寮の駐車場から漏れる光と微かに聞こえてくる喧騒を背景に、缶を傾けた。

相変わらず、味もやっぱり薬品臭い。嫌いじゃないけど。

自販機の向こうに広がる一段下がった田園風景と、その先の国道と、国道に装用にして点在する民家を眺めながら、僕はしばし黙ってガラナを啜っていた。

民家に灯る明かりはまばらで、都会と違ってこのあたりの夜は凄まじく早い。その上、節電意識が徹底されてるので、各家に灯る明かりはそれぞれ一部屋ぐらいで、まったくもって寂しい限りである。国道を通る車もなく、鈴虫の音色がごく僅かに聞こえてきて、そう言えば随分と夜は涼しくなってきた。

右手の奥の方を見ると山間の向こうから場違いに明るい光量が立

ち上っているのが見えたが、手前の明かりはまだまだ明かりの落ちぬ学校で、奥の山向こうから立ち上るのは桂東の工場の明かりであろう。

田舎だけ有ってこの水無瀬村は無駄に広く、山向のそのまた向こうまで村内に含んでおり、僕たちの生活圏内は学校を中心とした水無瀬地区のみだが、自転車ですら３０分近くかかる荒倉地区には田んぼの他にも桂東株式会社というコンピュータ関係の工場がある。地元では唯一の工場で、桂東から収められる税金は村の運営においてかなりのパーセンテージを占めるらしい。僕も入学したときに社会見学的なもので行ったことがあるが、まったくこんなド田舎には不釣合なぐらい立派な工場だった。

しばし、涼風に撫でられながらガラナを攻略していると、ＧパンのポケットのｉＰｈｏｎｅが振動した。

……僕がｉＰｈｏｎｅユーザーになってからまだ日が浅いが、どうもこいつを「携帯」と呼ぶのは僕の中で抵抗がある。携帯情報端末、というならその通りだろうけども、携帯電話と言われると、何か違う気がするのだ。

まぁ、どうでも良いが。

左手のガラナを右手に持ち替え、ｉＰｈｏｎｅを引っ張り出してみると、相手は末摘花だった。

『うーっす』

左手でロックを解除して耳元に当てると、相変わらずやる気の感じられない気だるい声が聞こえてくる。

「よー、どしたー」合わせて、僕もゆるーく答える。

『いやー、別に用って訳じゃねーんだけどさー、なんつーの？夜べの語らいって奴ですかぁ？』

「暇なのかよ」

『まーねー』

末摘花の声の後ろはなにやらざわめいており、サブウーファーのモノらしき低周波がドン、ドン、ドンと周期的に響いている所をみると、どうやら末摘花はまたぞろライブハウスかクラブにでも転がり込んでいるようだった。いや、ライブなら電話なんてしてこないだろうから、おそらくクラブの音抜けとかだろう。

「つーか、クラブに出かけて暇っつーのもどうよ」

『あー、分かった？まぁ、そうなんだけどさー、行きつけのファミレスでダベるみてーなもんで、別に目的が有って来てる訳じゃねーしなー』

「ダラダラと夜遊びとは、なかなか不良のテンプレみてーな事やってんじゃん。充実してんねー」

『いやいや、不良にも不良の付き合いって奴が有ってねー。これがまた面倒臭いこともあんのよ？』

「付き合ってないじゃん、電話してきてんじゃん」

『まーねー……』

どうやら、いつも通り特に目的もなく電話してきたらしかった。

わざわざ街まで遊びに出て電話してくるっていう末摘花の行動はよく分からないが、理解出来ないことも無い。集団の中に居れば居るほど孤独を感じる事だってあるし、そういう時に全く別の奴に連絡したくなる事だってある。まぁ、末摘花の場合は孤独というのとは違って、本当に暇なだけなのだろうが。

僕も末摘花に連れられてクラブに行ったことの一度や二度はあるが、バカでかい音量でよく分からん音楽がエンドレスに流れているだけで、何をしたらいいのかもよく分からず、狭っ苦しい通路の一角で延々末摘花とダベっていただけだった。まぁ、プラスチックのコップに入っていた法律的には色々と問題のある液体については、

この際勘弁してもらうとして。
　末摘花も別にクラブが楽しくて通っている訳ではないようだったが、なんとなく、不良たる者クラブで夜遊びでもしないと、というイメージに突き動かされているような感が有った。
　全く、僕らは皆自分の役割を演じるのに必死って感じだ。
　とにかく、末摘花は単に話し相手が欲しいだけで、特に話題も無いようだったから、今日の図書館での顛末をある程度脚色して面白おかしく話していると、末摘花のテンションがほんの少しだけ、変わった。

『それって本当に事故なのか？』
「は？ふつーに階段でコケて落ちてきてたぞ？」
『誰かに突き落とされたとか？』
「ねーよ、誰も居なかったし。つーか何よ、なんかスペクタクルな事件にでもしたいのか？」
『いや、そーゆーんじゃないけどさ……その図書委員の名前、なんつーんだっけ？』
「篠原だけど……まさかお前、篠原が僕を抹殺しようと企んでいたんじゃないかとか考えてるんじゃないだろうな？ほっときゃ勝手に自滅しただけで、わざわざ僕から支えに行ったんだぞ」
『支えれてねーじゃん』
「支えれなかったねー」
『女の子の一人も支えれないとは、甲斐性の無い奴だな』
「自分ひとり支えるのが精一杯だっつーの。他人様の支えになれるような立派な人間じゃねーですよぼかぁ」
『男だろー？足一本多いんだから女より支えになれよー』
「うっせー黙れこのオヤジが」
『ははは、まぁ、良いや。つー事はだ』

ほんの少しの間。

『今日は何も変わったことは無かったんだな？』

……デジャヴ。何だこの感覚？なんか、ついさっきもこんな事が有ったような……

不意に既視感に囚われて脳裏を探ると、何のことはない、これついさっき関屋が言ってたのと同じ台詞じゃねーか。

「だから、図書館大転落っていう立派な出来事が有ったっつーの」

『いやー、そういうんじゃなくてさ……もっとこう……いや、別に良いか』

何がしかを勝手に徳心する末摘花。どうやら、末摘花も関屋もこの僕のセンシティブな日常生活に興味津々という事らしい。が、残念ながらそう毎日変わった出来事が起こるような立派な星の下に生まれついてはいないのだ、この僕は。

『あ、そーだ、この後さー知り合いがＤＪやるんだけど、顔ださねー？前に来た時挨拶したモリアゲって奴なんだけど』

「誰だっけ……？」

『覚えてねーのかよー。まぁ憶えてないかもな……ほら、坊主頭でちっこくて人懐っこい』

「覚えてねーなー……」

『まぁ、それは良いんだけどさ、どうせならみんなで盛り上げてやった方が喜ぶかと思うしさ』

「足がねぇよ。今から自転車で2時間近くかけて市内まで向かえっつーのかよ」

『あぁそれなら迎えをだすよ。ウチので手ぇ空いてるのいるし』

「いらねーー！」

末摘花の言う「ウチの」って言うのはつまりはヤンキーだか不良だかチーマーだかのコワモテ兄ちゃんと言うことだ。顔見知りも何人かいるし、別に悪いヤツばかりではないと言うのも分かるが、ヤン車で爆音で迎えになんて来られた日には、品行方正な僕のイメージに傷が付く事間違いない。つーか、ウルサイ。

「もう、ここんとこ棚卸でヘトヘトなんだよ。余剰体力なんて全くねーの。夜遊びする元気なんて残ってねーんだよ」

『えーたまには顔出せよー。皆も会いたがってるしさー』

それは間違いなく嘘だ。久闊を叙する様な相手に心当たりは全く無い。

「まー、そのうちまたなー」

『付き合いの悪いヤツだぜ……まったく、なんでこんなのを……』

「あー？なんか言ったか？？」

『なんも言ってねーよ、バーカ、ボケ、死ね！！』

「あ！？俺が死んだら香典で要らん出費が掛かンぞコラ！！？」

『払わねーよ！！お前の香典なんてぜっっっってーーーー出さねぇからなッッ！！』

「何だとコノヤロー、じゃぁ、俺もお前の香典なんか出さねぇからなッッ！！」

『むしろ要らねぇよンなもん！！』

「じゃぁ逆に嫌がらせに香典出してやるッッ！！」

『要らねーつってんだろ！！あ、でも……』

どうでも良いアホなやり取りのさなか、不意にトーンダウンする末摘花の口調。

『アタシの香典出すってことは、少なくともお前の方が長生きして

んだよな……』
「当たり前じゃねーか、なにいってんのお前」
『いや、それならそれで良いかなって思ってさ……』
「は？何しんみりしちゃってるんですか、末摘花センパイ。年功序列で言うならもちろんアータの方が先におっ死ぬご予定でしてよ？？」
『ウルセー！！女のほうが長生きだっつーの！！』
「まぁ、確かにお前は殺しても死ぬようなタマにゃ見えねーな」
『タマねぇし』
「黙れこのド痴女が」
『はん！ウルセーよこのドスケベが』

再び、不意の沈黙。

『……なぁ、みー』
「なんだよ」
『死ぬなよ』
「は！？何言っちゃってんのお前？？」

不意に放たれた末摘花の台詞に僕は真顔で問い返した。そういう台詞が出てくる流れですかこの会話？
しかし、末摘花からの返事は無かった。その台詞を最後に電話は切れ、不意に再び鈴虫の鳴き声が響き始める。
耳元から離したｉＰｈｏｎｅに視線を落とすと、ただ、末摘花との通話時間だけが、無味乾燥に表示されているだけだった。

「まったく、自分勝手な奴だな……」

僕はため息を漏らしながらｉＰｈｏｎｅをポケットに突っ込み、ガラナを缶ゴミ捨ての代わりに放置されてるポリバケツに放り投げ

ると、踵を返して寮の方へと戻っていった。

……そんな風にして、僕と言う人間は、いつも何か大事なものを取りこぼして行くのだが、それに気付かされるのは、まだまだ後のお話である。

――

――

【ＡＣＴ３】終幕

＊＊＊

【幕間～ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ～】

『ＪＲ長野駅付近の路地裏某所』

「だからさー、言ってんでしょー、オレも誰かは知らないってさー。そういう手はずになってんの。毎週金曜日にさ、シフティってクラブに行って、２時３０分にチルアウトの端っこんとこでバットって言うタバコ吸ってたら、隣に来て渡してくれるのよ。こう、大学ノートの切れっ端を三角形に折りたたんだみたいな包みに入ったの。代わりに、緑の輪ゴムで止めた札を渡すんだけどさ、新札じゃダメなんだって。え、もちろんそういう噂ってだけだって。俺はやってねぇよ、噂だよ、あくまでウワサ。……中身？しらねーよ。コナっぽいらしいけど。アイスだかエックスだかスノウだかチョコだかはわかんねーよ、見たことねーんだもん。……相手？なんか黒尽くめの若いにーちゃんだっつーコトぐらいしかしらねー。ノブがさー、あ、ノブってのはウチのツナギみたいなのやってる奴なんだけ

ど、こいつが前にあの辺のシマの叔父貴にフロにつれてってもらった時にそんなことを聞いたらしくてさー。けっこーマジヤバな感じになってるみたいよ、上の方でも。そりゃアンタの方が詳しいでしょ？え、あ、いや、そう思っただけだって！！俺は何も知らねぇって！！！……どっからかって？知らねぇんだってマジで！ウワサじゃヤマの方からっていうけど、カワの方からって言う話もあるしさ。ねぇ、マジでそろそろカンベンしてくれよ、俺みてーなのイジってもなんも出てこねぇって。あ、それならさ、ウチのアニキ紹介すっからさ。あの人まじスゲーんだよ、このあたりじゃ一番の顔役だし！……いや、ホントだって！！俺からの紹介だって言えば、ぜってー会ってくれるから！！間違いねーよ！！俺も昔捌いてた時に結構仕入れてやったんだもん！！……あ、ごめん今のウソ！！俺はやってねぇよ！！マジで、ちょっとさ、いつものクセでフカシ入れてみただけで、俺は手ぇ出してねぇから！！！……いや、ちょっと待ってよ、ねぇ、それ、なんだよ……冗談だよな……マジモンじゃねーよな？？ちょっと、シャレになってねぇよ！！！約束通り喋っただろ！！！今更ンなハッタリかまさなくっても、ちゃんと何でも教えるって！！！まて……！待って……！！！なぁ、マジでやめようぜ、そういうの。無理だってムリムリムリ、出来るわけねぇよ。だって、あンた――刑事なんだろ……？」

不意に響く乾いた銃声。ゴミ捨て場に積み重なったポリ袋にドサッ、と人が倒れこむ音。

フェードアウト。

――

――

【ＡＣＴ４】に続く

【ＡＣＴ０４】キネティック・セルロイド（前書き）

（承前）

【ＡＣＴ０４】キネティック・セルロイド

―１９―

朝目が覚めると、僕は芋虫になっていた。

……驚きの新事実である。

まったくもって僕の人生と言うのは不条理の連続で出来上がっていて、我が偉大なる先達グレゴール・ザムザ先生に習って僕も歯ブラシのセールスマンでも始めた方が良いのかもしれない。少なくとも、セールスマンであれば自分自身のノルマと言う点で、生活をコントロールすることが出来る（んじゃないだろうか。知らないけど）。芋虫になったって、背中にかごでもくくりつければセールスを続けることだって不可能じゃない（と思われる。分かんないけど）。新しいじゃないか、芋虫販売。まだこれまで誰も始めたことが無い事と言うのはセールスチャンスなのだから、ザムザ先生だって、もうちょっと頑張れば芋虫ならではの新しい人生を手に入れられたはずなのだ。そうに違いない。ううん、知らないけどきっとそう。

しかし、僕たち学生にとって、筆記用具が使えない以上、芋虫では授業を受けられない事は明白である！僕は、写実的記憶能力者ではないのだ。１万３千冊の魔道書なんて暗記していないのだ。

「だから、今日のところは学校を休んでこれからの人生について深く考察することにするッ！！」と高らかに宣言した後で、僕は問答無用で関屋に蹴り転がされた。

ゴミや雑誌やジャンクフードの袋やゲームソフトだらけの床を転がり、なにやら背中にプラスチック製の硬いもの（おそらくＰＳ２のコントローラー）が当たるのを感じながら、僕は精一杯に抗議する。

「いや、だから無理っすよ関屋センパイ！！もう、筋肉痛とか肉体疲労とかがどうしようも無くなってて、体が全く言うことを聞かないんすよ！！起き上がれない。僕はもう無理だ。僕を残してお前だけでも……早くッ……授業に向かってくれ……ってのうわっっっ！！！！」

ほとんど予備動作を見せずに振り下ろされた関屋の木刀を、僕は飛び起きて紙一重で回避した。こいつ、避けなきゃマジで当ててたぞ！！？

「動けるじゃん」

「いや、死ぬよマジで！！？お前はアホだから知らないと思うが、人間って木刀で殴られたら死んじゃうんだよ！！？」

「芋虫なんだろ？？」

「芋虫も死ぬから！！」

「でも、芋虫なら死んでも胸は痛まない」

「もし芋虫が親友だったら！！？」

「んー……」

木刀を肩口に抱え直し、関屋が天井を見上げて少し沈黙した後で、やっぱり木刀を再度振り上げた。

「芋虫が親友だったと言う恥ずべき歴史とともに闇に返す」

「なんのぉぉ！当たらなければどうということはないッッ！！」

「我が忌まわしき記憶とともに堕ちろ！！」

「貴様と言う奴はーーー！！」

＊＊＊

「……で、しばらくガンダムゴッコをしていて遅刻した、と」

「左様でございます……」
「後、ザムザが変身したのは芋虫じゃなくて甲虫とかいわゆる昆虫だよ？」
「へー……」
「も一つ言っとくと、ザムザ先生は布のセールスマンだよ？」
「勉強になります……」

一限目の授業の後、呆れ顔で問いかけてきた初音に、いつものように机に溶け込みながら、僕は力なく答えた。
全身の筋肉痛は酷くなるばかりで、睡魔は一向に退散せず、一限目もほとんど寝ていたようなものである。休憩を告げるチャイムと共にゆっくりと起き上がった僕と入れ替わりに、目前の関屋が机に沈みこみ、コッチは僕と違って授業はなんとか受けたものの、休み時間は寝て過ごすつもりらしかった。

「二人とも疲れてるねー」

僕たちを見やりながらそういう初音自身が随分と眠たげで、目の下にはうっすらと隈のようなものまで浮かんでいる。なんというか、もう、色々と限界だった。
図書館の棚卸し恐るべし。専門の業者でも音を上げるあの過酷な労働に三日間も連続で従事して、高校生が無事で居られる訳はないのだ。そもそも、僕たちの本分は学業であり、まかり間違っても肉体労働ではない。フラタニティのボランティア活動も、学業に差し障りが有るようでは全くもって本末転倒。なにより、勉学にこそ僕たちは勤しむべきなのだ。

「なので、勉学に費やす体力を取り戻すために、僕は少し保健室に行ってこようと思う！」
「……サボる気ね？」

机から体を引っ張り起こして宣言する僕に、初音がうさんくさそうな半眼を向けてきた。

「まさか！！ちょっとばかし湿布でも貼ってもらって肉体疲労時の栄養補給にアリナミンでも処方してもらおうかと考えている程度だ」

「そのキャッチコピーはリポビタンDのじゃ無かったっけ」

「あぁ、そうかも。じゃぁ、それで」

「もー適当だなぁ……」

「ちゃんと初音の分のオロナミンCも貰ってきてやるからさ」

「どんどんと単価が安くなってるよね……」

「お土産の善し悪しを値段で判断するな。つーかオロナミンのCはビタミンCだとして、リポビタンDのDって何よ？」

「ん……？ビタミンD？」

「ビタミンDって効能なんだったっけ？」

「えっと……確か高血圧予防、とかそんなのじゃなかったっけ？」

「よし、じゃぁそれで」

「何がそれなのかよく分からないけど、まぁ、お土産買ってきてくれるって言うならよろしくね」

「あいよー。では、昼休みにまた会おう」

「……はいはい」

追求してくるかと思ったが、初音はもはやそれ以上は何も突っ込まず、ヒラヒラと手を振って僕を送り出した。なんつーかこう、放置されるのもそれはそれで寂しいものが有るよな。

＊＊＊

「藤森ーいるかーー」

保健室の扉をガラガラと押し開き、大声でそう呼ばわりながら中に足を踏み入れた僕を出迎えたのは、銀色のビールの空き缶だった。慌ててマトリックスばりのアクティブポーズで上体を後ろに反らして空き缶を回避すると、缶は扉に当って派手な音を立てながら跳ね返り床を転がって、奥のデスクからこちらを睥睨する保険女医の足元まで転がっていく。

戻ってきた空き缶を赤いピンヒールで踏み潰しておいて、保険女医はくわえていたタバコを右手で持って、僕の方に突きつけてきた。

「アタシの事は『先生』もしくは『お姉さま』と呼べっていつも言ってんだろーが、このボケナスが」

黒いタイトスカートに赤いシャツ、ソバージュの掛かった色素の薄い銀髪のロングヘアに、相変わらずのド派手な化粧。一見すると３０代前半、もしくは２０代ギリギリにすら見えるこのファッションセンスが前世紀で止まっているような女が、水無瀬高校の保険女医の藤森（ふじもり）・ザドーフニコワ・ナジェージュダだ。

その名と髪の色が示す通り、完璧なロシア人ハーフである。とは言うものの、本人は幼少の頃から日本で暮らしているので、メンタリティとしてはほとんど生粋の日本人と言って良い。国籍も日本だし。本来であれば愛称はナージャになるはずなのだが、実年齢ではそろそろ４０近いババアをナージャと呼ぶのは僕の中で絶対に許されないので、徹底してこいつのことは藤森と呼ぶことにしている。

なんでまた僕がこんなに微妙にコイツの事について詳しいのかと言うと、実は藤森はウチの母親の高校の同級生なのだ。どうも大学も一緒だったらしく、大学で知り合ったオヤジとも当然面識が有り、僕はガキの頃からいつも藤森の玩具としていじくり回されていた。言ってみれば、時々遊びに来て虐める嫌な親戚のおばちゃん、ぐらいの立ち位置で有る。

水無瀬に赴任してきたのは６年ほど前のようだが、コイツがこん

な辺鄙なところに赴任さえしてこなければ、ウチの母親も僕をここに送り込もうとはしなかったであろう事を考えると、全ての遠因を担っているのはコイツと言っても良い。

入学して二週間以上挨拶にも行かずあえて放置していたのを相当に根に持っているらしく、今でも僕を見かける度に教職員に有るまじき肉体的暴力を振るってくる有様で有る。

黙ってりゃ、結構なロシア美人なのに。つーか、反則的に若作りなロシア美人なのに。

そんな藤森の足元に踏み潰された缶の他、机の上にも散乱するビールの缶を見て僕は大きくため息をついた。

「また飲んでンのかよ仕事中に」

「うるせー、アタシに流れる母なるヴォルガ河の血がアルコールを摂取しろと囁いてんだよ」

「お前の出身はイルクーツクだろうが。近くに流れてるのはイェニセイ川だっつーの」

「え、マジで??」

「知らなかったのかよ!!」

「えーーー!!ずっとあの川ヴォルガだと思ってた!!」

こういうヤツなのだ、コイツは。

「まぁ、お前の中に流れてるのがアルコールだろーがニコチンだろーがどうでも良いが、ちと全身が筋肉痛でヤバイんでベッド借りるぞ」

「やだよ、出てけよ早く。つーか、アタシの事は先生って呼べっつってんだろーが」

返事も聞かずにカーテンで仕切られたベッドに向かう俺に、藤森は実に面倒くさそうな表情を向けてきた。コイツの凄いところは、

僕だからこうしているのではなく、本当に病気の人間でも平気で追い返そうとするところだ。男子に限り。

「あのなー今日はマジで調子悪いの、寝ないと死ぬの！ここ放り出されたら寮に帰って寝るぞコノヤロー」

「どんな脅迫だよ。良いよ、止めないから帰って寝ろよ」

「面倒じゃん！帰り道で熊にでも襲われたらどう責任取るつもりだよ！！出るぞ熊！！この村マジで出るぞ！！？」

「まぁ、確かに出たこともあるけどさ」

「だろー？なぁ良いじゃん。職務中にビール飲んでたことは黙っててやるからさ」

「いやアタシはちゃんと学長にはビールを定期的に接種しないとダメな病気だってちゃんと伝えてるから」

「ただのアルコール依存症じゃねーか！！！」

「病気じゃん！！立派な病気じゃん！！」

「病気だよ！！」

病人といくらやりあってもしょうがないので、僕は藤森は無視してカーテンを引き開け、ベッドに潜り込んだ。

「あー！！まだ今日誰も使ってないから後で横になろうと思ってたのに！！」

「お前が寝たらアルコールの匂いが染み付くだろうが！」

「消毒だよ消毒！」

「お前自身が健全な学生生活に対する悪質なウィルスだッ！」

「なんだとー減らず口ばっかり達者になりやがって！！もーアキちゃんに言いつけてやるからな！！」

不意に僕の母親の名前を出して攻撃してくる藤森。だが、その手はもう古い。

「だったら俺も未だお前がアル中だってアイツにチクってやるからな。ブン殴るために東京から飛んでくるぞ」
「いやゴメン、マジごめんなさい。それだけは勘弁して下さい」

ウチの母親の徹底した肉体的暴力的指導のお陰で、藤森は一時期アル中から脱出していた。少なくとも、僕が中学校に入った頃の藤森は随分と健康的だった。しかし、水無瀬で再会してみればご覧の有様で、ウチの母親がアル中に逆戻りしたことを知った日には、激怒してマジで東京からスッ飛んで来る事だろう。

……まぁ、その暁には被害を軽減するために藤森があることないことを吹き込むだろうから、僕だってかなりの割合でボコられることは確実なのだが。

つまり、お互いにお互いのことをアキちゃん、つまりは我が母親たる柏木秋乃（あきの）に黙っておくという事で、僕らの間には紳士協定が結ばれているのである。

ようやくお互いのコンセンサスが確認できたところで、本格的に眠るために僕はベッドに潜り込んだ。藤森がなにやら溜息をつく気配がしたが、それ以上は追求してこない。

代わりに藤森が椅子から立ち上がる気配がしたと思うと、軽やかな音を立ててベッドを仕切るカーテンが閉められる。つまりは、それが黙認の合図ということなのだろう。

「2限目だけだからなー。3限目になったら追い出すからなー」
「ありがと藤森先生、愛してる」
「死ねボケナスが」

カーテンの向こうの藤森の気配は、デスクではなく扉の方に向かって歩いていく。

「一応病欠で報告しといてやるよ。つーか、お前のクラスなんだったっけ？担任は？？」
「１－３だよ、１－３！高郷！！」
「あー、高郷先生か。あの人顔色悪いよなー。肝臓壊してんじゃねーの？」
「知らねぇよ。今度看てやれよ」
「お前らが問題ばっか起こすからだ」
「起こしてねーよ！つーかもう行け。行って俺の安眠を獲得してこい」
「まったくもー、お前はいつまでも甘えん坊なんだから……」

藤森に子供扱いされる覚えはミジンコの触覚の先程も無かったが、ここで反論するとまた長くなりそうだったので、僕は喉元まで出かかった罵声をぐっとこらえた。やがて、藤森がため息とともに部屋を出て行く気配がして、ようやく平穏が訪れる。

いやー、まったく、この世知辛い世の中では睡眠をとるのも一苦労である。

という訳で寮の自室よりもフカフカで広々なベッドで大きくて足を伸ばし、僕は待望の眠りに落ちた。

＊＊＊

と思った瞬間、保健室の扉がガラガラと押し開かれる音がした。そして、誰かがゆっくりと中に踏み入ってくる気配がする。鬼か、現実様よ。この僕に一瞬たりとて睡眠を許さないつもりなのか。どんだけドSなんだよ！団鬼六先生もビックリだよ！！

もはや我が安眠を侵すものは全て敵であると決めつけ、ガン無視を決め込んで目を閉じるが、気配はなかなか立ち去ろうとせず、ただ部屋の真中で突っ立っている。賑やかに喋られるよりも黙って立っていられる方がなんだか随分と気になり、睡眠に集中出来ない。

おおよそ３０秒ほど気まずい沈黙が続いた後で、僕の我慢が限界に達した。

「藤森先生なら職員室に行っていませんよー」

とりあえず立ち去らせたい一心で、カーテンの向こうの見知らぬ誰かに声をかける。この時、なんだかとても熱っぽくてダルい的な演技をすることも忘れない策士っぷりである。保険医が居らず、病人が寝ているとなると、よほど空気が読めない奴でなければ、早々に立ち去るに違いない。

そして、案の定誰かさんは僕の声に少しだけ反応した後で、謝罪の言葉を口にした。

「あ、すいません、ごめんなさい……」

女の子か。

その見知らぬ女生徒は随分と気弱そうにそう呟いて、踵を返す気配がした。その足音も弱々しく、カーテン越しに伝わってくる気配は、まるで僕のよく知っている奴みたいだった。

と言うか声的にどう考えても知ってる奴だった。

「東条！？」

僕はベッドから飛び起きると、靴下のままで床に降り、カーテンを押し開く。不意に左右に広がる僕の視界に、身をすくませてこちらを振り返る、東条の姿が映った。

東条は――――怪我をしていた。

その顔を半分ほど覆うのは頬に張り付けられた白いガーゼで、右

手の甲から袖口にかけて巻かれた包帯がブレザーの裾の中に吸い込まれるように消えている。ガーゼからはみ出した口元は紫色に腫れ上がり、唇がいつもの何倍にも膨れ上がっていた。
言われなくても分かる。これは、誰かに殴られた怪我だ。

「ど、どうしたんだよ、大丈夫か!?誰に殴られたんだよ!!?」

あまりの痛々しさに動揺して近づこうとした僕に、東条はビクン、と体を縮こませる。まるで、暴力から身を反らせるように。僕が殴りかかってこようとしたかのように。
そんな東条の様子に気圧されて、僕は足を止めた。そうして、上体を反らして横目で僕を見上げる東条に、出来るだけ、出来るだけの笑顔を浮かべてみせた。

「あ、ごめん、驚かせるつもりは無かったんだけど」
「あ……ごめんなさい」

僕の謝罪に、逆に謝る東条。それが何に対する謝罪なのかは分からない。驚いちゃってごめんなさい、か?それとも、寝ているところを起こしちゃってごめんなさい、か?
とにかく、東条が口にする台詞の半分以上は詫びで構成されているような気がする。ほとんど条件反射に近いのかもしれないが、まず第一声に「ごめんなさい」と言ってしまう子なのだ、こいつは。
……正直、東条のそういう所をウザいと思う奴が居るというのは理解出来る。僕だって、時々イラッとさせられる事だってある。しかし、だからといって虐めると言うのはまた別の問題で、ウチのクラスの連中は、そういう点では概ね苛立ちを表に出さず東条に接しているように思う。
ウチのクラスで東条を苛めている奴は（僕の知る範囲では）居ないし、どちらかと言えば東条が外部の人間に苛められていることに

対して憤慨しているヤツのほうが多い。
だから、東条のこの傷は学校に来てからついたものではないだろう。と言うか、手当済みなのだ。怪我をしたのはもっと前。
ん……？そもそも、東条ホームルームに居たっけ……？
僕は必死で記憶を引っ張り出す。僕の座っている席は窓際の真ん中ぐらいなので、後ろの方の状況は大体曖昧である。そして、東条は後ろの真ん中辺りの席なので、僕からは完全に死角になっている。
が……それにしたって、東条が影が薄いとは言え、怪我押した人間がクラスに居たならば気がつかないはずはない。僕が気がつかなくても、誰かは気がつくだろう。そして、女子が気づいて声でも掛けていれば、僕だって絶対に気がついていたはずだ。
つまり、東条はＨＲには居なかったのだ。って言うか、居ないことに気がつかない時点で僕もどうかと思うのだが。
そこまで思考をまとめると、僕は東条に向き直る。

「どした？怪我が痛むのか？」
「えっと……その」

すでに手当済みな以上、手当で保健室に訪れた訳ではない。と言うことは、痛むなり何なりして再度看てもらう為にやってきたと言うところだろう。
しかし、そんな僕の予想は早々に外れた。

「遅刻して教室行ったら……毬瀬さんが心配してくれて……手当は自分でしたって言ったんだけど、それじゃ危ないから、先生に見て貰った方が良いって言って……大丈夫だって言ったんだけど……」

なるほど、初音が東条を保健室に寄越したらしかった。
つーか、自分で手当したにしては随分と手馴れた感じだった。自分の利き手に包帯を巻くのを、こうも綺麗に出来るとは驚きである。

慣れてるのか？

……慣れてるのか……

自分の思考の行き着く果てに、僕はゲンナリとする。東条は怪我に慣れているのだ。自分で手当をするのだって、これが初めてではないに違いない。そもそも、僕らが東条が苛められていることに気が付いたのも、しょっちゅう怪我をしていたからなのだし。

「……痛むのか？」

そんなつまんない事しか聞けないどうしようもない僕の問い掛けに、東条は首を横に振る。

「朝痛み止め飲んだから……」

「いつ怪我したんだ？」

「昨日の晩……だと思う。多分、階段から落ちて……」

東条の説明に暗澹たる気分を抱える僕。

東条がこういう説明をする時は、要するに、誰かにやられた事を隠す時だ。こいつは、イジメられても決してその事を口にしない。誰かに相談もせず、全部自分の中に抱え込んでしまう。

僕らが東条がイジメられていることに気が付いた時もそうだった。こいつは決して誰にやられたのかを口にせず、ワザワザ後を付けて相手のグループを特定したぐらいなのだ。

或いは僕らのやっている事は正義感に任せた余計なお節介なのかもしれない、と考えた事も多々ある。葵なんかはそのスタンスで、アイツはイジメられる人間にも原因があると考えるタイプの人間だ。確かに、ある意味ではその通りなのかもしれない。イジメられる方の人間に人を苛立たせる原因や、イジメを可能にするシチュエーションに持ち込まれてしまう隙があるのかもしれない。

しかし、イジメられる人間の態度と、イジメる人間の行動は、全

く別問題だと僕は思う。
確かに、東条には人を苛立たせる優柔不断さや煮え切らなさがある。それは認めよう。だからと言って、その苛立のままに東条をイジメるのは猿のすることだ。腹が立つ、ムカつくからと言って誰かを殴りつけ、虐待するのは、単なる糞野郎である。
イジメられる方にも原因がある、という台詞を口にする全ての人間は、「ムカついたら殴っても良い」と言っているに等しいのだ。
バッカじゃねぇの。ンな訳ねぇよ。
だからこそ、僕は東条をイジメないし、イジメる奴にはテメェはバカなのだという事を思い知らせたい。イジメを無くすには、対等の暴力で抑えこまないとどうしようもないのだ。言葉が通じないからこそ暴力を振るう連中とのコミュニケーションは、やっぱり暴力で取るしか無いのである。
……まぁ、要するに、偉そうなことを言っているが、僕だって言葉でのコミュニケーションを放棄した人間の一人なのだ。イジメるヤツは問答無用でブッ飛ばすし、その事に対して後悔の念を抱いた事はない。本当の聖人って奴は、東条の代わりに右の頬を殴られたら左の頬を差し出し、相手が暴力の無意味さに気がつくまで、そうやってずっと殴られてやる奴なのだろう。
しかし、僕にはそんなタフネスさも博愛精神も無いので、殴られたら殴り返す。目には歯を、歯には骨を。お礼は半分、恨みは倍返しって訳。
……要するに、こういう事だ。東条が怪我をしている。そして、それは誰かにやられた怪我だ。東条は誰にやれたか言わない。よろしい、ならばそいつは俺が探し出してブッ潰す。
シンプルだろ？
まぁ、実際問題として東条が誰にやられたのかという確信が無い以上迂闊に動く訳には行かないし、動くにしたってもし相手が真崎のグループなら３０人からの大所帯だから、まともにやりあって勝てるもんではない。単純な暴力のぶつかり合いだと、潰されるのは

コッチなのだ。
だから、今すぐ東条の腕を引いて長野市内に殴り込みに行く訳にはいかない。そうしたいのは山々だが、ただボコられに行くと言うのは、確信的に頬を差し出す聖者の何百倍も無意味である。
そういう訳なので、僕は腹をくくって、東条の目を見据えた。
「ちょっと、付き合って」
「……え？」
「いーから、ちょっと付き合ってくれ」
「あ、でも……」
僕は、それ以上東条が何かを口にするのを待つことなく、か細い左手を引っ掴むと、出来るだけ力を込めないようにしながら、その手を引いて保健室を後にした。

―２０―

コーヒーミルを取り出し、計量カップで豆をすくって投入し、ガリガリと挽いた後で、どこを探してもサイフォンが見つからないのでコーヒーの粉をゴミ箱に放擲し、ＵＣＣのインスタントコーヒーの瓶を発掘してカップにぶち込んだ後、賞味期限が半年も過ぎているのに気がついてカップの中身をシンクにぶちまけるに及んで、ようやく僕はシンクの縁に両手をついて荒い深呼吸を繰り返した。
落ち着け、落ち着くんだ僕。
確かに東条と二人きりになったのは初めてだ。ロッジに部外者の女の子を連れ込んだのも初めてではある。しかしながら、別段焦る必要はないのだ。普通にすれば良いのだ。
テイク・イット・イージーですよ。ケセラ・セラ精神ですよ。
女の子と二人っきりであるというシチュエーションさえ意識しなければどうということはない！

なのに、どうしてこうも緊張してしまうのだろうか……思春期だから……??

――――とりあえず、保健室から東条を連れ出して僕がやってきたのは、必然としてフラタニティのロッジだった。教室に戻る訳にも行かず、喫茶店も無いこの水無瀬でゆっくりと話が出来る場所など限られている。授業時間中ともなれば尚更だ。

葵がまたぞろ学校をサボって篭っていたら面倒な事になる所だったが、幸いにしてちゃんと授業に出ているらしく、ロッジに人気は無かった。

居間に東条を連れ込み、いつもは関屋の指定席になっているバカでかいソファーに無理やり座らせて、お茶を用意するべくこうして台所にやってきたものの、いつも初音に任せっきりになっているため、どこに何が有ってどうなっているのか皆目見当がつかない。

見よう見まねでコーヒーの用意をしてみるものの、まったくもっておぼつかない有様で、火にかけたポットはすっかりと沸騰してしまっている。

しばらく深呼吸して気持ちを落ち着けた後で、コーヒーを煎れるのは諦めてパックの紅茶をカップに突っ込んでお湯を注ぎ、そのまま両手で二個のカップを持って居間へと戻ると、果たして東条は僕が座らせた時のポーズのまま、ソファーに置物のように腰掛けて身じろぎ一つしていなかった。

綾波か?綾波レイ並の無気力少女なのかコイツは??

大体、夏休み前からこの方、東条をイジメから守るために色々と立ちまわっては来たものの、二人っきりで話をしたことなど無い。二人っきりどころか、他人を交えてさえ直接話をした事は殆どないのだ。

僕は僕の正義感が完全なおせっかいであることを自覚していたので、そういう意味では東条自身の考えなんていうものは、とりあえず二の次だったのだ。

僕らがちょっかいを出すことで東条が更に酷い目に遭うんじゃないか、という奴も居たけれども、それだって問題点のすり替えだ。弱者を暴力で搾取するのは、僕の中の全ての正義感が間違っていると告げている。イジメられてる奴を守ったことで、さらなる暴力がイジメられている奴に向くのだとすれば、イジメている奴を完膚なきまでに叩き潰すのみ。

そんな暴力の連鎖は何も生まない、単に暴力を暴力で押さえつけているだけだと言った奴もいたが、それは確かにその通りで、僕は単に僕の安っぽい正義感を守るために暴力を振るっているに過ぎない。

だから僕はいつか僕を上回る確信的な正義の持ち主に暴力で敗れ去ることだろう。

それが正義感のぶつかり合いという奴だ。それぐらいの覚悟は、完了している。

そして、どうやら僕は東条を守り切ることに失敗したようだった。

東条はこうして怪我をしていて、ひょっとするとまた考えたくも無いような暴行すら受けていて、それは僕らが「完璧に」暴力を遂行出来なかったがために起こった事態なのだ。

だとすれば、今度こそ、きっぱりと、油断なく、容赦なく僕は僕の正義感に基づいたどうしようもない暴力を行使しなくてはならない。

そして、それを「東条のために」なんていうお題目に預けてしまうのではなく「僕がそうしたかったから」という僕の自己責任の元で行わなくてはならない。

僕はコーヒーカップを部屋の真中を占める大テーブルに置くと、ソファーの横のサイドテーブルを持ち上げて東条の前に運び、自分の椅子をサイドテーブルを挟んだ反対側に置いた。そうして、コーヒーカップをサイドテーブルに運び直すと、黙って自分のカップに口をつける。

熱い、そして濃い。まぁ、パックを漬け込んだまま持ってきたの

だから当然か。

「不味いけど、まぁ飲んでよ」

「あ……うん」

僕の台詞に東条は小さく頷き、カップから垂れ下がるパックの紐をどうしたものかしばらく逡巡した後で、僕と同じように無視してカップに口をつけた。社交儀礼のように、ほんの少しだけ、唇が紅茶に触れるか触れないか、ほんの僅かに。

僕はいったい東条に何を聞くべきだったのだろうか。

何が有ったのかと言うことか？いや、おそらく東条は何も言うまい。そして、僕は裁判官でも判事でも無いし、東条をセカンドレイプしたい訳でも無い。

どうして欲しいのかと言うことか？それも東条は口にしないだろう。いつだって、自分からどうしたいという事は口にしない奴なのだ。

大体において、東条の気持ちや意志はどうあれ、僕はもう独善的に自分の正義感を行使すると決めているのだ。それが、ひょっとしたら東条が全く望んではいない事なのかもしれないという事も、覚悟した上で。

そういう意味では、僕も東条を搾取し続ける不良グループと大差ない。東条の意志を無視し、東条の気持ちを置き去りにして、僕だけが気持ちよくなれる解決法に飛びつこうとしているに過ぎないのだから。

しかし、だからどうした。

東条は、今まで一度も言わなかったのだ。

「私はあの人達に陵辱されてとても嬉しかったです」とは。

たったの一度も。

だったら、僕はどこまでも独善的になる。そういう頭の悪い無軌道・無計画・無分別・無思慮な暴走が許されなくって何が青春だ

！！

……が、まぁ目下の問題は連れ込んだは良いものの全くもってどうしたものか見当もつかない東条の相手である。僕にしたところで、なんで連れ出したのか全く分からないのだ。漠然と自己分析をするに、恐らく藤森に知られたくなかったのだろう。東条が怪我をしている事や、その怪我を見て僕がこれから行うであろうことを。

藤森は大人で、先生で、ウチの母親の親友でもある。つまりは僕たちがいずれお世話になる社会って奴の一員で、今のところ僕たちが突っ張って抵抗しなければいけないものの代表なのだ。いや別に無理に抵抗する必要はないのだけれど。

そういう藤森に知られるのが嫌で、僕はここ、ホームグラウンドであるフラタニティのロッジに東条を連れ込んだ。

つまりは何がしかの目的が有って連れ込んだのではなく、連れ込む事自体が目的だった訳で、そうすると全くもってやることが無い。タイムリミットがある訳でもない。

完全に手持ち無沙汰なのである。

しょうがなく、鉄のような味がする紅茶を所作無げにすすり続けるが、柱時計の秒針は一向に進まず、驚くべきことに僕がお茶を持ってきてからまだ３０秒も時間は過ぎていない。

どうすりゃいいのよ。世の中のイケメン諸君とか、主人公的な男の子とかは、こういう時にウィットに富んだ話なんかをして、心の冷えた女の子をクスッと笑わせたりなんかしちゃって、会話の糸口を引っ張っていったりするんだろ？

……いやいや、無理ムリムリ！！

綾波レイかホシノ・ルリ並の無感情キャラと二人っきりのシチュエーションで、そもそも半年近くまともに関係を構築してこなかったこの僕が、いきなり感情の突破口を開くとか出来ないから！！そんな西尾維新の小説の主人公みたいな事は普通出来ないから！！

やっぱアレか！？ギャルゲーとかエロゲーをもっとまじめに攻略して、こういう時にはどうすれば良いのかのケーススタディをちゃ

んと勉強しとけば良かったのか！？確かに、無感情キャラはどの作品でも必ず一人は出てくるお約束キャラだもんな！！

僕はこれまで僕が見聞きしてきたありとあらゆる創作媒体に登場した無感情キャラと、そのキャラが心を開くに至るエピソードを脳内検索する。

……ダメだ、出てこねぇ。そもそも僕は無感情キャラは攻略しない主義の人なのだ。だってあんまり面白くないじゃん！台詞少ないし！！

自らの不勉強を嘆くも時既に遅し、僕は同級生の女の子一人とすらまともに会話が出来ないチキン野郎に成り下がっている有様である。一縷の望みをかけて柱時計に目を走らせると、まだ５０秒しか時間がたっていない。

もう……ダメだ……

以前２ｃｈのまとめスレで見かけた「人生はクソゲー」だの「イケメンはチートキャラ」だのと言った名言の数々が脳裏をよぎる僕を救ったのは、意外なモノだった。

カップを口元につけて沈思黙考する僕の耳に、てちてちと聞き覚えのある爪音がしたかと思うと、居間に活計が現れたのである。

あっけにとられる僕を見据えたまま、活計はいつも通り凛々しく尻尾を立てて居間を横断し、足元までやってくると、「にゃぁ」と元気よく首筋を右足にすりつけてきた。

「お前……何してんのこんなとこで」

右足にじゃれつく活計を見て、僕はあっけに取られて問いかけた。

活計は一応僕と関屋の飼い猫だが、実質的にはあやめ寮の皆で世話をしている寮の猫のようなものだ。寮の連中だけではなく村の人達も活計の事はよく知っていて、あっちこっちで可愛がられているようで、野良猫の少ない水無瀬を我が物顔に闊歩している。

このロッジにも何回も連れてきたことがあるし、裏口には活計用

の猫入り口があるのも確かだが、まさかここまでこいつが一人でやってくるとは思ってもいなかった。
僕が考えていたよりも、相当にこいつの活動範囲は広いらしい。
……まぁ、或いは迷いに迷って帰れなくなってたどり着いただけなのかもしれないが。と言うか、その方が有りそうな話だった。
しかし、驚いたのは活計が登場したことではなく、活計を目にした東条の反応だった。
これまでの無表情が嘘のような満面の笑顔を浮かべ、胸元で両手を握りしめたのだ。

「うわーー！！可愛い！！！これ、柏木くんのネコ！？」
「あ……うん、まぁ、そう」

こんな元気な東条の声は初めて聞いたぞおい。つーか、東条に名前を呼ばれたのも実は初めてなんじゃないのか？？
活計の登場よりも何倍もあっけに取られる僕の驚きなどまるで頓着せずに、東条はキラキラとした目を僕に向けて、「触っても良い！？」と聞いてきた。

「あー、コイツは自分自身の王様だからなー。コイツが触られたくないと思ったら無理だけど、基本、人懐っこい奴だよ」
「うわー、うわーー！！可愛いなぁ！！」聞いてねぇし。

僕の返事を待つ間もなく、東条はスルリと手を伸ばすと器用に活計の体をすくい上げ、嬉しそうに頬ずりをした。無理矢理ではなく、乱暴でもなく、子猫の取り扱いに手馴れた手つきだった。
東条の優しい扱いに活計もまんざらではなさそうで、なすがままになってゴロゴロと喉を鳴らしている。どうやら、ファーストコンタクトは成功のようだった。
しかしまぁ、人ってのは分からないもので、こうして満面に笑み

を浮かべながら子猫と戯れる東条は、先程までとはまるで別人のようだった。目の輝きや仕草まで、全く異なっている。

つーか、こいつ、ちゃんと笑えるんじゃん。

ちゃんと、自分の気持を伝えれるんじゃん。

活計の登場で、場の空気が一気に和やかなものになった。東条は活計と戯れるのに必死で、時折活計の事に関する質問をぶつけてきて、僕が短く答える。

ごく普通のやり取りが、ごく普通に出来る。それは、先程までと比べると天国みたいな状況だった。

だから、しばらく活計を介したコミュニケーションをやり取りした後で、僕はゆっくりと立ち上がった。

「ちょっと電話してくるからさー、活計と遊んでてもらってて良い？」

「うん、良いよ！」

僕の方など向きもせず、微笑みながら活計の腹を撫でる東条を見て、僕は安心して居間を後にした。

＊＊＊

『よーどうしたー。授業中に電話してくるなんて珍しいじゃん。サボリかー？』

コール五回目の後で、末摘花の声が細長いｉＰｈｏｎｅのトップスピーカーからこぼれ落ちてきた。電話に出るまでのスピードは、僕が想像していたのよりも、２回程早かった。

「お前だって授業中に電話出てんじゃん。どーせサボってたんだろ」

『ちげーよ！アタシはちゃんとマジメに授業受けてたっつーの。お

花摘みに行ってきますぅ～、つって抜け出してきたんだよ』
「へーへー、そういう事にしといてやるよ」

まずは、いつもの軽口からスタート。

『それよりもどしたのよ？』
「まー、別に大した用事もねーんだけどさー」
『ウソ付け。用事がねーと授業中になんて電話してこねーだろ』
「いやいや、そんな事もありませんよ。僕はいつでも末摘花さんの美声が聞きたくてしょうがない派閥出身の議員ですから」
『うわー、ウゼー……お前嘘付く時だけやたらと言い回しがクドくなるよなー』
「いやぁ、照れるなぁ」
『褒めてねーよ。つーか、用事あるならさっさと言えよ、実はマジでトイレ行きてーんだよ』
「あー、そういう事ならさっさと済ましちまうかー」

ほんの僅かに息を吸い込んで、僕はようやく末摘花に用件を告げる。

「真崎んトコの連中がいま定宿にしてんのって、どこよ？」

途端……末摘花が息を飲む気配が携帯越しに伝わってきた。それ以上は何も言わず沈黙を保つ僕に、3秒ほど沈黙した後で、再び末摘花の声が聞こえてくる。

『……それを聞いてどうするっつーんだよ』
「いやー別にー？昨日クイズ番組の問題で出てたから、答えが気になっただけー」
「うぜぇ……誰から聞いたんだよ」

いきなりすっ飛ぶ末摘花の話題。
しかし末摘花とも昨日今日の付き合いではない。わざわざ説明されなくても、「俺が真崎の事を聞く」→「真崎が戻ってきた事を知っている」→「何かあった」→「グループの居場所を知りたがっている」と言う推理を末摘花が働かせたことぐらいは分かる。
つまりここからはガチトーク、と言うことだ。

「おとつい、東条……ウチのクラスの奴がいつものアホどもに絡まれてたのを助けた。そん時に聞いた」
『はぁ!?あいつらまだお前のクラスの奴に手ぇ出してんの!?殺されてぇのか』
「おかしいと思うよな?……って事はだ、手を出しても良いって言った奴が居るって事だ。それが誰かってのは考えるまでも無いだろうよ」
『おかしくね??あのボケは糞野郎だけど、筋の通し方ぐらい知ってるだろ』
「だからさー、まぁちょいとばかしお話を聞きに行こうと思ってましてねー」
『……やっぱり、昨日お前街に居たろ??』

更にブッ飛ぶ末摘花の話。待てまて、なんでいきなりそんな話が出てくる?
……あ、そうか。東条が怪我したのが昨晩だとすると、その時に何か有ったのだ。だから、僕がその場にいて巻き込まれたんじゃないかと考えているのか。

「成程ねー、昨日なんか派手なケンカでも有ったのか」
『あ……』

あ……じゃねぇよ、分かりやすい奴だな。つまり昨日の末摘花の電話は俺の居場所を確認するためのものだったと言うことだ。そして、どこかの誰か（ｏｒグループ）が昨日、真崎のグループとケンカをやらかした。そうして、そいつ（ｏｒそいつら）が誰なのかはまだ末摘花は把握していない、と。

「いくらなんでも、僕が一人で殴り込みを掛けるワケ無いだろーが。今アイツのとこ何人よ３０人ぐらいか？？」

『……５０だよ、５０人』

増えてる。真崎が「お勤め」に出掛ける前よりも増えてるじゃねーかよ。

「まぁそんな訳でさ、真崎と直談判しないとどうしようもねーから、直接出向いてやろうっつー感じなんで、定宿教えて欲しいんだけど」

『駄目だ』

「なんで」

『今アイツのとこは結構モメてんだよ、今近づくのはヤバイ。特にお前らが近づくのは』

「真崎ンとこの事情なんて知ったこっちゃねーよ。別に喧嘩しに行く訳でもないんだし」

『駄目だ。絶対に許さねぇ。お前のクラスメイトの事はウチでちゃんと面倒みるし、大体ウチの生徒なんだからアタシらの問題でもあるし、手ぇ出した桜井たちは後でシメとくから、とにかくお前らは手を出すな』

「いやいや、今から殴り込みに行くわけじゃないんだし。それに、すぐに足が容易出来る訳でもねーし」

『足がなきゃ行けない場所でも無いだろ！！バス停まで出来たみたいだし……あ』

まったく、カマ掛けに引っかかりやすい奴だぜ、末摘花くん。

「足がなくても行けるっつーことは、駅の近くか。んで、バス停まで出来たっていう事は、最近作られた場所。つーことは……あぁ、分かった分かった」

『ち、違うッ！！ちょっと待て、話を聞けよこのバカ野郎！！ホント今はマズいんだって！！』

「色々ありがとー、助かったぜ」

『テメェ、ナメてんのか、あ！？今どこにいんだよ、殺すぞ！！話を聞けって！！今余計なことしたらマジで殺すからな！！ホント、頼むからたまにはアタシのお願いも聞』

問答無用で、僕は通話終了ボタンをプッシュした。

すまん、末摘花。お前の貴重な情報は無駄にはしないぜ。

最大５０人ものメンツを収容出来て、最近できた施設って事は、間違いない。

長野駅近くのラウンドワンが、今の真崎のグループの定宿だ。

＊＊＊

末摘花との電話を終え、居間に戻ってみると、東条はまだ床に座り込んで活計と遊んでいた。とっくに活計の方が飽きているかと思いきや、ティッシュで作った即席の猫じゃらしのようなものに夢中になって跳び回っており、東条は猫と遊ぶのが上手なようだった。

戻ってきた僕の方など見もしない東条の側まで近づき、飛び回る活計をしばらく眺めた後で、僕は不意に東条に声を投げかけた。

「なぁ、日曜どっか遊びに行こうか」

「……え、えええ！！？」

僕の台詞に、東条が弾かれたように振り返ると、目を大きく見開いて僕を見上げるようにした。完全に硬直した東条の手から、活計が電光石火のスピードでティッシュ猫じゃらしを奪い去って行く。

僕はその場にしゃがみ込み、東条とほぼ目線の高さを合わせた上で、同じ質問を繰り返す。

「暇なら、日曜どっか遊びにいかねぇ？開いてる？日曜」

「え！？あ……その……」

それまでの元気な笑顔は一瞬にして消え去り、急にオドオドとし出した東条は、僕の後ろや横の方や、床でティッシュ猫じゃらしをバラバラに分解中の活計などに視線をを泳がせた。そうして、最後は僕の胸元当たりに目を落として、小さく、ゆっくりと頷いた。

「……うん」

「じゃぁ、予定押さえといてー。んー朝８時にバス停前に集合で良い？」

「良い……けど……あの……その……」

「……あぁ」

俯いたまま顔も上げなくなった東条のか細い声に、僕はようやく徳心して頷いた。

「だいじょぶだいじょうぶ、ウチの連中もみんな一緒に行く感じだから。日曜日にさ、買い物とか映画見に行く予定だったんだよ。だから東条もどうかなーと思ってさ」

「……あぁ」

と、東条は小さくため息を漏らした。二人きりではないという事に安堵したのであろう。

「まぁそういう訳だから、なんか買たいモノあるなら教えといて。予定に組み込めそうなら入れるから」
「あ……別に、欲しいものは無いんだけど……」
「じゃぁ、それならそれで適当にっつー感じで」

話が一段落したところで、僕は立ち上がって大きく伸びをした。

「もー授業に戻るっつーテンションでもねーから、このまま昼休みぐらいまでサボってようぜ」
「え！！？でも、先生が……」
「藤森が何とかしてくれてるって！それにたまには息抜きしねーと、やってらんねーですよ」
「え、でも……」

まだ逡巡して言い募る東条に、僕は最終兵器を出すことにした。

「ほら、活計もまだ遊んで欲しいって感じだし」
「にゃー！」

僕が視線を向けた途端、細切れのティッシュまみれの活計が、すくっと立ち上がって鳴き声を上げる。流石我が愛猫、なかなかに空気が読める奴である。

それでも、東条はしばらく思い悩んでいるようであったが、活計が近づいてその足に体を擦り付けるに及んで、ようやく観念して、活計を抱き上げて愛しそうに頬ずりをした。

まぁ、この世の中子猫の可愛さに勝てる人間など殆ど存在しないのだ。なんと言っても、猫はただ可愛いというただその一点のみで、人類の主人として君臨し続けている種族なのだから。

……そうして、僕らは昼休みまで、活計と遊んだり格ゲーをしたりして授業をサボった。
驚くべきことに、東条は格ゲーが信じられないぐらい上手かった。

―21―

放課後、日曜日にショッピングに出掛けると言う計画にかなりの勢いで難色を示す葵の説得にすこしばかり手こずったものの、最終的には勢いで押し切ることに成功した。
僕の考えを事細かに説明した訳ではなかったし、してもしなくても葵はどうせ反対しただろうから、まぁ、ある程度の事情説明の簡略化はしょうがないだろう。
なにより、久しぶりに皆で遊びにいくという事に宴と初音がノリ気になってくれたのが最大の援護射撃だった。女子の結束というものは、敵にまわすと恐ろしいが、味方にできればこんなにも頼もしいものはない。
まぁ、宴と初音にも僕の計画の詳細は伝えてはいなかった訳で、そういう意味では二人を騙したことになってしまうんだろうけど、正直、この段階では僕も大した計画的なものは立ててはいなかったのだ。
真崎たちの現在の定宿は突き止めたので、そこに皆で遊びにいくことで、東条が俺たちの庇護下にある、という事をはっきりと見せつけよう、という程度の思惑である。僕たちが下手な行動（例えば、人気の無いところにホイホイ着いて行くとか）さえ取らなければ、真崎たちも大衆の面前でいきなり襲いかかってきたりはしない。
だから、荒事になる可能性はまずなかったので、嬉しそうにショッピング計画を立てる初音の横顔を、僕は罪悪感もなく見つめることが出来た。

「集合して、軽くご飯を食べて、映画を見て、ショッピングして、

夕御飯食べて、カラオケして……えっと、他に何か出来ること有ったかな??……そうだ、ゲーセンだ。ゲーセン行ってプリクラ撮らなきゃ!!」

「おいおい、それじゃショッピングに殆ど時間使えねーんじゃねーの?」

「大丈夫だよ!!分単位で綿密な計画を立てれば、やって為せない事はない!!」

キラキラと目を輝かせて、指折りやりたい事を数え上げていた初音は、本当に楽しそうだった。

久しぶりの、二人きりの下校である。

宴は学祭実行委員の集まりとやらで、関屋は剣道部、葵はそもそもロッジに根を生やしているので、夕方のこの浅い時間から帰宅するのは僕ら二人だけだった。東条はクラス委員長の国吉に託して寮まで送り届けてもらうことにしたし、末摘花がああ言った以上、今日明日にバカどもが東条を連れ出しに来ることはあるまい。

その末摘花様からは何度となく着信や恫喝メールが届いていたが、全て華麗に見なかったことにした。どうやら僕を探し回っているらしいというウワサも耳にしたが、アイツの行動は大体読めている。まさか、こんな時間から僕がマジメに下校しているなどとは思いもすまい。

「でもホント皆で遊びにいくのなんて久しぶりだよね!いつ振りぐらいだろう。夏休み明けてから全く無かったんじゃない?」

「夏休みだって、遊びに行ったのか修行しに行ったのか分からんぐらい過酷な事ばっかりだったような気がするぞ……」

「まぁ、楽しかったから良いじゃない!あーまた行きたいなー、東京!今度は絶対みーくんの家に連れて行ってよね!」

「それだけは断る。お前はウチの母親の恐ろしさを知らんのだ。俺が女の子を複数人連れて帰った日には……」

「不純異性交遊だと思われて怒られる??」
「そんな生易しいもんじゃねぇ。誰と付き合ってるんだとか、どの子が本命なんだとか、どこまで進んでるんだとか、根掘り葉掘り追求されるのが目に見えてるぜ……」
「あははは、良いじゃない、適当に彼女ですって紹介しとけば。みーくんは葵ちゃんと宴ちゃん、どっちを彼女だって紹介する??」
「なんでお前自身が選択肢から抜けてるんだ。葵か宴を彼女だって紹介するぐらいなら、お前を紹介するっつーの」
「な、なんで!?」
「そんなに驚く事か?いや、当たり前だろう、常識的に考えろ。あの二人よりもどう考えても初音の方が彼女として安心して紹介出来るじゃねーか」
「そ、そうかな……」
「なにせ葵と宴は、毒舌魔女と肉体戦士だぞ。宴なんてウチの母親の半分程度には強いかもしれんレベルだし、葵だってウチの母親の半分ぐらいは弁が立つレベルなんだぞ。うっかり機嫌を損ねてケンカでもされてみろ、仲裁もできんわ」
「そんなに強いんだ、みーくんのお母様……」
「チートだ。確実に裏でチートコードを走らせてる。軍隊を相手にしても包丁一本で戦い抜けるかもしれん」
「それは流石に言い過ぎなんじゃ……」
「ソレほど恐ろしい相手ということだ。なので、我が家に女の子を連れて行く時は、名実ともに確立された彼女でないと、危険極まりないということだ」
「……彼女なら良いんだ?」
「そりゃそうだろ。彼女だったら、僕がちゃんと守るし」
「……そっかぁ」

なんだか妙な沈黙が訪れ、初音は俯いてしまった。……何故に。
なんか俺妙なこと言ったのか。また思わぬ事に失言でも仕出かして

しまったのか！？

内心で煩悶するも僕の方から問いかけるべき台詞は全く出てこず、初音も口を閉ざしてしまったので、二人して妙な緊迫感を湛えながら、国道の坂道を降りて行く。

いつも初音と分かれる三叉路に近づくと、バス停にたむろする学生の姿が見えてきた。水無瀬と長野市内を結ぶ川中島バスは1時間に一本しかなく、１８時１０分のを逃すと、次は最終である１９時１０分までやってこない。信じられないかもしれないが、最終が１９時１０分なのだ。高校1年生、すなわちバイクの免許も（殆どが）まだ取れず、長野市内まで自転車で下りで2時間近く（戻ってくるのは3時間以上）かかる僕たちにとっては、１９時１０分と言うのが、街への最後の出向時刻という事になる。

ちなみに、長野市内から水無瀬に戻ってくる最終バスが、平日で２０時４２分、土日・祭日で１９時４５分発。東京だったらようやく集合して晩飯でも食おうかという時間である。バスの所要時間は2時間もかかるので、長野に行って戻って来ようと思ったら、着いて即帰りでも１８時１０分の長野行きバスに乗らなくてはならない。実質、放課後に市内に遊びにいくなんて言うのは不可能なのだ。足が無い限り。

そう考えると、街に出かけて遊んで戻ってくると言うのが、どれだけタイトなスケジュールであるかと言うことが分かるだろう。

とまぁ、そういう訳で、学校が終わって即市内に帰る通学生徒にとってはこの時間が最もバスが込み合う時間なのだ。一応水無瀬高校は寮に下宿すると言うのがモットーになっているので、基本的に通学生はそんなには多くないのだけれど。

ゆっくりとバス停に近づくに連れ、一人ひとりの顔が識別出来るようになってくる。僕の知り合いで通学生は居ないので、人だかりの中に知り合いは……居た。

まったく予想もしていなかったが、バス停からあふれるような感じで思い思いのグループに分かれて雑談する学生たちから少しだけ

離れるようにして、九執が水無瀬川を見下ろすようにして立っていた。

思わず僕は坂道で立ち止まり、それに気が付いた初音も僕の数歩前で立ち止まると、不思議そうに振り返って僕を見上げる。

ちょうどその時、国道のカーブを曲がってバスが現れ、停留所へと滑り込んできた。待ちわびていた学生たちはバラバラと集合しながら自然と乗り込み口を先頭にした列を作り、バスが停止する頃には一例に整列し終えている。

そうして、皆がバスの中に吸い込まれ始めた次の瞬間、ふと、何かに気が付いたように、九執が僕の方を見た。

気配を感じるような距離ではない。多分、何の気なしに見た先に僕がいただけだろう。

しかし、それでも九執は、予感していたものが予感していた場所に居たかのような、ごく自然な素振りで僕を見上げ……ニヤリ、と笑みを浮かべた。

やがて、生徒が全てバスに吸い込まれ、長野への長い道のりへと出発する。路線は国道沿いだから、バスは僕たちの横を走り抜けて行ったが、九執は反対側に座ったらしく、窓の向こうにその姿は無かった。

「……あいつ、市内に住んでるのか……」

バスと行き違い、独り言のようにそうつぶやいた僕に、初音が口を開く。

「まだ、下宿先が決まってないみたい。しばらくは長野から通うって言ってたよ」

「喘息持ちで水無瀬に来ってぇのに、通学しなきゃなんねぇとは意味ねーなぁ」

「うん、九執くんもそう言ってた。早く下宿先決めて引越して来た

いって」
「ふぅん……」

その返事を合図に、再び僕らは歩き始める。
相変わらず、僕がなんで九執にこんなにも注意を惹かれるのかが全く分からん。なんか、引っかかるものがあるのだとしか言えない。
相性が悪いのだろうか？行動の一つ一つが癇に障る時があるのだ。まったく、意識しすぎかねぇ……
いつもの分かれ道に差し掛かり、「んじゃまた明日」と手を上げた僕だったが、「何か忘れてないかなー？」と初音に手を引っ張られる。そういや、ジュースをおごると言う約束をしていたのをすっかりと忘れてたぜ。
分かれ道の一番近くの自動販売機は、水無瀬中央に起立する無駄に大きくて綺麗な町役場の駐車場前にある。
ピンクの正面外壁にガラス張りの側面をした、妙にデザインチックな2階建ての町役場は、分かれ道に掛かる水無瀬橋を超えてすぐの所にある。橋の袂には「火の用心」と書かれた脳天気な幟がゆっくりと風に揺れていて、通りかかる車もなく、全くもって長閑なものである。
コカコーラとペプシのアメリカでの骨肉の広告合戦に関する資本主義的な考察、なんて言うどうでも良いことを話しながら橋を超え、駐車場の入口にまで差し掛かったところで、不意に、初音が足を止めた。
その視線の先を追うと、いつも閑散としている駐車場に立派な黒塗りのハイヤー（恐らくクラウン）が3台も停っており、今しも役場から出てきたスーツ姿の男たちを、運転手が出迎えている所だった。
にこやかに挨拶を交わす男たちを見つめ、初音が小さく震えるように、吐息を漏らす。

「お父さん……」

え、マジで??

僕は改めて男たちに視線を向けた。

あからさまに運転手と分かる3人を除くと、役場の玄関先で会話するおっさんは合計で6人。玄関の方に向かい、僕らに背を向けている3人が恐らく来客だろうから、ホストはこちらを向いている3人。

そのうち、一番年配のおっさんは僕も見覚えがあるが恐らく町長で、という事は残り二人の内のどちらかが、初音の父親という事になる。果たして、その二人は……どちらも、初音によく似ていた。

なんでだよ。兄弟なの?双子というほどには似ていないが、他人という割りには雰囲気と目鼻立ちが似通っている。つまり、どっちかが初音の父親で、もう一人はその兄弟という事??

実を言うと僕は初音の家族構成をよく知らないし、初音もあんまり家の事は話さないので、初音の父親に兄弟が居るかどうかは分からない。しかし、あの二人の内のどちらかが初音の父親だと言うのは間違いないだろう。

玄関先で社交辞令のような見送りの挨拶が交わされた後で、来客の3人はハイヤーに乗り込み、次々と発車して行く。見送りの時のお辞儀の角度やらなんやらを鑑みるに、立場としては町長と初音の父親（及びその兄弟っぽいおっさん）の方が上の様だった。

そうして、ハイヤーが僕たちの横を通り過ぎると、それを視線で追いかけていたおっさんたちも、僕たちに気が付いたようだった。

そして、そのうちの一人、右端に居たおっさんが、それまで張り付いていた笑みを瞬く間に消して、能面のような無表情を浮かべる。おっさんらはなにやら小声でこちらを見たまま会話を交わし、初音がそちらの方に会釈をするのを見て、右端のおっさんが怒声を張り上げた。

「初音ッッ！！こっちに来なさいっ！！」

ビクン、と身をすくませて、一瞬だけ僕の方に視線を走らせ「ごめんね」と呟いた後で、小走りでおっさんたちの方に駆け出す初音。なるほど、つまりは右端のおっさんが初音の父親という事らしい。んで、なんか怒ってる。

初音に合わせて僕まで小走りで駆け寄るのもなんだったが、かといってここで突立て居るのもアレだったので、ゆっくりと着いて行く僕。

一足先に父親の元に駆け寄った初音に、親父さんの怒声が炸裂していた。

「最近ちっとも家に帰ってないそうじゃないかッッ！！何を考えてるんだお前はッ！」

「まぁまぁ、鞠瀬くん」

そんな親父さんを、町長じゃない方のおっさんが軽くなだめる。

おや、苗字で呼ぶという事は、兄弟ではないのか。ってことは親戚か？？

親父さんの発言だけだと、初音も家に帰らずほっつき歩いている不良娘のようだが、葵や末摘花と違って、初音はちゃんとした寮暮らしなのだ。村に実家があるのに寮暮らしと言うのも妙な話だと思うが、どうやら一人暮らしがしたかったらしい。まぁ、分からんことも無い。

ごめんなさい、すいません、と詫びの一手の初音に対し、尚も怒気の収まらぬ様子の親父さんだったが、謎の親戚っぽいおっさんが仲裁に入る。

「これぐらいの年頃の娘さんは、なかなか家には寄り付かんもんだよ。ウチの娘だってそうだ」

そうして、初音に向き直り、ニコニコと笑みを浮かべる。

「久しぶりだねぇ、初音ちゃん。最近集会に顔を出せてないから、春の常会以来かな？」

「はい……お久しぶりです、鷲尾の叔父様」

……なんですと！！？叔父様なんて言う呼称を使っている人間を始めて見たぞ！！？クラリス専用の台詞では無かったのか！！？いや、違う、今驚くべきはそこではない。

謎オヤジが鷲尾だという事は、つまりは末摘花の父親なのだ。まぁ、確かに末摘花の面影があるといえばある。逆か。つーか、初音の親父さんはともかくとして、末摘花の親父さんはもう少し娘のどうこうに気を配った方が良いと思うが……

「家に寄り付かないのは、鷲尾くんも同じだろうに」と、町長が合いの手を入れて、苦笑する末摘花の親父さん。

そう言えば、末摘花の親父さんは確か大企業の社長さんで、なかなか家に戻ってこないという話を末摘花から聞いたことがある。どうせ女でも囲ってるんだろうとかなんとかいう話も聞かされたが、まぁ、年頃の娘のいうことだ、鵜呑みには出来まい。末摘花も結構アレで寂しがり屋なところがあるからな。

「初音さんも、あんまりお父さんを心配させちゃいけないよ。すぐに戻ってこれる所に居るんだし、たまに顔を見せてあげるだけでも親って言うのは安心するんだから」と、町長。

初音は、「はい、すいません、ありがとうございます」とプログラムされた人形のように繰り返すばかりで、顔すらろくに上げはしない。んー、大分親父さんのことが苦手みたいだなぁ。

かなりの勢いで他人事のように状況を眺めていた僕だったが、何時までも傍観者で居られる訳はなく、末摘花の親父さんが僕に向き直った。

「君は、初音ちゃんの……？」
「あ、クラスメイトです。柏木行幸と言います」
「あぁ君が柏木くんか。話は時々葵さんから聴かせてもらってるよ」
「いやーどうせロクな事言ってなかったかと思いますけど」
「そんな事はないよ。頼りになる友達だって聞かされてるよ。葵さんがあんなに他人を褒めるのは初めて聞いたね」
「またまたー。そもそもアイツが僕に頼ることなんて無いですって！」
「まぁ葵さんはそういう所があるからね」

そう言って笑う末摘花の親父さん。
大企業の社長さんだと聞いていたから、もうちょっと堅苦しい人かと思っていたが、結構話せるおっさんである。と言うか、初音にはちゃん付けなのに、葵にはさん付けなのか、この人。やっぱり、なんか難しい力関係があるようだった。
初音の親父さんはむっつりと黙り込んでいて、町長や末摘花の親父さんの手前我慢しているがまだまだ怒鳴り散らしたくてたまらない様子だった。コチラの方は、イメージしていた通りの気難しい親父さんって感じだ。

「さっきのはお客さんですか？」

場の空気も和んできたところで、世間話ついでに僕はハイヤーが走り去っていった方を振り返るようにして言った。

「あぁ、不動産関係の方だよ」と、答えたのは町長だった。「後は、土木関係の方と、林業の方」
「へー、なんか新しい建物でも作るんですか？飲食店とかレンタルビデオ屋だったら嬉しいんですけど」

「いやー、流石にレンタルビデオ屋は難しいかな」そう言って笑う町長。「特にどうと言う話ではなくて、ご挨拶に見えられたんだよ」
「そりゃ残念です。せめてコンビニでも出来れば良いんですけど」
「もっと学生数が増えて、村の人口も増えたら作っても良いって言う話もあるんだよ」
「おお、それは良いですね！是非ともよろしくお願いします！」
「ははは、その為には君たちがしっかり勉学に励んで、学校の知名度を上げないとね」

なんだか、最後は説教臭い話になってしまった。
会話の切りの良いところで、末摘花の親父さんが「じゃぁ、頑張れよ」と、何を頑張るのかイマイチ良く分からない激励をして、町長と二人して初音の親父さんを引き連れるようにして役場の中へと戻っていった。
初音の親父さんの憮然とした表情は最後まで崩れず、一方の初音も身を縮こまらせたまま、固く、心を閉ざしていた。

＊＊＊

自動販売機でリポビタンDを購入し、黙って初音に手渡し、僕らは道の駅の裏の小さな公園に移動した。一応水無瀬川を見下ろせる高台に東屋とか椅子なんかが置いて有り、立ち話をするよりかは幾分かマシという程度の場所である。
そうして、二人してリポビタンDの小さな瓶を握り締めるようにして傾けながら、黙って川面に視線を落としている内に、ポツリ、ポツリと初音が口を開き始めた。

「多分、まだ言ったこと無かったと思うんだけど、一応私お兄ちゃんが居るの」

――――そうして始まる、初音の自分語り。

「昔からね、お父さんやお兄ちゃんとはあんまり仲が良くないんだ。お母さんとはそうでもないんだけど、色々と有ってね。顔を合わせたらいつも喧嘩している感じ。だから早く一人暮らしがしたかったし、高校生になったら寮に住むってずっと前から決めてたから、大分喧嘩もしたけど、なんとか家をでることは出来た。でも、一人暮らしをするって事と、独立するって事は全く別なんだよね……」

「まーなー」

「この村に居る限り、私はやっぱり鞠瀬の家の娘で、村の人達もそういう目で私を見て来るし、私だって鞠瀬の娘であることを自覚していかなきゃいけなくなる。生まれる場所なんて言うのは自分では選べないんだから、私は鞠瀬の娘としての自分をちゃんと受け入れて行かなきゃいけないんだってことは分かってるんだけど……」

「格式って言うのは分かるけどさ……考えすぎじゃね？」

「そうかも知れない。でも、現実として見えるのは、やっぱり鞠瀬の娘としての特別な立場なんだよ」

「……特別？」

「……水無瀬にはね、古い家はいくつもあるけど、鞠瀬を含む５つの家系は、特別なの。一番重要なのは、みーくんも知っての通り、斎宮家。昔はこの村の領主筋だったし、今でも鎮守を守る大切なお役目を持っている。外から来たみーくんには実感しにくいかもしれないんだけど、斎宮家って言うのは、本当に村が総力を上げても守らなきゃいけない、大事な大事な家柄なんだよ。そして、昔から斎宮家を守るためのお役目を果たして来たのが、いわゆる四名家。土地を統括し、収穫物を納める地主の鞠瀬家。収穫物をお金に変えて、村では手に入らないものを外から購入してくる、商家の鷲尾家。兵（つわもの）を統率して、斎宮家及び水無瀬を守る武家の九杖家。そして、知識や歴史を保存し、斎宮家のお役目を補佐する知蔵の賢

木家。
この四つの家が斎宮家をお守りし、水無瀬を取りまとめて結束する。
それが、この村の昔からのしきたり」
「鞠瀬の娘が初音で、九杖の娘が宴だよな。んで鷲尾の娘が末摘花で……」
「そう、そして賢木家の一人息子が……夏くん」

ドクン、と僕の心臓が跳ね上がる。
初音の口から直接その名前を聞くのは初めてだったが……ずっと、僕がフラタニティに入ってから、葵や宴、そして初音の思い出の端々に登場する僕の前にフラタニティに居た人物。
水無瀬村連続殺人事件の犯人だと目されている、最悪の殺人鬼……賢木……夏。

「四名家はお役目だけじゃなくて、血筋でもお互いに結びついてるの。明治の手前ぐらいから、流石に閉ざされた婚姻関係って言うのは無くなってるけど、私や葵ちゃんや宴ちゃん、それに末摘花ちゃんは遠い親戚にあたるのよ。もちろん、夏くんもね」
「あぁ」と僕は得心する。だから、初音の親父さんと末摘花の親父さんはあんなにも似ていたのか。
「私たちは、生まれた時から葵ちゃんを助けるために生きて行くことを宿命付けられてる。うぅん、もちろん葵ちゃんを助けるのは嫌じゃないよ。むしろ、今の私ではなんの力にもなれないから、もっと強くならなくちゃって思ってるぐらい。葵ちゃんの抱えている重荷を一部でも肩代わりしてあげることができたら、どんなに良いか分からない。でも、逆に葵ちゃんは私たちに極力頼らないようにしてる。私たちが葵ちゃんを助けるのは別に義務でも何でもなくて、私たちがそうしたいからやっていることなのに、葵ちゃんにとってはそれもまた重荷なんだ。だけど、一人で苦しむ葵ちゃんを見ているだけなのは辛いから、出来る範囲の事で手伝えることは何でもや

ろうと思ってる。葵ちゃんが本当に助けて欲しいのは、そんな所じゃないって事ぐらいは、分かっているのにね……」

「んな事はねーだろ。お前らは十分アイツの助けになってると思うぜ」

「違うのよ……そういうのとは違うの……私の口からは絶対に言えないけど、葵ちゃんは本当に辛い思いをしてるのよ。そして、本当の意味で葵ちゃんを助けてあげれるのは……いえ、助けてあげているのは、みーくんだけなんだよ。……そんな事無いって言いたげな表情だね？でも、そうなの。側で見ていれば誰だって分かる。葵ちゃんが本当に頼りにしているのは、みーくんだけ。そして、葵ちゃんから差し出された手を握ってあげられるのも、みーくんだけ」

「……なんで？？」

「分からないかなぁ……まぁ、そういう所がみーくんらしいところだと思うけれど……葵ちゃんはね、自分の結婚相手すら自分では選べないんだよ」

「あぁ……なんかそんな話は聞いたことがある」

「そうなの。多分、恋愛ぐらいは自由に出来るかもしれないけど、結婚相手となると村の集会でちゃんと決議しないと決めることも出来ない。そして、その相手を用意するのも、やっぱり村の人達。斎宮家は何を置いても守られなくてはならないから、より良い血を残すことが一番重要で、むしろ当主の意志よりも村の決議の方が優先されるんだよ。葵ちゃん自身にすら選択肢は与えられていない。ただ、斎宮家を守り、存続して行く為だけに村に縛り付けられている。そんな葵ちゃんに比べたら、私たちのお役目なんて、全然大したことない。ないんだけど……」

だけど……の後、初音はなんと続けようとしたのだろう。

「だけど、やっぱり役目を守るのは辛い」だろうか。それとも「だけど、それでも葵は自らの役目を守り続けなければいけない」だろうか。

結局、僕は初音のその台詞の続きを聞くことは無かった。初音はその言葉を最後に完全に沈黙してしまい、ただ川面に視線を落としながら、僕が気分転換に投げかけるどうでも良いバカ話に、小さく相槌を打つのみになった。

初音の本当の気持なんて僕には分からなかったし、葵が抱えている重荷のことなんて知る由も無かったから、僕は僕に出来る精一杯のこと、つまりはまるっきり空気の読めていないアホ丸出しのムダ話を面白おかしく話して聞かせるしか出来なかった。

もちろん、初音はクスリとも笑わなかったが、別れ際に寂しそうに微笑んで、「ありがとう、みーくん」と小さく、本当に小さく、呟いた。

まったく……僕は本当に、愚か者だ。

【ＡＣＴ４】終幕

＊＊＊

【幕間～ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ～】

『鬼』

果たしてそれをなんと呼ぼうか。

姿形は人そのもの。

長い両の手足も、二つ揃えの濁った眼も、醜く潰れた鼻梁も、耳元まで避けた口蓋も、揃えとしては人と何も変わらない。

乱れ放題に生え散らかされた頭髪も、赤黒く変色した長い爪も、赤い斑点の浮かぶ皮膚も、装いとしては人と変わらない。
心に宿る感情も、人と何も変わるところはなく、意識に上るのはただ食い、排泄し、寝て、犯す。
それだけを充足させる為に幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も山を降り、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も己の腕を振り下ろしてきた。
赤黒い肝臓を喰らい、細長い絹のような髪を毟り取り、白い頭蓋をこじ開けて脳髄を啜る時、えも知れぬ愉悦がふつふつと込上がってくる。
目標を達成し、獲物を自らの手で捌き、その美味を堪能する快楽もまた、人と同じ。
そんな、人と同じこの赤黒い惚けた様な薄汚れて悪臭を放つ物体を、一体なんと呼んだらいいのだろうか？
人と変わらぬならば、いっそそれを人と呼ぶべきなのだろうか。
――否。
太古の昔より、人を冠絶してサイテイの行為を貪るそれには、定められた名が有る。
つまりは……「鬼」。
この、ペチャペチャと音を立てながら灰色の眼球をしゃぶり、両腕と眼の無くなった肢体の白い太腿の間に己を挿し入れ、揺すりながら死姦する存在を、我々は「鬼」と呼ぶのだ。
こう言う存在を呼ぶ為にこそ、「鬼」というコトバは存在するのだ。
生暖かかった肉がゆっくりと冷め、津々と森の息吹が全身を侵し始めると、「鬼」はようやく屠殺場の豚と変わらぬ姿になったヌルヌル、ネバネバとする死体を放り出した。
今回のコレはあまり美味しくなかった。
臭かったし、肉が少なくゴツゴツと骨ばってばかりいた。
「鬼」には「鬼」なりのこだわりが有り、人食と言う観点で言えば、「鬼」は今や世界でも最高峰の嗜好家と言っても良かった。

土の匂いに混じる生臭い血の匂いを嗅ぎ、お気に入りの眼球を舐め続けながら、「鬼」は考えた。
何が悪かったのだろうか？いつもと同じような獲物を攫ったはずだったが。
「鬼」の頭脳では複雑な思考は構築し得ず、すぐに「鬼」は考えるのを辞めた。
まぁ良い。獲物はいくらでも居る。山から降りれば、好きなだけ食べることが出来る。
「鬼」にとって、この世界は全てが狩猟場なのだ。
食欲と性欲が満たされ、十分に満足しきった「鬼」は膝を抱えるようにして丸くなって巨体を横たえ、やがてゆっくりと微睡みの中に落ちた。

――そして、そうやって「鬼」が眠るのを見とった後で「やれやれ」と肩をすくめて……僕は村へと戻って行った。

――

【ＡＣＴ５】に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3894z/

紅葉狩の刻

2011年12月13日08時53分発行